

三田市

か わ よ け ふ じ の き

川除・藤ノ木遺跡

—武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

第2分冊

1992年3月

兵庫県教育委員会

本文目次

第6節	IV区の調査	497
1.	概要	(山田) 497
2.	弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬) 499
3.	古墳時代後期の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬) 519
4.	平安時代以降の遺構と遺物	(山田・甲斐・高瀬) 585
第4章	自然科学的方法による調査・分析	771
第1節	川除・藤ノ木遺跡出土木製品の樹種	(島地 謙・林 昭三) 771
第2節	川除・藤ノ木遺跡出土の碧玉製管玉・玉原材料の蛍光X線分析による原材産地分析	(藁科哲男・東村武信) 787
第3節	川除・藤ノ木遺跡出土のサヌカイト製石器の石材産地分析	(藁科哲男・東村武信) 799
第4節	川除・藤ノ木遺跡出土須恵器の産地推定	(三辻利一) 805
第5節	川除・藤ノ木遺跡出土土器の胎土の科学分析	(安田博幸・森 眞由美) 811
第6節	川除・藤ノ木遺跡の大型植物化石	(南木睦彦) 815
第5章	遺物のまとめ	
第1節	弥生時代～古墳時代前期の土器	(高瀬) 825
第2節	古墳時代後期の土器	(甲斐) 845
第3節	平安時代から鎌倉時代にかけての土器	(山田) 853
第4節	木製品	(甲斐) 891
第5節	石器	(高瀬) 895
第6節	鉄製品	(山田) 897
第6章	遺構のまとめ	
第1節	弥生時代～古墳時代前期	(高瀬) 899
第2節	古墳時代後期	(甲斐) 904
第3節	平安～鎌倉時代	(山田) 906
第7章	遺跡の検討	
第1節	竪穴住居跡について	(甲斐) 911
第2節	円形周溝墓について	(甲斐) 929
第3節	溜池について	(山田) 935
第4節	井戸について	(山田) 939
第5節	平安時代～鎌倉時代にかけての掘立柱建物群について	(山田) 943
第8章	総括	
第1節	調査の成果	(山田) 965
第2節	三田盆地における遺跡の位置	(山田) 970



第479図 IV区遺構

第6節 IV区の調査

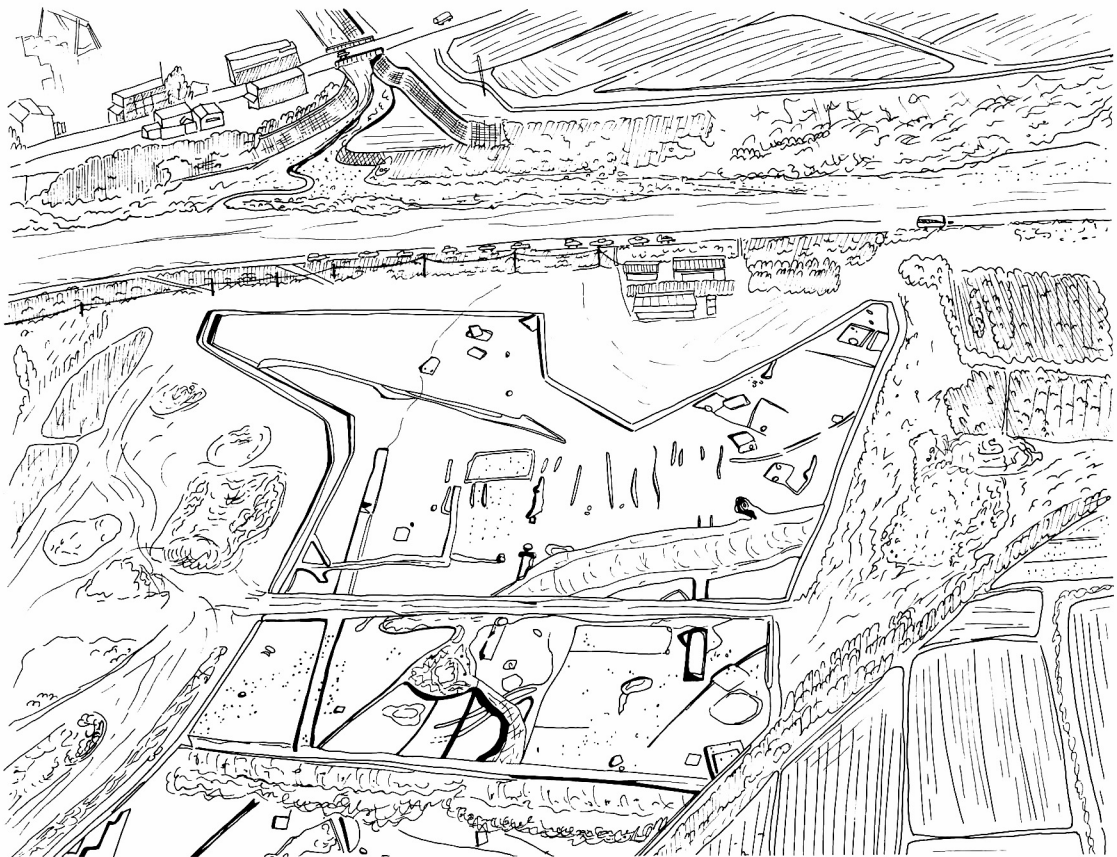
1. 概要

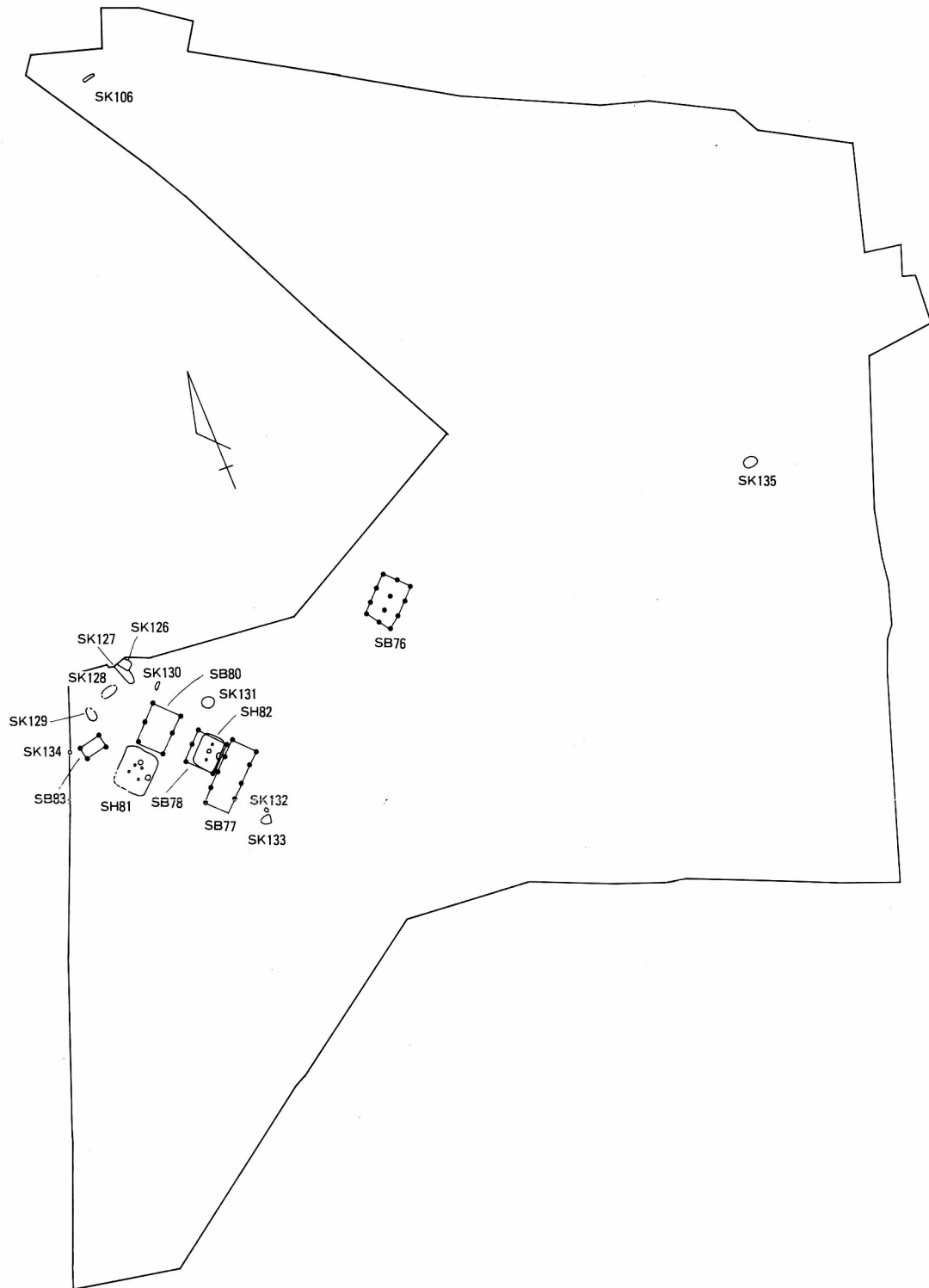
位置 今回調査を行ったなかで最も西北に位置する調査区である。また、調査面積は9,300㎡と4地区のなかで最も広い面積である。

立地 本調査区は、小微高地dのほぼ中央部を中心に立地するが、一部南西部については低地となっている。調査区のほぼ中央西側が小微高地の最も高い所にあたる。

遺構はこの小微高地の中央部を中心にかなりの密度で検出された。また、調査区南西部の低地部においては、平面的には調査できなかったが、土層断面の観察により水田土壌層が数面確認できた。

検出した遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代中期～鎌倉時代初頭と3時期に分かれる。内容は、前2者については住居跡、後者については掘立柱建物を主体とした屋敷地を中心としたものである。とりわけ、本調査区においては、古墳時代後期と平安時代中期～鎌倉時代初頭の遺構が顕著である。なかでも、後者の時期については、掘立柱建物・溝・井戸を中心に多くの遺構が検出されたが、遺物についても当該期が最も多く出土している。逆に弥生時代の遺構はわずかで、時期的にも後期に限られ、中期のものは確認できなかった。





第480図 IV区弥生時代～古墳時代前期の遺構

2. 弥生時代～古墳時代前期の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SH81 (図版143・148)

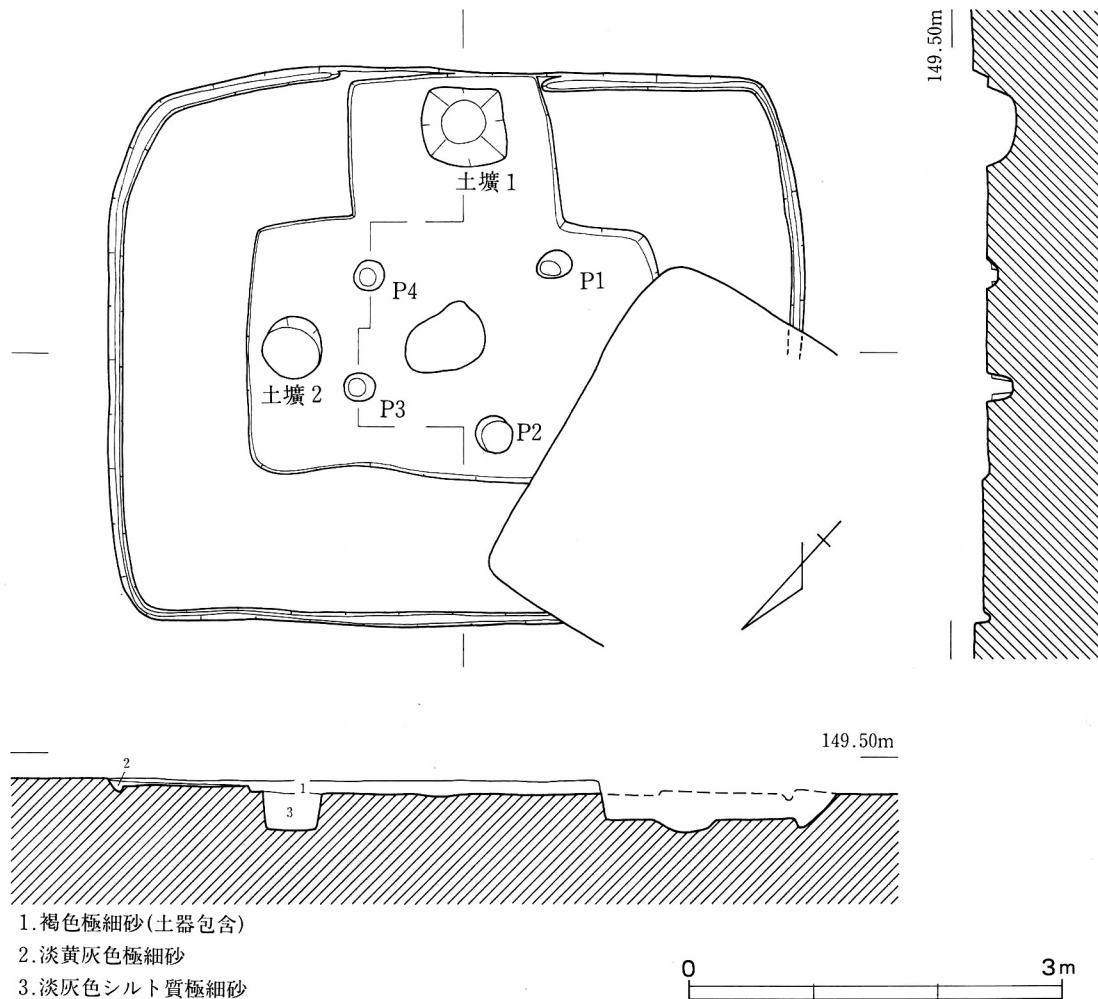
検出状況 IV区の南西部に位置している。当住居跡のすぐ南側には小微高地dの落ちぎわがある。したがって小微高地dの南端部で検出されたことになる。他の遺構との切り合い関係ではSH80に西側を切られている。

形状・規模 平面形は長方形を呈している。規模は南東辺が4.70m、南西辺がSH80に切られているため明らかではないが、検出された長さのみでいえば、1.80m、北西辺がこれも切り合いのために正確ではないが、検出された長さは3.20m、北東辺が4.10mとなる。

検出面から床面までの深さは10cm、床面の標高は149.20mである。床面積は切り合いのために明らかではないが、推定で21.2㎡程度であったとおもわれる。

埋土 土壌の部分を除いて2層が堆積している。上層には土器・炭化物を含む淡褐色極細砂が、下層には淡黄灰色極細砂の堆積が認められた。

屋内施設 ベッド・周壁溝・柱穴・中央土壌・土壌が検出された。



第481図 SH81

第6節 IV区の調査

ベッド ベッドの平面形は南東辺の部分について中央部の約1.6mにわたって切れているほかはすべての辺について検出された。規模は幅が0.95~1.10mで、床面との比高は約5cmである。
ベッド部分の面積はSH80との切り合いのため正確ではないが、推定で約12.5㎡である。対床面積比は59.1%である。

周壁溝 南東辺のベッドの切れている部分を除いて各辺で検出された。
床面での幅は10cm、底部での幅は4cmであり、床面からの深さは5cmを測る。

柱穴 4穴検出された。位置はいずれもベッドで区切られた内側で検出された。
これらは、主柱穴を構成している柱であると考えているが、P2以外の柱穴は住居跡の平面形とほぼ相似形を呈しているのに対し、P2のみはやや外れた場所に位置しているため、全体として歪な方形を呈している。

P1は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは14cmである。P2は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径25cm、床面からの深さは10cmである。P3は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは18cmである。P4は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは9cmである。

柱穴間の距離は、P1~P2間は1.40m、P2~P3間は1.18m、P3~P4間は0.88m、P4~P1間は1.45mである。

中央土壌 当住居跡のほぼ中心部に位置している。各柱穴のそれぞれ対角となるものをむすんだ交差点上に位置している。

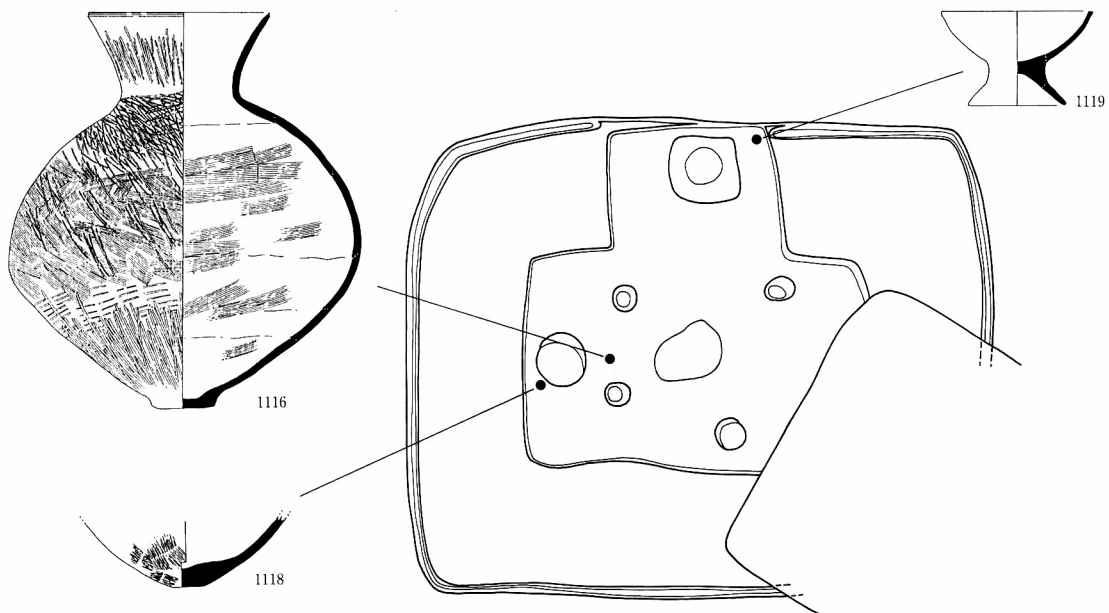
平面形はややいびつな楕円形を呈している。規模は長軸方向に0.64m、短軸方向0.45mを測る。深さは床面から約5cmである。

埋土は炭化層の1層のみである。土壌の底部は焼成のためか赤化している。

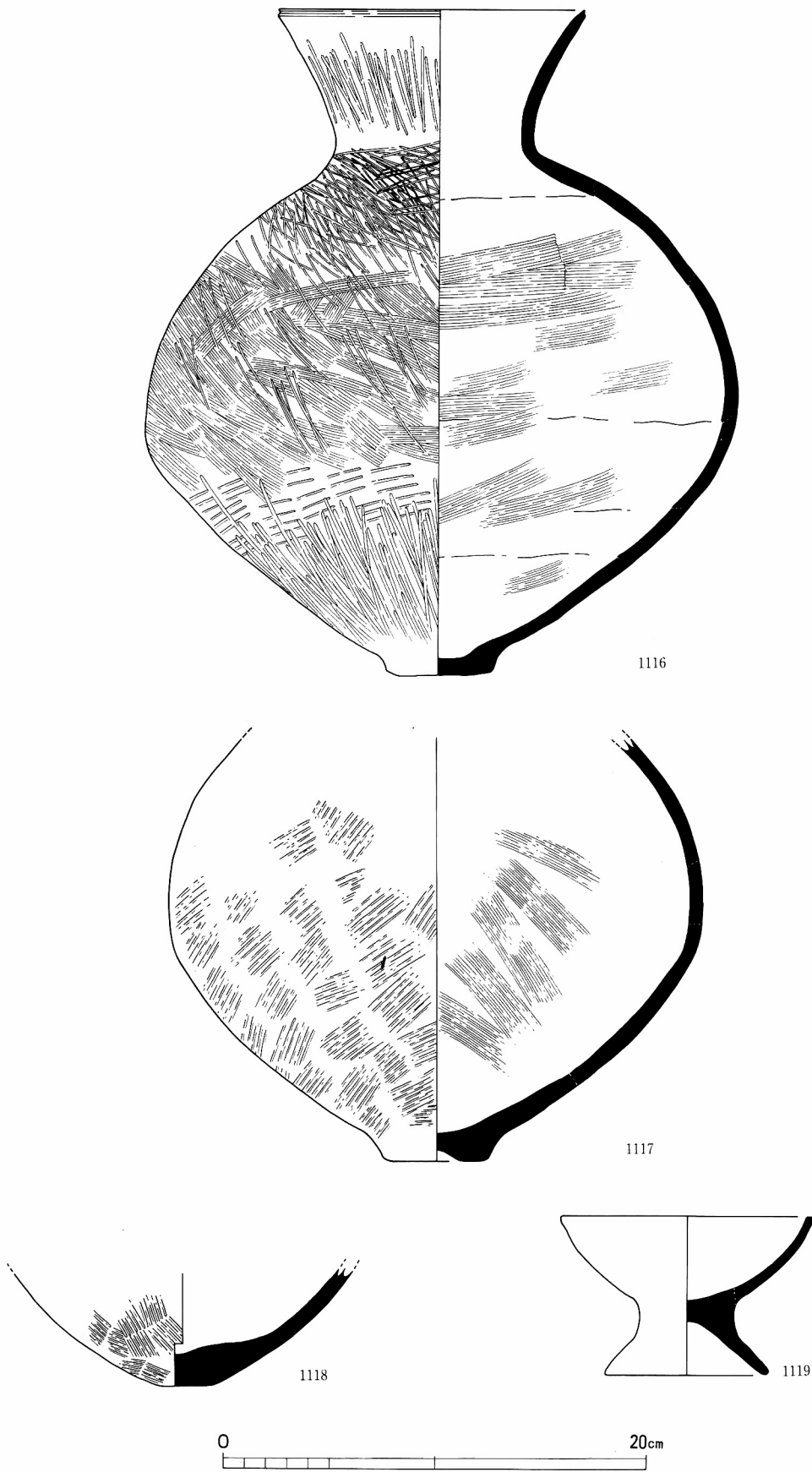
面積は0.3㎡、対床面積比は1.4%である。

土壌 住居跡の南東部と北東部で土壌を2基検出している。

土壌1 南東辺の壁際で検出されたものである。この部分のみはベッドの切れている場所である。



第482図 SH81土器出土位置



第483図 SH81出土土器

第6節 IV区の調査

したがってベッドで区切られた床面の形状は凸形をしている。平面形は曲線的な部分もみられるが基本的には方形を呈している。規模は長軸方向に68cm、短軸方向に60cmを測る。検出面からの深さは24cmである。

土壌 2 土壌 1 より北側に約1.65m離れて検出された。北東辺の壁より約1.25m内側のベッドに区切られた床面上に存在している。平面形はほぼ円形を呈している。規模は直径50cmである。検出面からの深さは27cmである。

これらの2基の土壌のうち土壌 1 は貯蔵穴と考えている。

出土遺物 土器のみが出土している。そのうち図化できたものは3点である。

出土器種 壺・甕・高杯・鉢の各器種が出土している。

壺 1点のみの図化である。1116はほぼ完形の短頸壺である。体部中位以下に最大径をもつものである。口縁部は直線的に外方にのびている。口縁端部に1条の擬凹線を施している。外面は体部下位にタタキのちへラミガキ、中位にハケ、上位にへラミガキと比較的精緻な造りの土器である。

甕 1点のみの図化である。1118は底部のみの出土である。外面にタタキを施している。底部は丸底化の傾向を示している。

高杯 1点図化している。1119は椀形の杯部に中空の脚部をもつものである。口縁端部は水平に面をもっている。脚部は短い。

鉢 図化していないが、台付きのものが出土している。

時期 川除6期である。

第182表 SH81出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1116	壺	口径 : (14.5) 底径 : 5.0 器高 : 31.2 頸径 : 9.4 体部径 : 28.0	外面 : 口縁部ヨコナデ、のち縦へラミガキ、端部に擬凹線1条、体部上位~中位左上がり8条/cmハケ、のち縦へラミガキ、下位3条/cmタタキ、のち縦へラミガキ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部8条/cmヨコハケ、粘土紐痕	外面 : にぶい橙 内面 : 灰	口縁部~体部約3/4	
1117	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残19.7 頸径 : 体部径 : (25.2)	外面 : 体部4条/cmの右上がりタタキ、一部ナデで消されている 内面 : 弱い左上がりハケ	外面 : にぶい橙 内面 : にぶい黄橙	体部~底部約1/2	
1118	甕	口径 : 底径 : 2.4 器高 : 残5.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部5条/cmの左上がりタタキ 内面 : ナデ	外面 : 明赤褐 内面 : 赤黒	体部~底部わずか	
1119	高杯	口径 : (12.0) 底径 : 7.6 器高 : 8.0 脚柱径 : 4.5 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部タタキ、のちナデ、脚柱部ヨコナデ、脚端部ユビオサエ、のちヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ナデ、脚端部ユビオサエ、のちヨコナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	底部完存 口縁部~体部わずか	

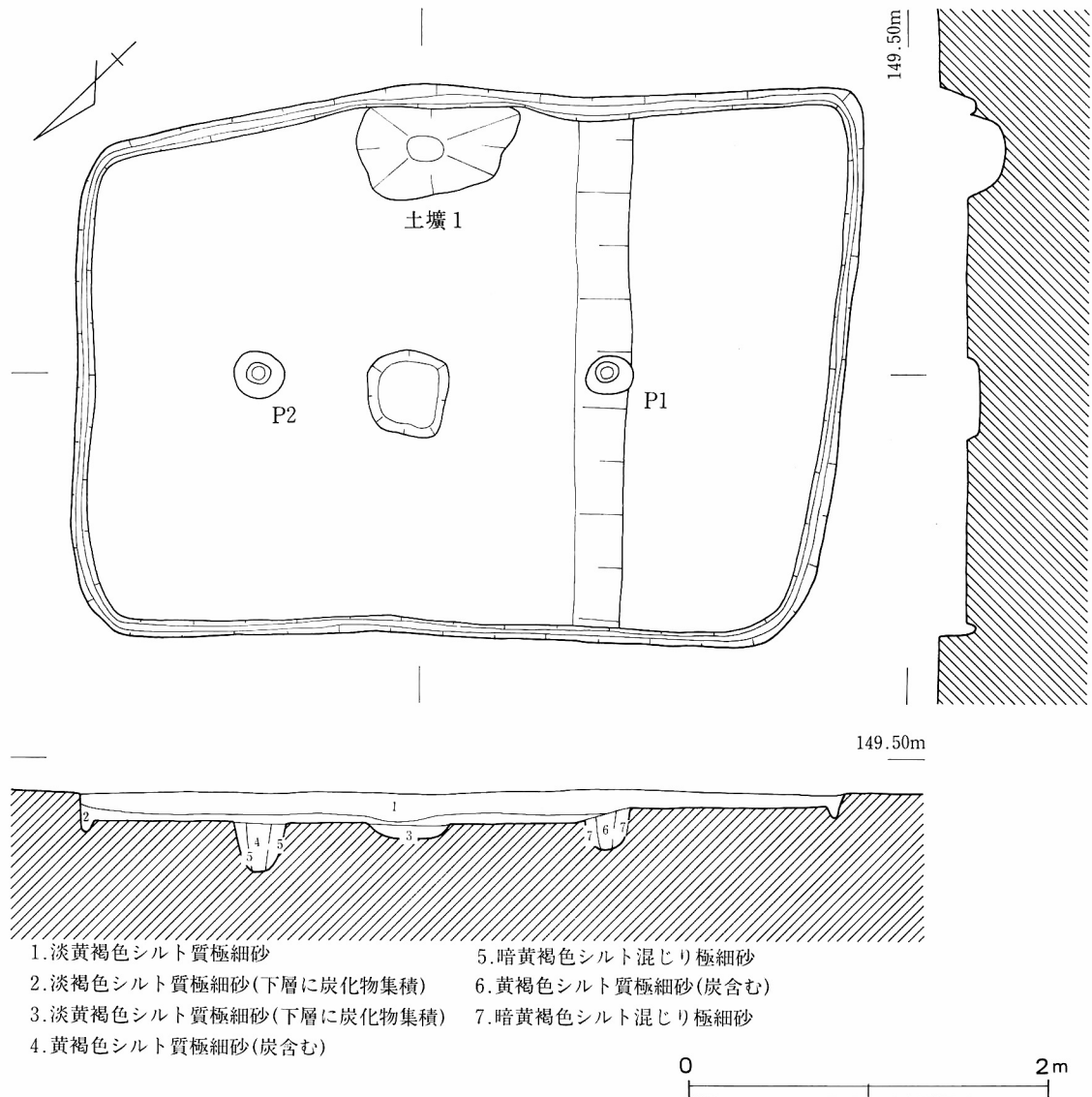
SH82 (図版132・148)

検出状況 IV区の南西部に位置している。当住居跡の南側には小微高地dの落ちぎわがある。したがって小微高地dの南端部で検出されたことになるが、SH81よりは北側に位置している。他の遺構との切り合い関係ではSH80に西側を切られている。

形状・規模 平面形はいびつな形状ながら長方形を呈している。

規模は南東辺が4.15m、南西辺が2.80m、北西辺が3.70m、北東辺が2.60mとなる。

検出面から床面までの深さは15cm、床面の標高は149.15mである。床面積は11.05㎡である。



第484図 SH82

る。

埋土 土壙の部分を除いて2層が堆積している。上層には淡黄褐色シルト質極細砂が、下層には下部に炭化物の集積している淡褐色シルト質極細砂の堆積が認められる。

屋内施設 ベッド・周壁溝・柱穴・中央土壙・土壙が検出された。

ベッド 住居跡の床面の南西側でのみ検出された。
 規模は0.9~1.18mの幅をもち、床面との比高差は約10cmである。
 ベッドの面積は3.08㎡で、対床面積比は27.9%である。

周壁溝 壁際で全周して検出された。

床面での幅は8cm、底部での幅は3cmであり、床面からの深さは5cmを測る。

柱穴 2穴検出された。この他に柱穴は検出しておらず、したがってこの2穴が主柱穴を構成していると考えられる。よって当住居跡は2本柱の構造を持つ住居跡であることが確認された。

位置はP1が南西壁より約1.30m内側のベッドの落ちぎわで検出されている。P2は北

東壁より約1.00m内側に入ったところで検出している。

P 1は、掘り方の直径27cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは20cmである。P 2は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは36cmである。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が1.92mである。

柱穴内の埋土が確認されている。P 1は2層に分層できる。柱痕の部分には炭化粒を含む黄褐色シルト質極細砂、掘り方の部分には暗黄褐色シルト混じり極細砂の堆積が認められる。P 2も2層に分層できる。柱痕の部分には炭化粒を含む黄褐色シルト質極細砂、掘り方の部分には暗黄褐色シルト混じり極細砂の堆積が認められる。

中央土壌 当住居跡のほぼ中心部に位置している。柱穴どうしを結んだ直線上に位置しているが、P 2の方にやや近い位置で検出している。

平面形はややいびつな方形を呈している。規模は長軸方向に0.46m、短軸方向0.43mを測る。深さは床面から約8cmである。

埋土は1層の土層のみが認められる。下部に炭化物の集積している淡黄褐色シルト質極細砂が堆積している。

面積は0.18㎡、対床面積比は1.6%である。

土壌 1 住居跡の南東部の壁ぎわで土壌を検出している。中央土壌と区別するために土壌 1 と命名している。

土壌 1 は南東辺の壁際のほぼ中央部に位置している。平面形は不整形を呈しているが、強いていえば楕円形を指向しているようである。規模は長軸方向に90cm、短軸方向に60cmを測る。検出面からの深さは20cmである。

この土壌は貯蔵穴であると考えている。

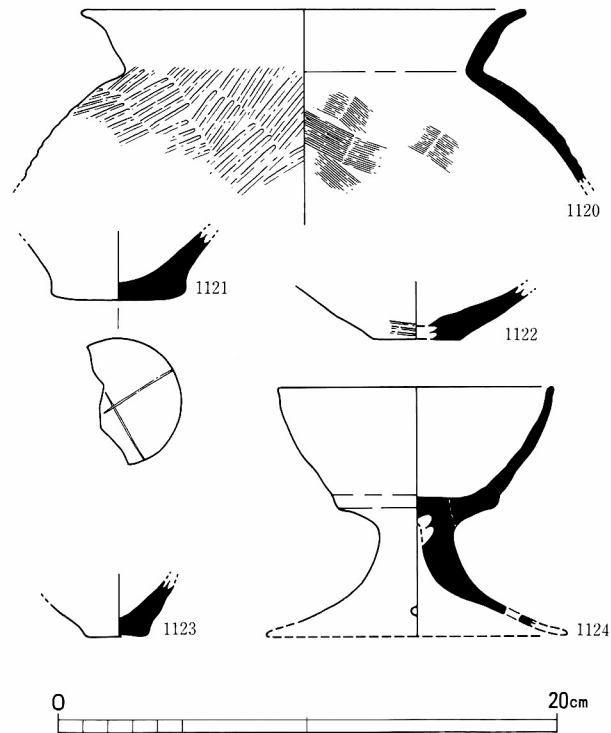
出土遺物 土器のみが出土している。そのうち図化できたものは5点である。

出土器種 壺・甕・高坏・鉢の各器種が出土している。

壺 図化していないが、底部が1点出土している。

甕 4点図化している。口縁部から体部上位にかけてのものが1点と底部から体部下位にかけてのものが3点である。

1120は口縁部から体部上位にかけてのものである。体部から、「く」の字状にのびる口縁部をもつ。口縁端部はさらに外方にのびしている。調整は体部には右上がりのタタキ、内面には左



第485図 SH82出土土器

上がりのハケを施している。口縁部は内外面ともに横方向のナデである。

高坏 1点図化している。

1124は口径が比較的小さく、坏部が深い高坏である。口縁部と体部との境は明瞭である。脚部は裾端部を欠失しているが口縁部径よりも裾部径が大きくなるようである。なだらかに開く裾部をもっている。

時期 川除6期である。

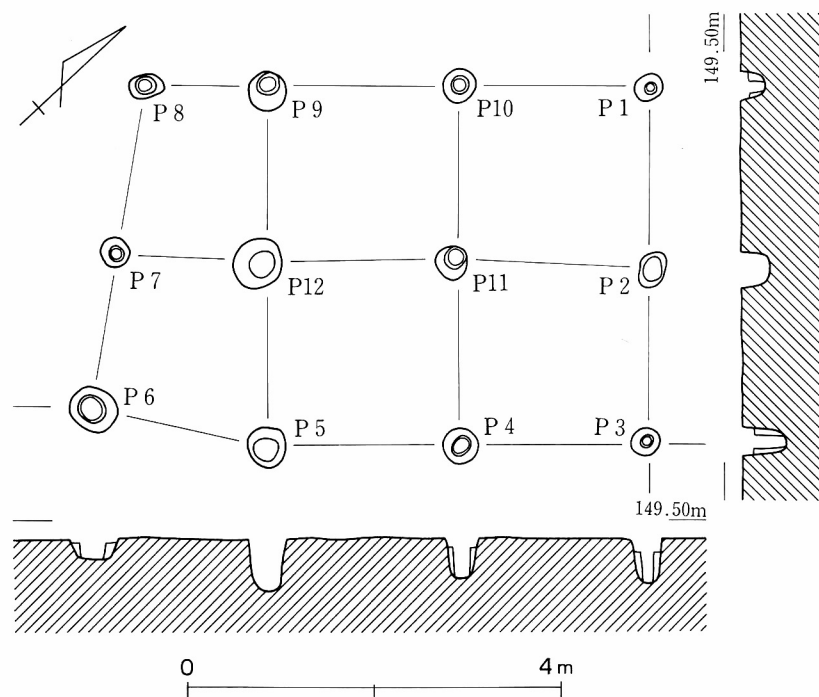
第183表 SH82出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1120	甕	口径 : (17.6) 底径 : 器高 : 残6.9 頸径 : (14.4) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部3条/cm右上がりタタキ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ヨコハケ	外面 : にぶい 橙 内面 : 灰白	口縁部1/4 体部わずか	
1121	甕	口径 : 底径 : (5.0) 器高 : 残2.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 底面にへら描きあり 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	底部約1/2 体部わずか	
1122	甕	口径 : 底径 : 3.6 器高 : 残2.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 横タタキ(単位不明) 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 黄橙 内面 : 橙	体部~底部 わずか	
1123	甕	口径 : 底径 : (2.2) 器高 : 残2.2 頸径 : 体部径 :	外面 : ナデ 内面 : ナデ	外面 : にぶい 橙 内面 : 浅黄橙	底部完存 体部わずか	
1124	高坏	口径 : (10.8) 底径 : 器高 : 残9.5 脚柱径 : 3.0 体部径 :	外面 : 脚部に円孔あり(個数は不明) 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	脚端部欠 他は約1/2	

(2) 掘立柱建物

SB76

検出状況 IV区中央西端、小微高地dのほぼ中央に位置し、SD128・SD129に平行する。



第486図 SB76

第6節 IV区の調査

形状・規模 N-46°-Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の建物である。規模は桁行方向が5.70m、梁行方向が3.64mである。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.90m、梁行が1.82mである。最も南の柱列がやや傾いており、他の柱列と平行していない。

なお、面積は20.7㎡を測る。

柱穴 柱穴の掘り方は円形であり、その直径は28~56cm、柱痕の直径は11~28cmである。深さは24~56cmを測る。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物の出土をみななかったため、時期の決定は困難であるが、柱穴埋土の類似や、弥生時代の住居跡であるSH81・SH82と方向を同じくすることから、川除6期と考えておきたい。

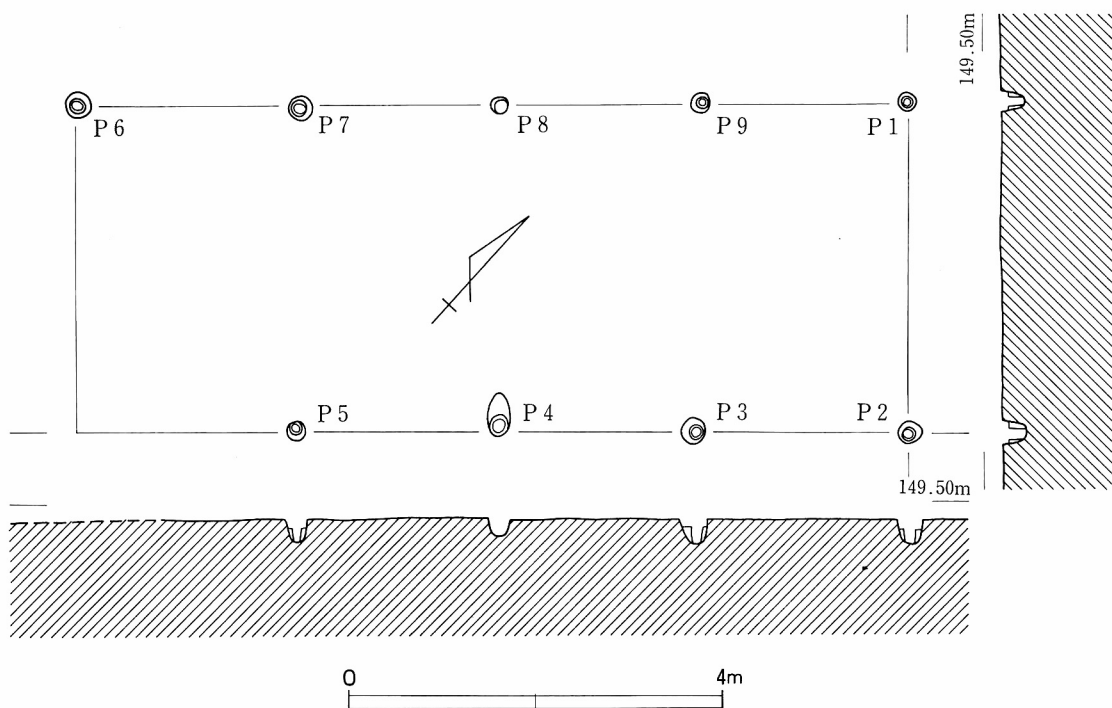
SB77

検出状況 IV区の南西部で検出された。微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の縁辺にあたる。SH82のすぐ脇に存在している。

形状・規模 N-42°-Eに棟軸の方向をとる桁行4間、梁行1間の掘立柱建物である。SH83と切り合っているため南西隅の柱を欠失している。したがって切り合い関係はSH83に切られていることになる。

規模は桁行方向が8.86m、梁行方向が3.40mと確認された。面積は30.12㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.22m、梁行が一間であるため全長と同じ寸法で3.40mである。

柱穴 柱穴の掘り方の直径は20~28cmである。深さは27~35cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~14cmである。深さは27~35cmを測る。



第487図 SB77

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礫詰のようなものの存在も確認されなかった。

- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、中世の掘立柱建物とは方向が同一ではないこと、古墳時代の住居であるSH83に切られていることなどから、当遺構は川除6期のものと考えたい。

SB78

検出状況 IV区の南西部で検出された。微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の縁辺にあたる。SH82と重複して検出されている。SB77のすぐ北西側に位置している。

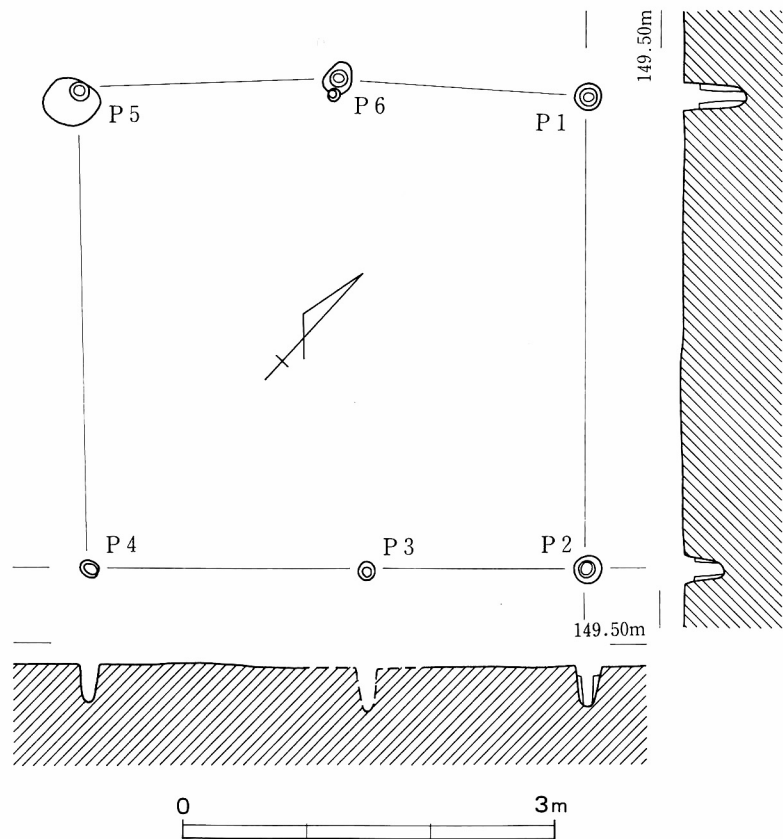
形状・規模 N-43°-Wに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が4.05m、梁行方向が3.78mと確認された。面積は15.31㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.02m、梁行が一間であるため全長と同じ寸法で3.78mである。

柱穴 柱穴の掘り方の直径は20~50cmである。深さは21~52cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は12~14cmである。深さは21~52cmを測る。P1・2・5・6は柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡が確認されたが、P3・4については掘り方のみの確認にとどまっている。

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礫詰のようなものの存在も確認されなかった。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、中世の掘立柱建物とは方向が同一ではないことから川除6期のものであると考えているが、SH82との先後関係は明らかではない。



第488図 SB78

SB80

検出状況 IV区の南西部で検出された。微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の縁辺にあたる。SH81のすぐ北東側の、SB78の北西側に位置している。したがってSB77・78・80とほぼ平行に並んで検出された。

形状・規模 N-46°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の掘立柱建物である。

規模は桁行方向が5.20m、梁行方向が3.70mと確認された。面積は19.24㎡である。

柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が2.60m、梁行が1.85mである。

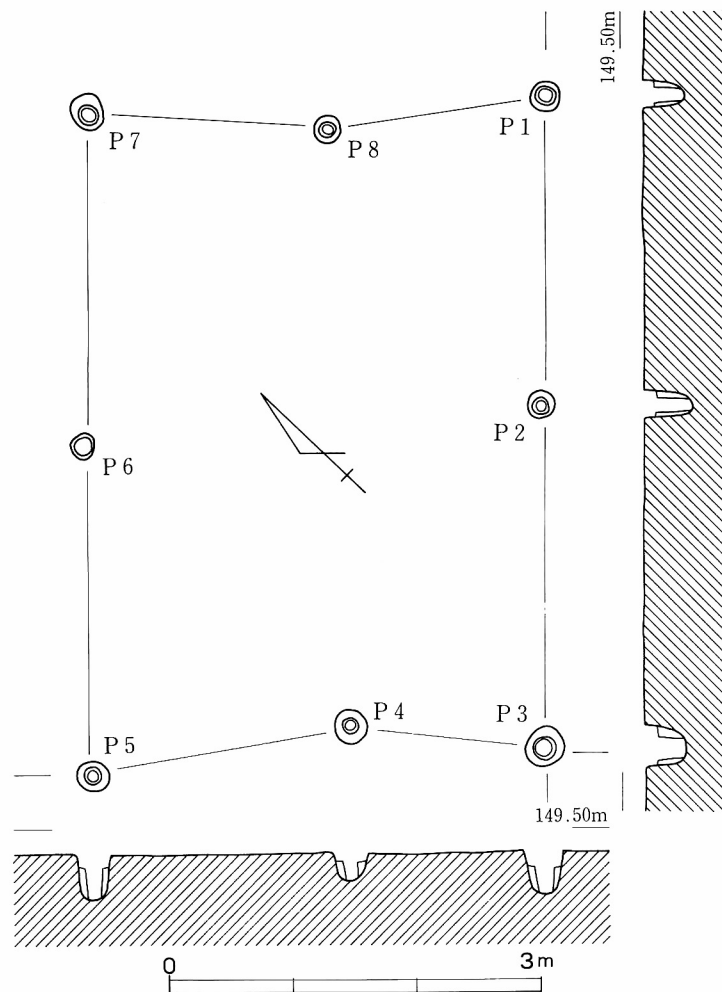
平面形はほぼ長方形を呈するが、妻柱のうちの中央の柱がそれぞれ約20cm内側にはいったところで検出されている。東柱の1穴は検出されていない。

柱穴 柱穴の掘り方の直径は22~32cmである。深さは12~46cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は11~18cmである。深さは12~46cmを測る。内側にはいつている妻柱については他の柱に比べてその深さが浅く検出されている。

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。

出土遺物 遺物は出土していない。

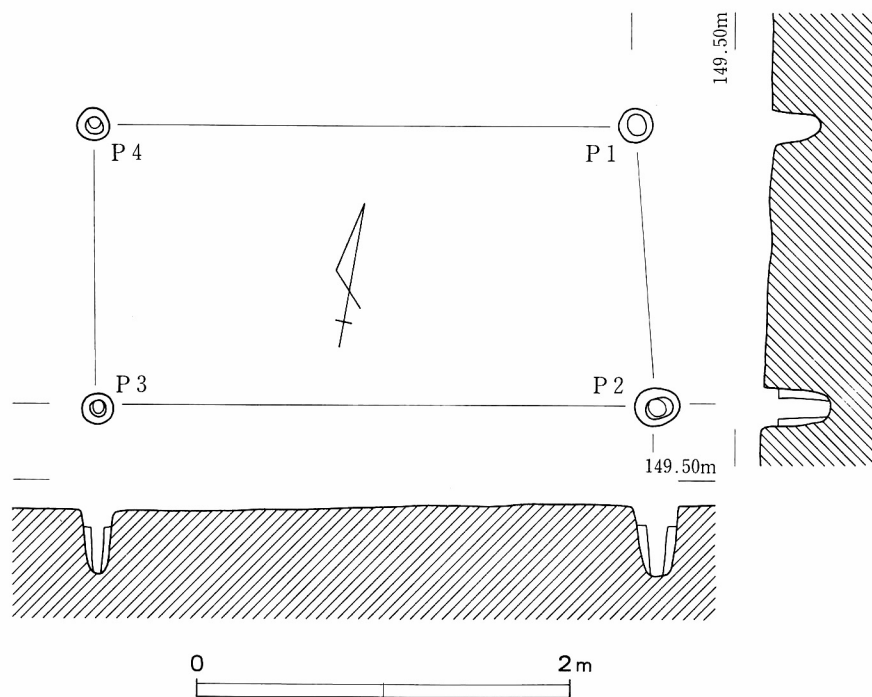
時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、中世の掘立柱建物とは方向が同一ではないことから川除6期のものであると考えている。



第489図 SB80

SB83

- 検出状況** IV区の南西隅で検出された。微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の縁辺にあたる。SH80のすぐ北側の、SB80の西側に位置している。SB77・SB78・SB80とは離れて検出されている。
- 形状・規模** N-36°-Wに棟軸の方向をとる桁行1間、梁行1間の掘立柱建物である。規模は桁行方向が2.95m、梁行方向が1.50mと確認された。面積は19.24㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は全長の距離と同じである。平面形はほぼ長方形を呈するが、P2の柱穴がやや外側に突出しているために、やや台形を呈する。
- 柱穴** 柱穴の掘り方の直径は17~20cmである。深さは22~33cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~14cmである。深さは22~33cmを測る。P2・P3・P4については柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡が検出されたが、P1については掘り方のみの検出である。柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石、礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、中世の掘立柱建物とは方向が同一ではないこと、弥生時代のものであると考えているSB77・SB78・SB80とも方向が違うこと、古墳時代の住居跡であるSH80と同一方向であることから、当遺構は古墳時代のものである可能性も考えられる。



第490図 SB83

(3) 土壙

SK126

検出状況 IV区の南西部で検出している。小微高地dの南西側の縁辺に位置している。SK127と重複しているが前後関係は不明である。

形状・規模 形状は長方形か楕円形を呈すると思われるが、切り合いの部分は不鮮明であるためどちらかは不明である。

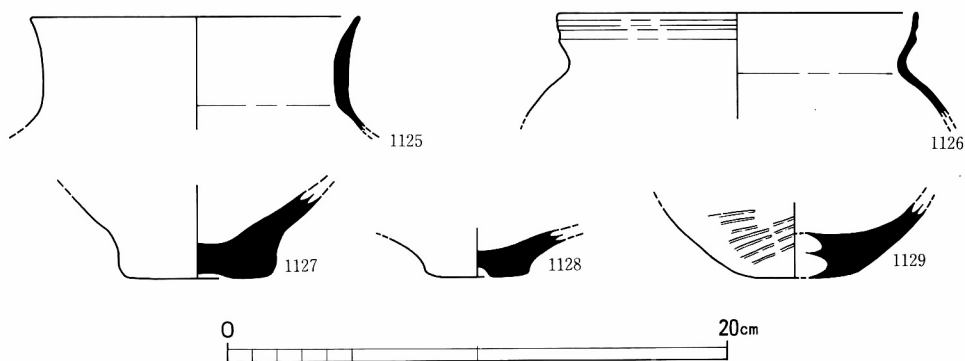
検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は長軸方向に180cmであるが、調査区外にも遺構はのびている。短軸方向は115cmである。土壙底では長軸方向に115cm、短軸方向に67cmである。検出面からの深さは最も深いところで48cmで、断面形状はU字形を呈している。底の部分の形状は楕円形を呈している。

出土遺物 土器のみが出土している。そのうち図化しているものは5点である。

壺 短頸壺を図化している。口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリを施している。他のものは底部である。ドーナツ状を呈している。

甕 口縁部と底部が出土している。口縁部は端部を上方につまみ上げている。外面には弱い擬凹線を施している。丹波地方の影響がみられる。

時期 川除6期である。



第491図 SK126出土土器

第184表 SK126出土土器観察表

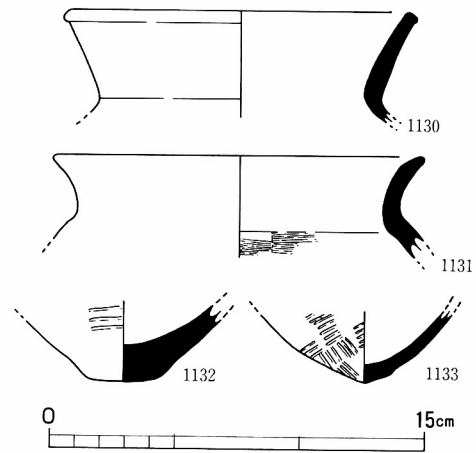
番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1125	壺	口径 : (13.2) 底径 : 器高 : 残4.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部上位ヘラケズリ	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部1/5	
1126	甕	口径 : (14.2) 底径 : 器高 : 残4.2 頸径 : (13.4) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部磨滅のため調整不明。口縁部弱い擬凹線 2条 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : 灰	口縁部~体 部1/8以下	
1127	壺	口径 : 底径 : 5.8 器高 : 残3.5 頸径 : 体部径 :	外面 : } 磨滅のため調整不明 内面 : }	外面 : 灰 内面 : 浅黄橙	底部完存 体部わずか	二次焼成
1128	壺	口径 : 底径 : 4.1 器高 : 残1.9 頸径 : 体部径 :	外面 : } 磨滅のため調整不明 内面 : }	外面 : にぶい 黄橙 内面 : #	底部完存 体部わずか	二次焼成
1129	甕	口径 : 底径 : (4.6) 器高 : 残3.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部3条/cm右上がりタタキ 内面 : 底部ユビオサエ	外面 : 赤橙 内面 : 暗灰	底部約1/2	スス付着

SK127

検出状況 IV区の南西部で検出している。小微高地dの南西側の縁辺に位置している。SK126と重複しているが前後関係は不明である。

形状・規模 形状は楕円形を呈すると思われるが、SK126と切り合っていることや、遺構が調査区外にのびていることから、正確な形状は明らかではない。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に310cmであるが、調査区外にも遺構はのびている。短軸方向は145cmである。土壇底では長軸方向に215cm、短軸方向に86cmである。検出面からの深さは最も深いところで25cmで、断面形は皿形を呈している。



第492図 SK127出土土器

埋土 2層が堆積している。上層には土器を含む灰褐色シルト質極細砂、下層には淡褐色シルト質極細砂の堆積が認められる。

出土遺物 上層の埋土中より土器のみが出土しているが、図化しているものは4点である。

壺 1点を図化している。直線的に外傾する比較的短い口縁部をもつ直口壺である。他に図化していないが、口縁端面に波状文を施している広口壺の口縁部が出土している。

甕 3点を図化している。口縁部から体部上位にかけてのものが1点と、底部から体部下位にかけてのものが2点である。1131は口縁部内外面を横方向のナデで仕上げ、体部外面には不定方向ナデ、内面には横方向のハケを施している。底部から体部にかけてのものは、底部が平底のものと尖底のものがみられる。

高坏 図化していないが脚部2点が出土している。

時期 川除6期である。

第185表 SK127出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1130	壺	口径 : (13.5) 底径 : 器高 : 残4.2 頸径 : (11.3) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、他は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ、他は磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : にぶい 橙	口縁部1/8	
1131	甕	口径 : (14.5) 底径 : 器高 : 残4.1 頸径 : (12.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部不定方向ナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部10条/cmヨコハケ	外面 : 浅黄橙 内面 : 灰白 褐灰	口縁部1/8 以下	
1132	甕	口径 : 底径 : (2.5) 器高 : 残3.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部磨滅激しいが部分的にタタキ残る、底面ナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 赤褐 内面 : 灰白	底部ほぼ完 存	
1133	甕	口径 : 底径 : 器高 : 残2.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部5条/cmタタキ 内面 : 体部~底部ヘラナデ	外面 : 灰白 内面 : 橙	底部完存	

SK128

検出状況 IV区の南西部で検出している。小微高地dの南西側の縁辺に位置している。SH79と重

第6節 IV区の調査

複している。SH79に切られて検出されているため、これより新しい時期の遺構であると考えられる。

形状・規模 形状は不整形を指向していると思われるが、SH79に切られていることから正確な形状は明らかではない。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に190cm、短軸方向に33cmである。土壌底では長軸方向に170cm、短軸方向に20cmである。検出面からの深さは最も深いところで25cmで、断面形は皿形を呈している。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。壺・甕・高坏が出土しているが、いずれも細片のため図化できなかった。

- 壺** 1点、口縁部のみが出土している。
- 甕** 2点出土している。平底の底部と体部である。
- 高坏** 1点脚部のみが出土している。
- 時期** 川除6期である。

SK129

検出状況 IV区の南西部で検出している。小微高地dの南西側の縁辺に位置している。SH79と重複している。SH79に切られて検出されているため、これより新しい時期の遺構であると考えられる。

形状・規模 形状は不整形を呈しているが、SH79に切られているところをのぞいて復元すれば楕円形を指向しているようである。

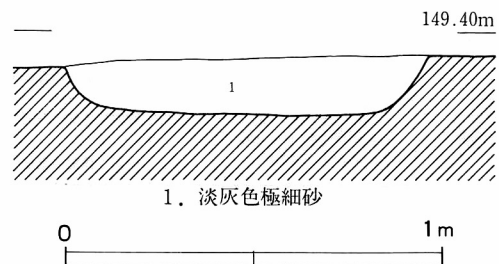
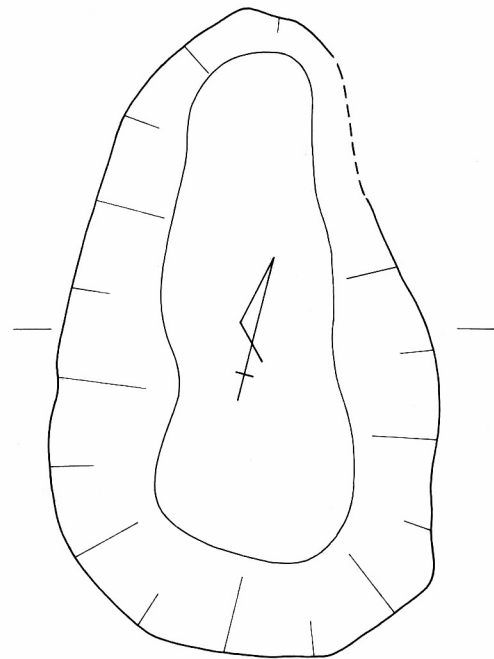
検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に169cm、短軸方向に最も広いところで105cmである。土壌底では長軸方向に132cm、短軸方向に55cmである。検出面からの深さは最も深いところで23cm、浅いところで20cmで、断面形は皿形を呈している。

長軸の方向はほぼ東西方向を指している。

埋土 1層のみの堆積である。淡灰色極細砂の堆積が認められた。

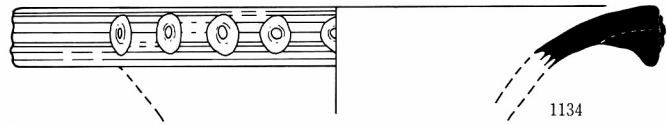
出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。壺と器種不明の小片が出土しているが、図化しているものは壺の1点のみである。

- 壺** 広口壺である。口縁部のみ出土である。口縁端部は下方に貼り付けて垂下させてい

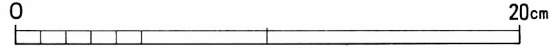


第493図 SK129

る。口縁端面には擬凹線を施し、5個の円形浮文を貼り付けている。胎土は河内系のものである。



時期 川除6期である。



第494図 SK 129出土土器

第186表 SK 129出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1134	壺	口径 : (25.4) 底径 : 器高 : 残2.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁端面擬凹線、のち円形浮文(残存5個)貼り付け、端部ユビオサエ、頸部ナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 明赤褐 内面 : にぶい黄橙	口縁部1/7	河内系

SK 131

検出状況 IV区の南西部で検出している。小微高地dの南西側の縁辺に位置している。他の遺構との切り合いはみられない。

形状・規模 形状はややいびつな円形に近い楕円形を呈している。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に158cm、短軸方向に最も広いところで135cmである。土壇底では長軸方向に60cm、短軸方向に37cmである。検出面からの深さは最も深いところで46cmである。断面形はU字形を呈している。底面の平坦部は狭い。土壇壁の傾斜角度は比較的緩やかである。

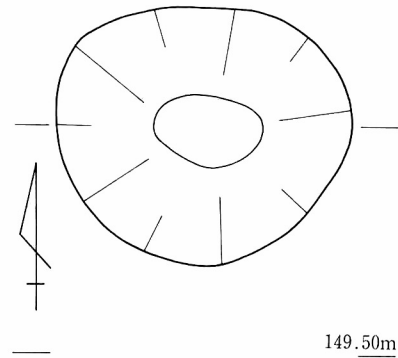
埋土 3層が堆積している。上層に灰色シルト質極細砂、中層に淡褐色シルト質極細砂、下層に土器を含む黄褐色細砂混じりシルト質極細砂の堆積が認められる。

出土遺物 埋土中最下層より土器のみが出土している。壺・甕・高坏・鉢・甑の各器種が出土している。そのうち図化しているものは4点である。

壺 1点図化している。1135は底部から体部上位にかけてのものである。底部は平底で体部との境にはユビオサエ痕が残る。体部の調整は磨滅のため不明であるが、底面にはヘラミガキを施している。体部内面は左上がりのハケで仕上げている。

甕 図化していないが、V様式系の甕の体部が出土している。

鉢 1点図化している。中型の鉢である。内湾ぎみにひろがる体部をもつ。調整は外面には縦方向のヘラミガキののち口縁部に横方向ナデ、内面には底部に



- 1. 灰色シルト質極細砂
- 2. 淡褐色シルト質極細砂
- 3. 黄褐色細砂混じりシルト質極細砂

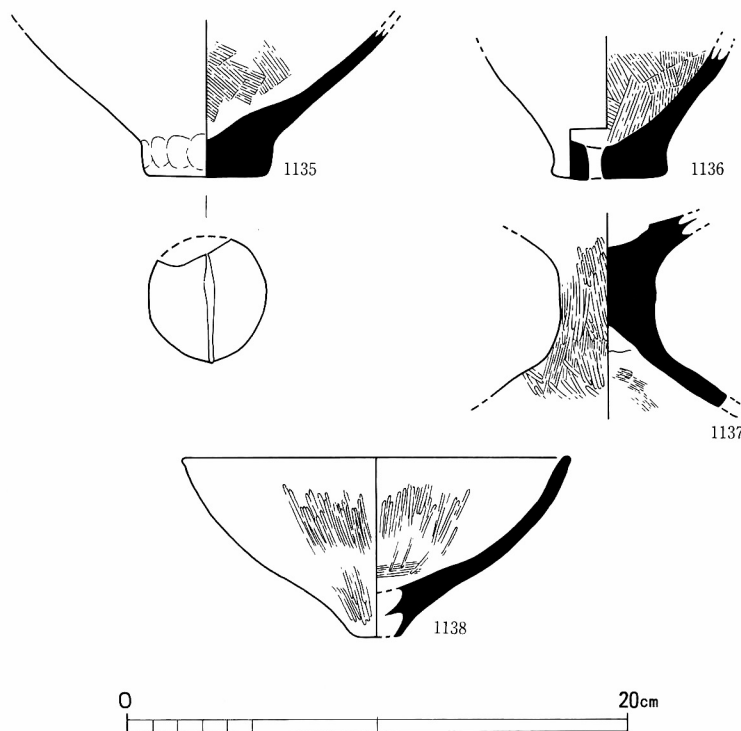


第495図 SK 131

横方向のハケ、後に体部に縦方向のヘラミガキを行い、口縁部を横方向にナデて仕上げている。

高坏

2点出土しているが、図化は1点である。1137は短い中実の脚柱部をもつ高坏である。裾部は端部を欠失しているが直線的にひらくものであろう。円孔が観察されるが個数は不明である。調整は



第496図 SK131出土土器

外面に縦方向のハケ、後に縦方向のヘラミガキを脚柱部から裾部にかけて施している。内面には裾部にハケのちナデを施している。

甌

1点図化している。穿孔は上下両方向から穿たれている。底部の中心部よりややずれている。調整は外面を縦方向のヘラによるナデ、内面をハケで仕上げている。

時期

川除6期である。

第187表 SK131出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1135	壺	口径 : 底径 : 4.7 器高 : 残5.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部ユビオサエ、底面ヘラ描き、他は磨滅のため調整不明 内面 : 体部下半8条/cm左上がりハケ、底部ユビオサエ	外面 : 明褐灰 内面 : 橙	底部ほぼ完存 体部わずか	
1136	甌	口径 : 底径 : 4.2 器高 : 残5.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部ヘラナデ 内面 : 体部~底部8条/cmハケ	外面 : にぶい橙 内面 : にぶい橙	底部ほぼ完存 体部わずか	
1137	高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残7.5 脚柱径 : 3.7 坏部径 :	外面 : 脚柱部8~10条/タテハケ、のち中2.5mm縦ヘラミガキ、裾部円孔(個数不明) 内面 : 裾部8条/cmハケ、のちナデ	外面 : 褐灰 内面 : 明褐灰	脚柱部ほぼ完存	
1138	鉢	口径 : (15.4) 底径 : (2.0) 器高 : 7.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 縦ヘラミガキ、のち口縁部ヨコナデ 内面 : 8条/cmヨコハケ、のち縦ヘラミガキ、のち口縁部ヨコナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 灰白 にぶい橙	口縁部1/4 底部わずか	

SK133

検出状況

IV区の南西部で検出している。小微高地dの南西側の縁辺に位置している。他の遺構との切り合いはSH83と重複して検出されている。前後関係はSH83に切られているため、これより古い時期の遺構である。

形状・規模

形状は不整形を呈している。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は長軸方向に140cm、短軸方向に120cmである。土壇底では長軸方向に55cm、短軸方向に45cmである。

検出面からの深さは最も深いところで21cmである。断面形は皿形を呈している。底面の平坦部は狭く南側にかたよっている。したがって土壇壁の傾斜角度は北側には緩やかで、南側に急である。

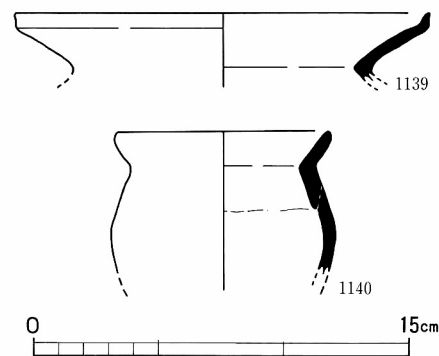
出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。甕と壺か器台が出土しているが、いずれも小片のため図化はできなかった。

時期 出土した遺物が小片であるため正確な時期は明らかではないが、古墳時代の住居跡であるSH83に切られているため、川除6期と考えられる。

SK134

検出状況 IV区の南西隅で検出している。小微高地dの南西側の縁辺に位置している。他の遺構との切り合いはないが、調査区の端で検出しているため、約半分が土層観察用の側溝に切られている。

形状・規模 形状は検出面では楕円形を呈しているが、側溝に削平されている部分があるため正確な形状は不明である。



第497図 SK134出土土器

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は長軸方向に50cm、短軸方向に36cmである。土壇底では長軸方向に30cm、短軸方向に20cmである。

検出面からの深さは最も深いところで20cmである。断面形はU字形を呈している。底面の平坦部はわずかに南側にかたよっている。したがって土壇壁の傾斜角度は北側には緩やかで、南側に急である。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。甕のみが出土しているが、そのうち図化しているものは2点である。

甕 2点図化している。1139は大きく外傾する口縁部の端部を上方につまみ上げている。口縁部には横方向のナデを施し、体部内面にはヘラケズリ痕がわずかに観察できる。河内系の胎土をもつ土器である。

1140は肩部がやや直線的な甕である。体部外面は磨滅のために調整に不明の点が多いがわずかに横方向のタタキが観察される。口縁部は横方向のナデで仕上げ、体部内面は強い横方向のナデである。体部内面には粘土紐の接合痕が明瞭にみられる。

時期 川除6期である。

第188表 SK134出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1139	甕	口径 : (16.6) 底径 : 器高 : 残2.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 褐 内面 : 褐	口縁部1/2	河内系
1140	甕	口径 : (8.2) 底径 : 器高 : 残5.6 頸径 : (6.4) 体部径 : (9.0)	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部上位タキわずかにのこる 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部横方向に強いナデ	外面 : 灰褐 内面 : 灰褐	口縁部~体部約1/6	

SK135

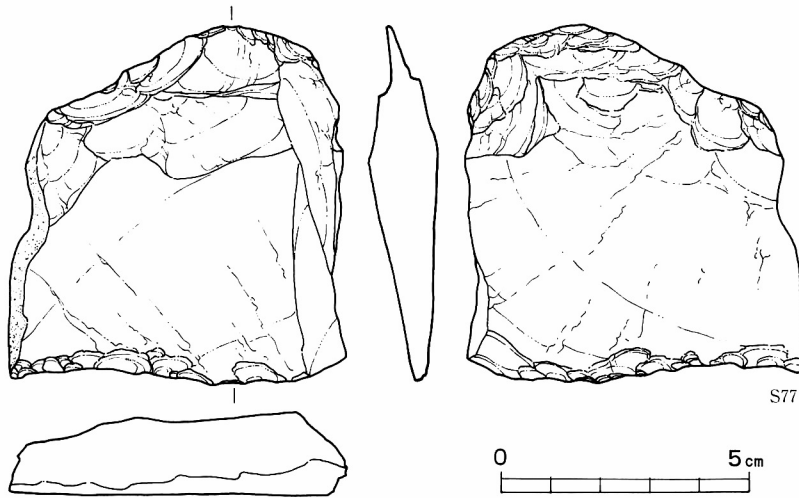
検出状況 IV区中央部東側に位置する。SD86の西側にあたり、中世の土壌であるSK115の北西部にほぼ隣接している。他の遺構との切り合いはない。

形状・規模 平面形は楕円形を呈する。検出面における規模は、長軸で164cm、その直交方向で136cmを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは大変浅く10cmである。

埋土 褐灰色砂質シルト層1層が堆積していた。

出土遺物 石器が1点出土している。出土したのはサヌカイト製の削器である。刃部幅6.8cmを測り、その長さは7.1cmである。厚さは最大で1.4cmである。

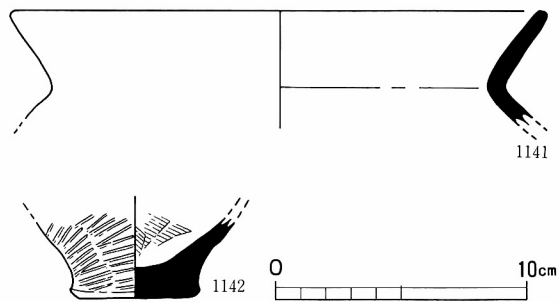
時期 土器が出土していないため、具体的な時期を判断することは困難である。埋土が、付近の中世・古墳時代の遺構の埋土と異なること、サヌカイト製の削器が出土していることを重視して、弥生時代と考えたい。



第498図 SK135出土石器

その他の土壌

以上に掲載しなかったIV区の土壌のうち、弥生時代~古墳時代前期に属すると判明したものの概略を一覧表にまとめることとする。



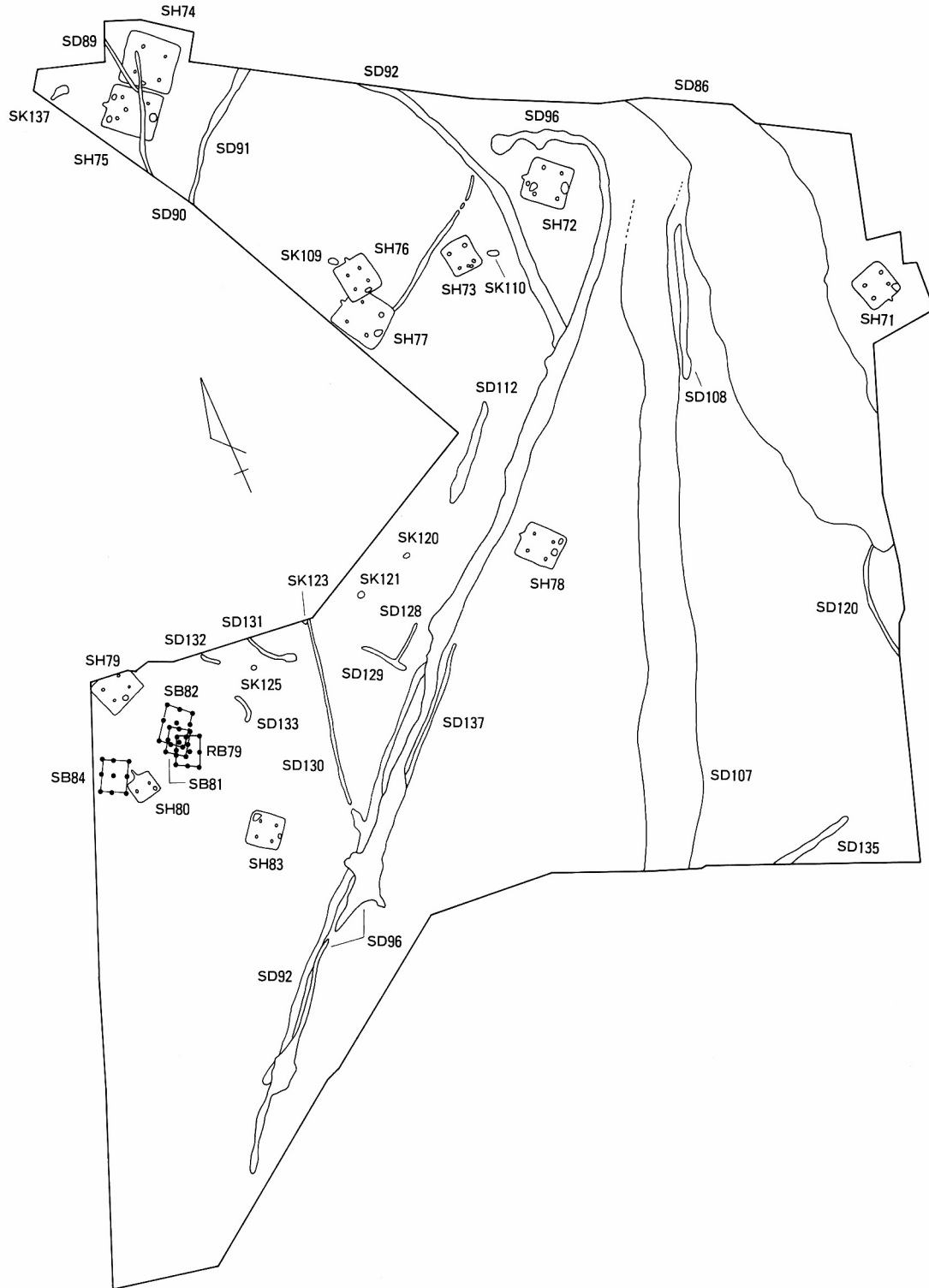
第499図 SK130出土土器

第189表 IV区 弥生時代その他の土壙一覧表 (単位: cm)

遺構名	規模 (検出面)		規模 (土壙底)		深さ	平面形	断面形	時期	出土遺物
	長さ	幅	長さ	幅					
SK106	170	43	123	18	20	楕円形	U字形	後期	甕
SK130	58	44	43	27	10	楕円形	皿形	後期	甕
SK132	64	40	30	18	28	楕円形	U字形	後期	甕

第190表 SK130出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1141	甕	口径 : (20.7) 底径 : 器高 : 残4.6 頸径 : (18.0) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部磨減のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部~体部約1/8	
1142	甕	口径 : 底径 : (5.0) 器高 : 残3.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部~底部4条/cm右上がりタタキ 内面 : 強いハケ	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	底部完存 体部わずか	



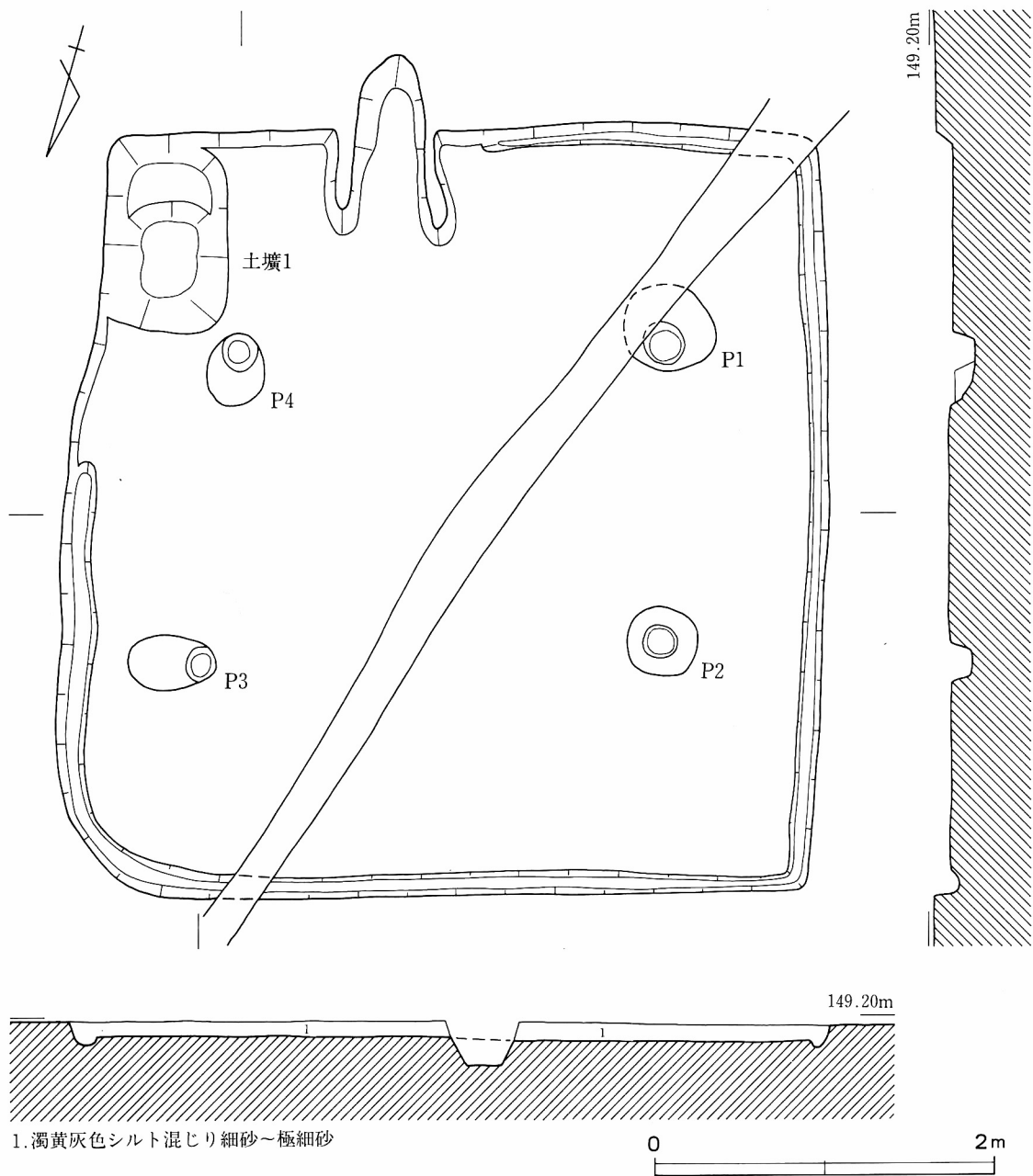
第500図 IV区古墳時代後期の遺構

3. 古墳時代後期の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SH71 (図版126)

- 検出状況** IV区の北東隅、小微高地dの東半部で検出された。他の遺構との切り合い関係はない。
- 形状・規模** 平面形はほぼ正方形である。南辺から順に時計回りに辺の長さを示せば4.15m・4.32m・4.12m・4.20mとなる。検出面から床面までの深さは10cm、床面の標高は149.05mである。床面積は17.2㎡を測る。
- 埋土** 黄灰色シルト混じり細砂～極細砂の1層のみの堆積である。
- 屋内施設** 竈・周壁溝・土壇・柱穴が検出された。

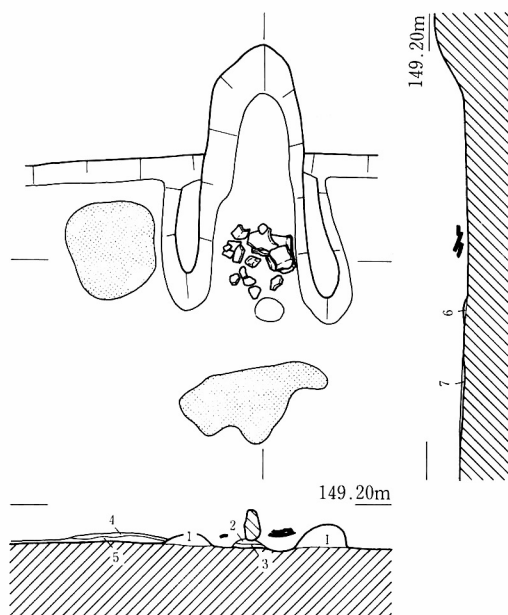


第501図 SH71

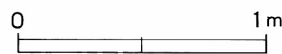
竈 IV区で検出された住居跡の竈が北辺中央付近に設けられるのとは異なり、本住居跡においては、南辺の中央東寄りに造り付けの竈が検出された。竈は盛土によって築かれており、その規模は、焚口部の幅36cm、奥行き84cmを測り、残存高は最大値で9cmである。燃焼部には、1個の垂角礫を利用した支脚が設置されている。焚口奥から屋外に向かっては、緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付く。竈外東方および、燃焼部の前面には炭層の拡がりが見られた。

周壁溝 全周するわけではなく、土壌1および竈のある部分には周壁溝は巡らず、東辺の北半から北辺・西辺そして南辺の西半部に設けられている。幅は床面で8cm、底で3cmである。また、床面からの深さは5cmを測る。

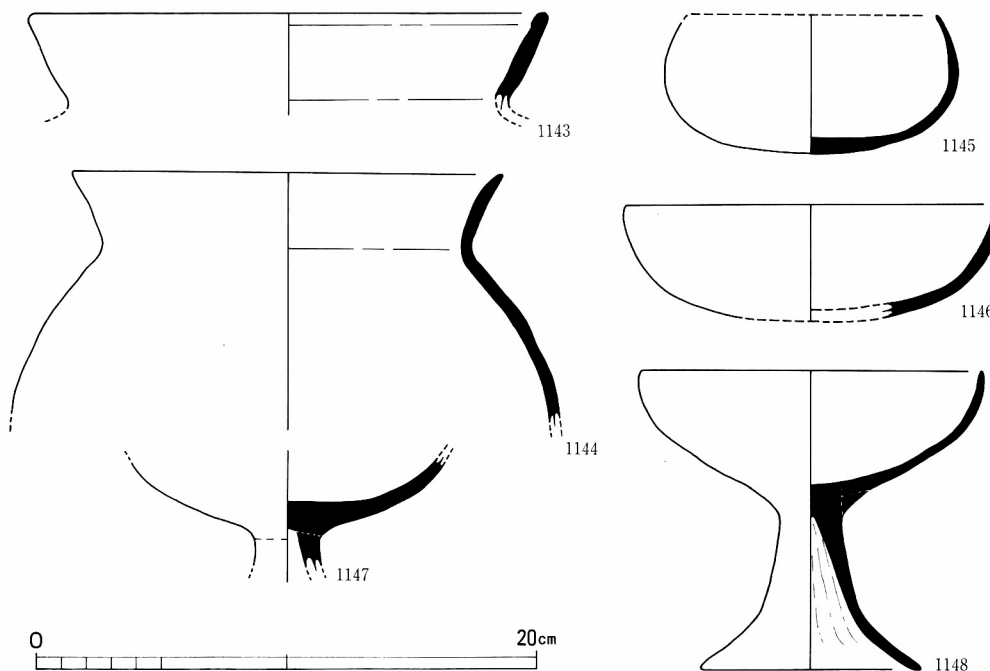
土壌1 住居跡南東隅において長方形の土壌が検出されている。規模は、幅70cm、長さ115cm、深さ25cmを測る。一段低くなった部分があり、その規模は、幅60cm、長さ80cmである。



1. 明灰褐色シルト質極細砂 (盛土)
2. 暗灰色シルト質極細砂 (焼土粒含む)
3. 明青灰色シルト質極細砂
4. 黒灰色極細砂混じりシルト (炭多く含む)
5. 灰褐色シルト質極細砂 (炭若干含む)
6. 焼土層
7. 炭層



第502図 SH71竈



第503図 SH71出土土器

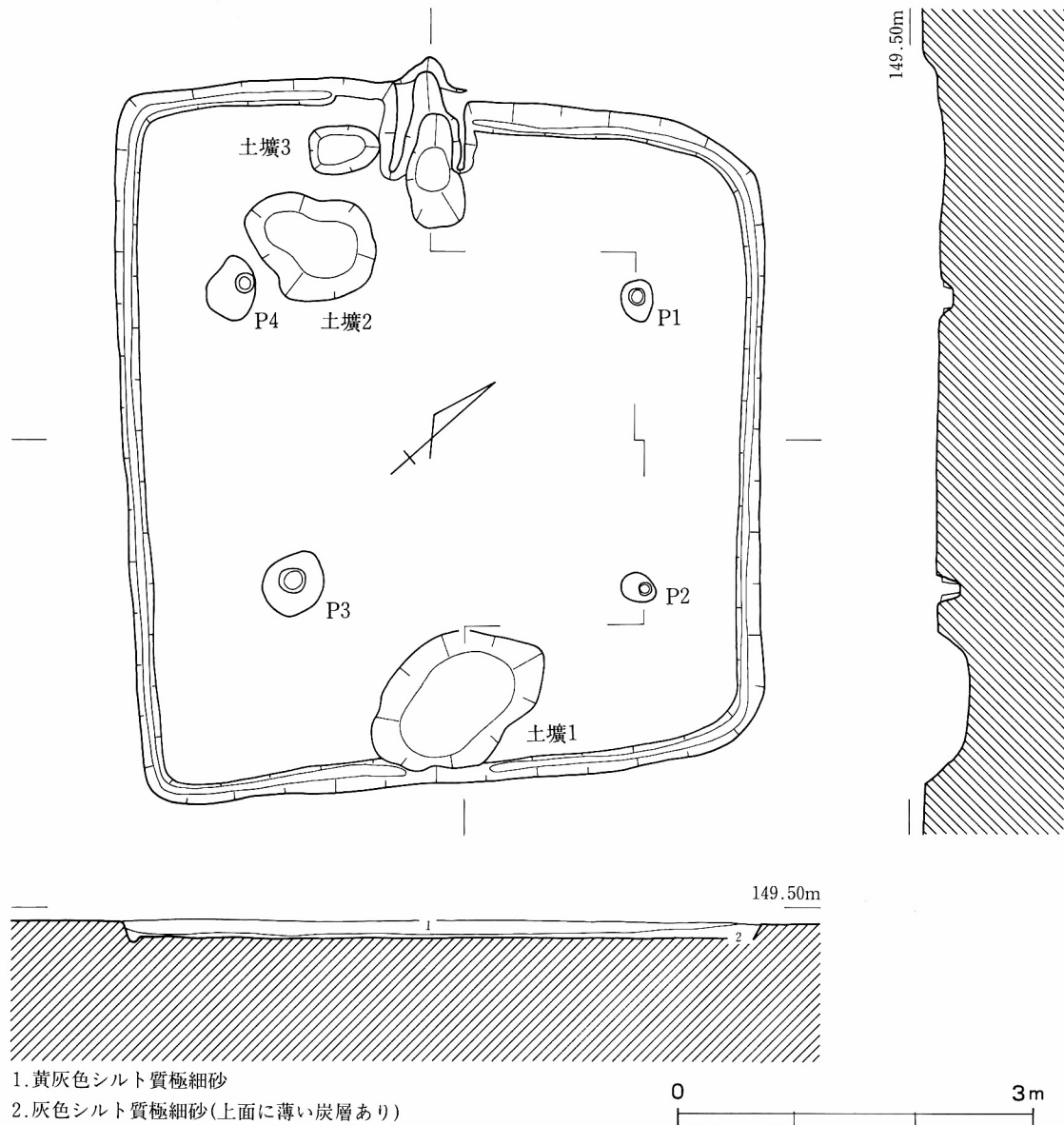
- 柱穴** 主柱穴は4穴である。4つの主柱穴を結ぶ範囲は長方形である。
 P1は、掘り方の直径48cm、柱痕の直径23cm、床面からの深さは46cmである。P2は、掘り方の直径40cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは20cmである。P3は、掘り方の直径50cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは16cmである。P4は、掘り方の直径40cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは15cmである。
 柱穴間の距離は、P1～P2間が1.72m、P2～P3間が2.68m、P3～P4間が1.80m、P4～P1間が2.47mとなっている。
- 出土遺物** 土壌1から1143・1145・1146が、竈から1140が、床面直上より1148が出土している。
 土師器の甕・鉢・高坏、須恵器の小片が出土している。
- 甕** 口縁端部を内側に肥厚するいわゆる布留系のものと、丸くおさめるだけのものの二者が存在する。1144は体部上半に煤が付着している。
- 鉢** 1145は口縁部が内湾する鉢である。1146は口縁端部は直立するものである。
- 高坏** 体部と口縁部の境および柱状部と裾部の境が明瞭ではなく、なだらかに移行する。
- 時期** 時期の決定できる須恵器の資料がないため不明であるが、川除8期としておく。

第191表 SH71出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1143	土師器 甕	口径 : (20.2) 底径 : 器高 : 残3.8 頸径 : 17.7 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : ヨコナデ	外面 : 赤橙 内面 : 赤橙	口縁部1/8	
1144	土師器 甕	口径 : (17.3) 底径 : 器高 : 残9.8 頸径 : 14.8 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部はヘラケズリ	外面 : にぶい 褐 内面 : 淡赤橙	口縁部・体部約1/4	煤付着
1145	土師器 鉢	口径 : 底径 : 器高 : (5.2) 頸径 : 体部径 : (11.8)	外面 : } 磨滅のため調整不明 内面 : }	外面 : 淡黄橙 内面 : 淡黄橙	口縁部欠失 体部約1/3 底部完存	
1146	土師器 鉢	口径 : (14.8) 底径 : 器高 : (4.5) 頸径 : 体部径 :	外面 : } 磨滅のため調整不明 内面 : }	外面 : 淡橙 内面 : 淡橙	体部約1/4	
1147	土師器 高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残4.3 脚径 : 2.6 体部径 :	外面 : } 磨滅のため調整不明 内面 : }	外面 : にぶい 橙 内面 : 橙	体部約1/8	
1148	土師器 高坏	口径 : (13.6) 底径 : (8.7) 器高 : (11.9) 脚径 : (2.5) 体部径 :	外面 : } 磨滅のため調整不明 内面 : }	外面 : 橙 内面 : 橙	坏部約1/2 柱状部完存 裾部約1/2	

SH72 (図版127・148)

- 検出状況** IV区の北端、小微高地dの北縁部で検出された。SH73の東方約10mに位置し、SD92・SD96に囲まれる範囲内にある。
- 形状・規模** 平面形は、ややいびつな方形を呈している。各辺の規模は以下のとおりである。北西辺から順に時計回りに示せば5.00m、4.70m、5.00m、5.80mとなっている。検出面から床面までの深さは12cm、床面の標高は149.25mである。床面積は26.59㎡を測る。
- 埋土** 上下2層に分かれ、上層には黄灰色シルト質極細砂が、下層には灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。なお、下層上面の中央付近には薄い炭層が存在していたが、水平な堆積ではなく、下層の土の締まりが悪いため複数の床面の存在は考えられない。
- 屋内施設** 竈・周壁溝・土壌3基・柱穴が検出された。



第504図 SH72

竈 北西辺のほぼ中央で造り付けの竈が検出された。竈は盛土によって築かれており、その規模は、焚口部の幅40cm、奥行き82cmを測り、残存高は最大値で15cmである。燃焼部は若干窪み、支脚に使用されていたと考えられる長円形の円礫1個が横位で検出された。焚口奥から屋外に向かっては、緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付いている。燃焼部には強く火を受けたことが焼土化によってうかがわれる。

周壁溝 全周せず、竈付近および土壙1付近には周壁溝が掘削されていない。床面での幅は10cm、底での幅は4cmであり、床面から底までの深さは3cmを測る。

土壙1 住居跡南東辺の中央やや東寄りの壁際で不整形の土壙が検出されている。規模は、長径162cm、短径105cm、深さ24cmを測る。灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。高坏が埋土中より出土している。

土壙2 P4と竈の間に位置する不整形の土壙である。規模は、長径115cm、短径85cm、深さ25cmを測る。灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

土壇 3 竈の南西に近接して設置されている。楕円形の土壇であり、規模は長径58cm、短径40cm、深さ15cmを測る。埋土は2層に分かれ、上層に焼土粒・炭片を含む暗茶灰色極細砂質シルトが、下層に黄茶灰色シルト質極細砂が堆積していた。

なお、この土壇が埋没した後、この上面にあたる場所で、完形に近い甕(1149)が横位の状態で出土している。

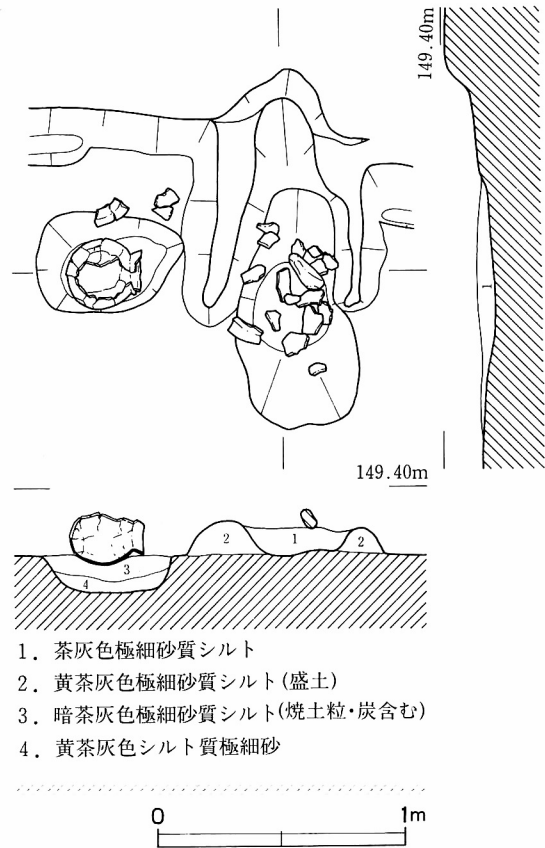
柱穴 主柱穴は4穴である。

P 1は、掘り方の直径35cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは47cmである。P 2は、掘り方の直径35cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さは28cmである。P 3は、掘り方の直径58cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは71cmである。P 4は、掘り方の直径54cm、柱痕の直径16cm、床面からの深さは54cmである。

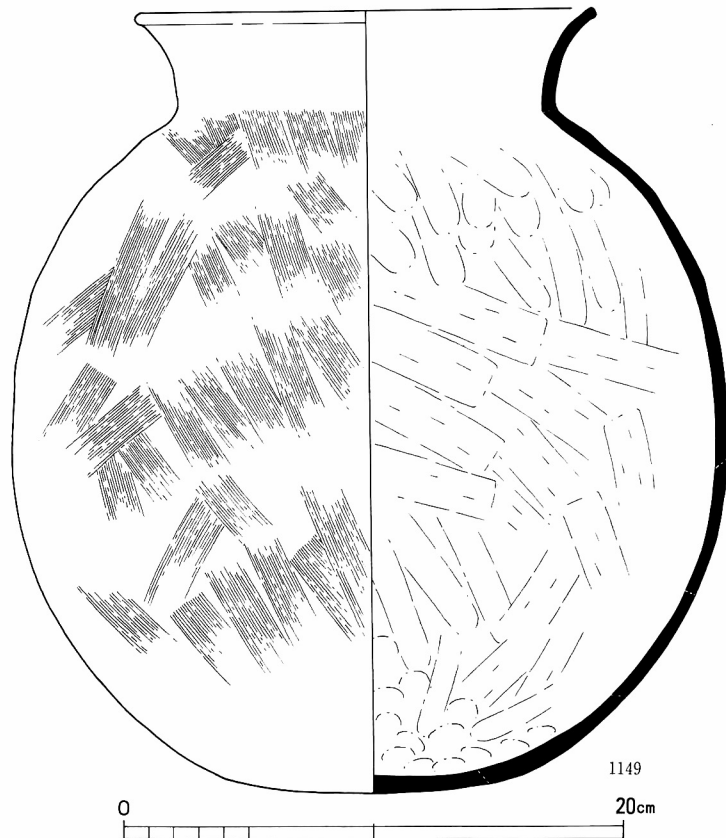
柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.45m、P 2～P 3間が2.96m、P 3～P 4間が2.54m、P 4～P 1間が3.30mと、主柱穴を結ぶ範囲の平面形は長方形を呈している。

出土遺物 土師器の甕・高坏および須恵器の脚部小片が出土している。

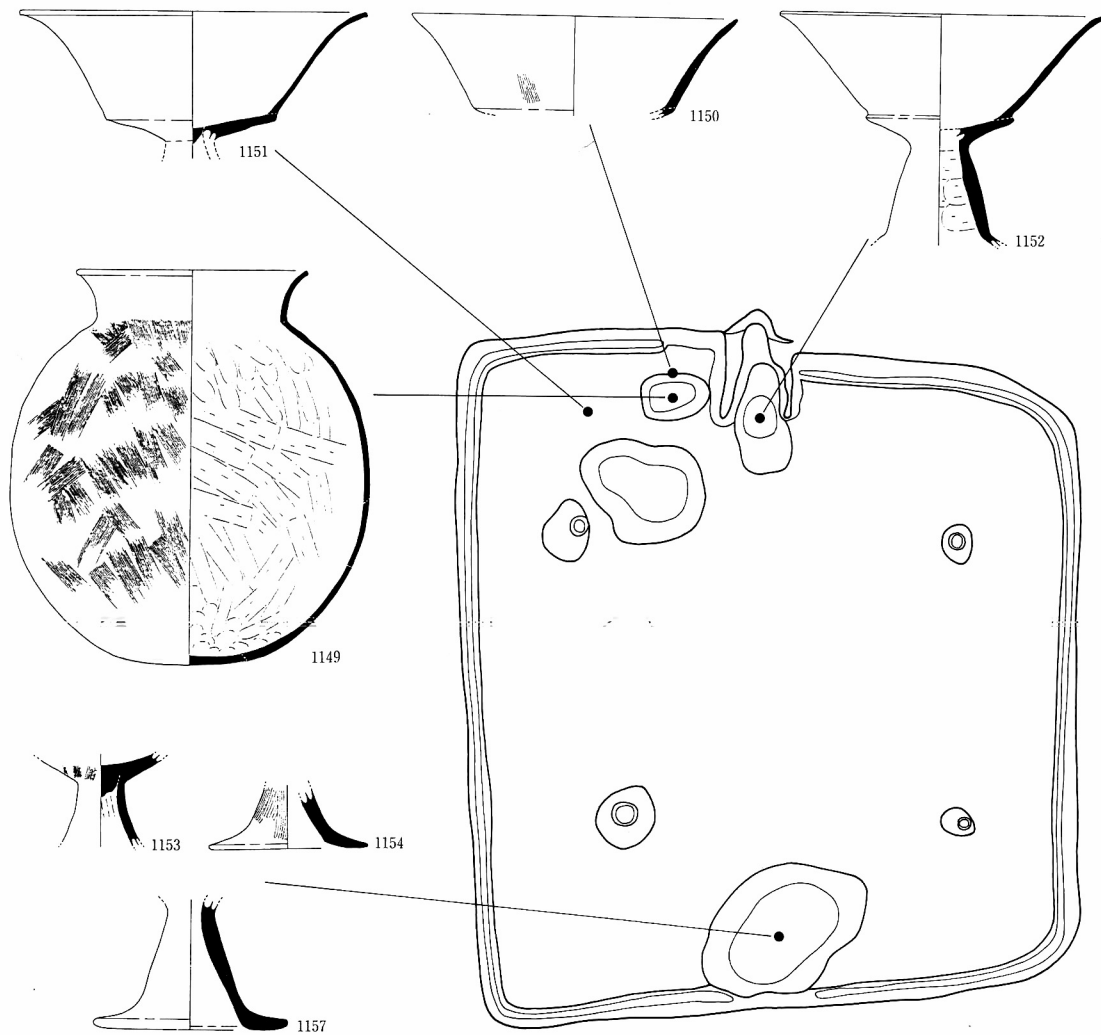
出土状況 本住居跡には焼失した痕跡が認められないが、多くの土器が出土して



第505図 SH72竈



第506図 SH72出土土器(1)



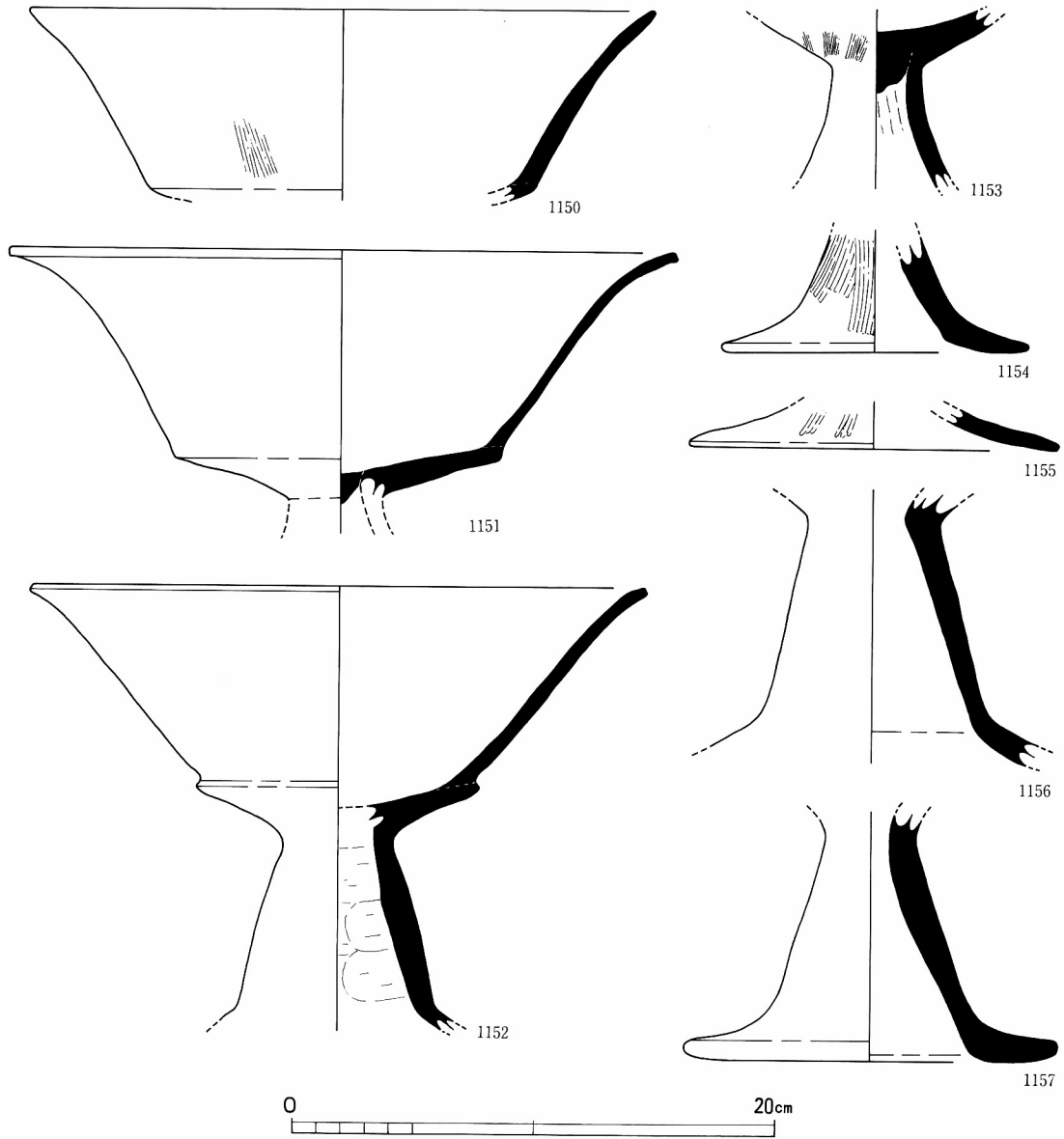
第507図 SH72土器出土位置

いる。出土の位置は第507図に示すとおりである。高坏（1152）が本来の使用場所とは考えられない竈内から出土している。

土師器 1個体出土している。全形をうかがうことのできる資料である。球形に近い体部と口縁部の境界が明瞭なタイプである。外反する口縁部の端部を丸くおさめるものである。器壁の調整は、他の壺と共通するもので、外面に縦および斜め方向のハケメ、内面には逆時計回りのヘラケズリを施している。

高坏 出土は多く、8個体以上認められる。口縁部・体部とも直線的な形態を示すもので、その境界は明瞭である。境界部分に段を有するもの（1152）ともたないものの二者がある。口縁部・体部の調整にはヘラミガキがみられず、ハケメ調整を基本とし、その上をなでるものがある。脚部は柱状部と裾部の境が明瞭なもので、裾部内面は水平に近い面をなすものが多い。柱状部内面には、時計回りのヘラケズリが施され、裾部内面には横方向のナデが認められる。

須恵器 須恵器の脚部小片は、高坏かと思われ、8本1単位の櫛描波状文が裾部に巡っている。柱状部との境付近には低い突帯が1条付加され、柱状部には円形の透かし穴がおそらく4方向に穿たれている。



第508図 SH72出土土器(2)

時期 川除8期としてよいであろうが、須恵器の観察からは若干古い様相を呈している。

第192表 SH72出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1149	土師器 甕	口径 : (18.0) 底径 : 器高 : 30.9 頸径 : (15.2) 体部径 : 28.6	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部に縦方向のハケメ 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部上半は斜め方向、下半は縦方向のヘラケズリ、底部にはユビオサエ	外面 : 灰白 内面 : 橙	口縁部1/3 体部1/3 底部完存	
1150	土師器 高坏	口径 : (25.7) 底径 : 器高 : 残7.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部に縦方向のハケメ(6本/cm)のちヨコナデ 内面 : 口縁部に横方向のハケメ(5本/cm)のちヨコナデ	外面 : にぶい 赤橙 内面 : にぶい 橙	口縁部1/8	
1151	土師器 高坏	口径 : (27.5) 底径 : 器高 : 残10.3 脚径 : (3.9) 体部径 : 13.5	外面 : ヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 赤橙 内面 : にぶい 褐	口縁部1/2 体部完存	
1152	土師器 高坏	口径 : (25.1) 底径 : 器高 : 残17.9 脚径 : 4.6 体部径 :	外面 : ヨコナデ 内面 : 口縁部と体部にヨコナデ、柱状部に時計回りのヘラケズリ	外面 : 淡赤橙 内面 : にぶい 橙	約1/3	

第193表 SH72出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1153	土師器 高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残7.3 脚径 : 3.8 体部径 :	外面 : 体部に縦方向のハケメ(6本/cm)、柱状部ナデ 内面 : 体部に横方向のハケメ(6本/cm)、柱状部時計回りのヘラケズリ	外面 : にぶい 褐 内面 : 灰黄褐	体部1/4 柱状部完存	
1154	土師器 高坏	口径 : 底径 : (12.7) 器高 : 残4.8 脚径 : 体部径 :	外面 : 柱状部に縦方向のハケメ(7本/cm)、裾部にヨコナデ 内面 : 柱状部に時計回りのヘラケズリ	外面 : 褐灰 内面 : 橙	脚部3/4	
1155	土師器 高坏	口径 : 底径 : (15.3) 器高 : 残1.7 脚径 : 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : 橙	裾部1/2	
1156	土師器 高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残7.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 磨滅のため調整不明 内面 : 柱状部に時計回りのヘラケズリ	外面 : 灰白 内面 : にぶい 黄橙	柱状部完存	
1157	土師器 高坏	口径 : 底径 : (10.5) 器高 : 残6.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 柱状部から裾部にナデ 内面 : 柱状部に時計回りのヘラケズリ	外面 : 橙 内面 : 明赤褐	脚部1/2	

SH73 (図版126)

検出状況 IV区の北西部、小微高地dのほぼ中央で検出された。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は、方形を呈している。北西および北東の隅は丸くなっている。各辺の規模は以下のとおりである。北辺から順に時計回りに示せば3.40m、3.45m、3.90m、3.60mとなっている。検出面から床面までの深さは22cm、床面の標高は149.22mである。床面積は14.04㎡を測る。

埋土 灰褐色あるいは茶灰色などのシルト質極細砂の堆積が認められた。

屋内施設 土壌・柱穴が検出されたのみであり、竈・周壁溝などは認められなかった。東辺の周壁際で焼土粒が認められたが、精査の結果にもかかわらず竈は確認されなかった。

土壌1 住居跡南辺の中央やや東寄りの壁際で不整形の土壌が検出されている。規模は、長径56cm、短径48cm、深さ5cmを測る。黄茶灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

柱穴 主柱穴は4穴であるが、P2とP3の中間やや外寄りでP5が検出されている。主柱を結ぶ正方形の範囲は、周壁溝の平面形と比べてやや南に偏しているようである。

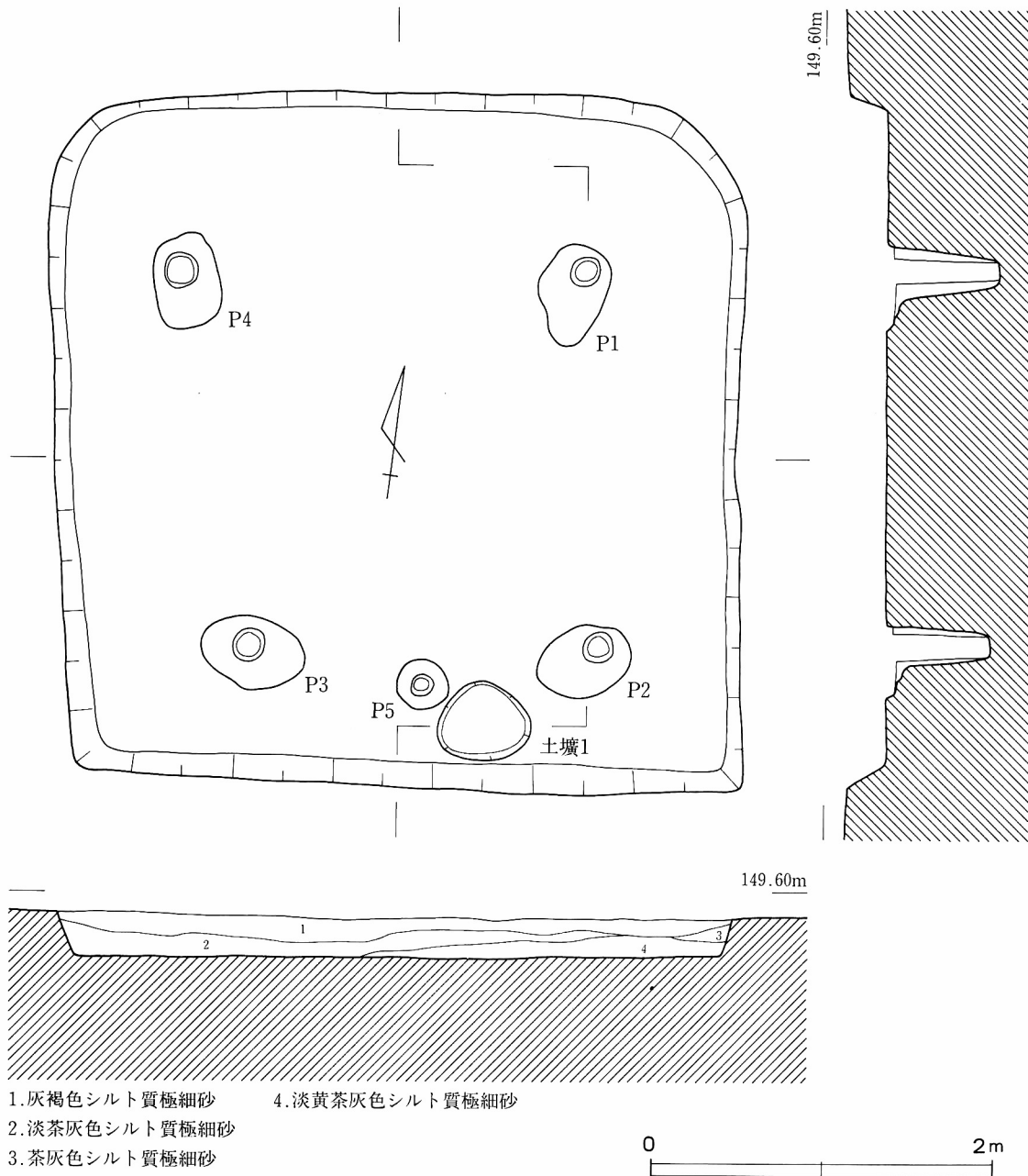
P1は、掘り方の直径55cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは102cmである。P2は、掘り方の直径55cm、柱痕の直径16cm、床面からの深さは92cmである。P3は、掘り方の直径66cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは66cmである。P4は、掘り方の直径52cm、柱痕の直径19cm、床面からの深さは61cmである。P5は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さは35cmである。

柱穴間の距離は、P1～P2間が2.16m、P2～P3間が2.05m、P3～P4間が2.20m、P4～P1間が2.35mである。

出土遺物 遺物の出土量は多くない。須恵器小片、土師器の甕・甑が出土している。いずれも住居跡埋土からの出土である。

須恵器 小片であり、器種などは不明である。

土師器 甕・甑が出土している。

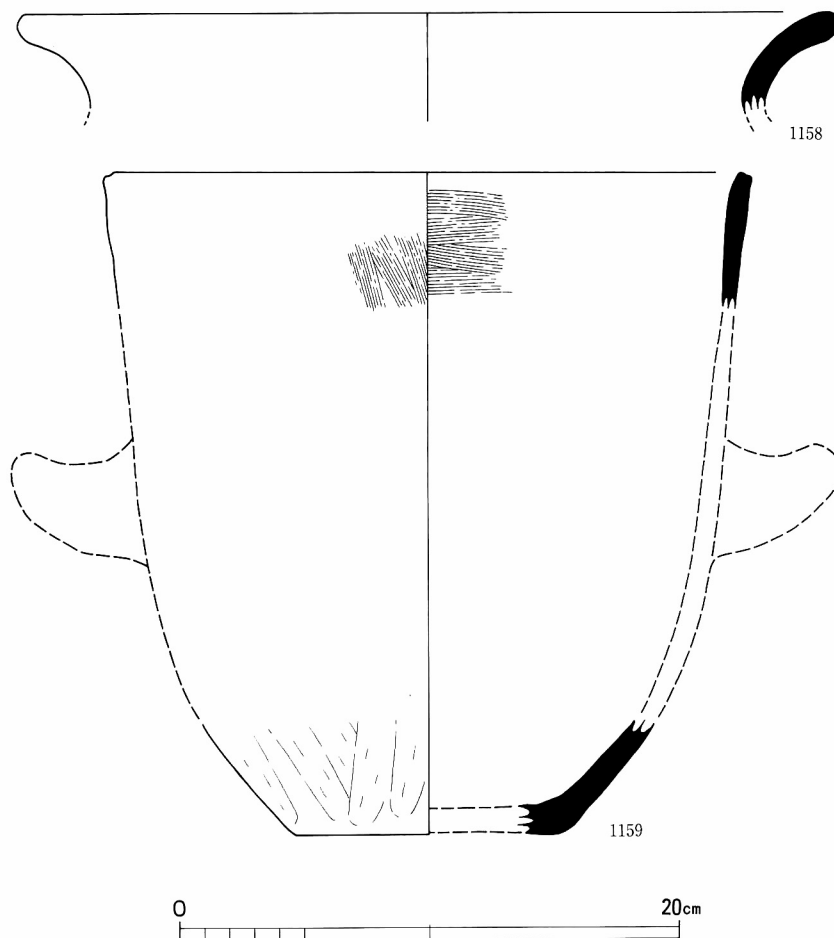


第509図 SH73

甕 外反して丸くおさめる口縁部が出土している。器壁の調整を含めた詳細については不明であるが、口径からみてかなり大型の部類に属するものである。

甗 口縁部と底部の破片があり、胎土などの特徴から同一個体と認定した。ただしいずれも小片であるため、器高などの計測値は不確実である。調整手法について、他の甗が外面をハケ仕上げするのを常とするのに対し、本例は底部近くの外面に縦方向のヘラケズリが施されている。口縁部近くには、内外面にハケメ仕上げが行われ、口縁部はその後に横方向のナデが施されている。

時期 出土土器から、川除8期としてよいであろう。



第510図 SH73出土土器

第194表 SH73出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1158	土師器 甕	口径 : (32.0) 底径 : 器高 : 残4.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部にヨコナデ 内面 : 口縁部にヨコナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部1/9	
1159	土師器 甕	口径 : (25.2) 底径 : (10.8) 器高 : (22.2) 頸径 : (12.2) 体部径 :	外面 : 口縁部に縦方向のハケ(12条/cm)のちヨコナデ、体部下半に下から上方向のヘラケズリ 内面 : 口縁部に横方向のハケ(12条/cm)のちヨコナデ、底部にナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部1/8 体部1/4	

SH74 (図版127・149)

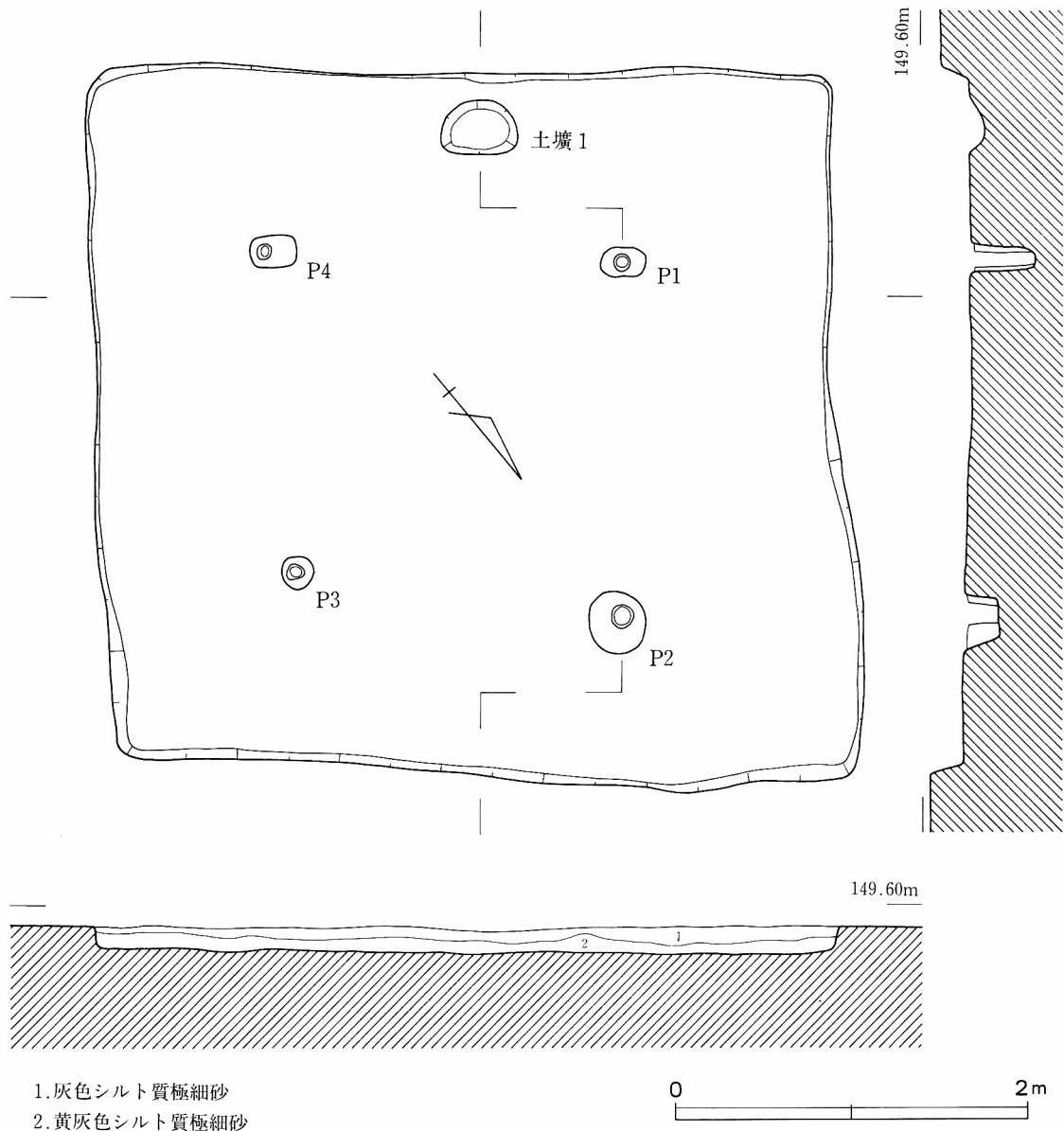
検出状況 IV区の北西端、小微高地dの北西部で検出された。SD89・90に切られており、SH75に北接する。

形状・規模 平面形は長方形である。北東辺から順に時計回りに辺の長さを示せば4.15m、3.92m、4.15m、3.80mとなる。検出面から床面までの深さは16cm、床面の標高は149.35mである。床面積は16.0㎡である。

埋土 2層に分かれ、上層には灰色シルト質極細砂、下層には黄灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

屋内施設 柱穴・土壙が検出され、周壁溝は確認されなかった。

柱穴 主柱穴は4穴である。4つの主柱穴を結ぶ範囲は正方形に近く、周壁の平面形とは相似



第511図 SH74

形にはならない。

P 1 は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径10cm、床面からの深さは53cmである。P 2 は、掘り方の直径36cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは29cmである。P 3 は、掘り方の直径18cm、柱痕の直径10cm、床面からの深さは27cmである。P 4 は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径10cm、床面からの深さは30cmである。

柱穴間の距離は、P 1 ~ P 2 間が1.92m、P 2 ~ P 3 間が1.87m、P 3 ~ P 4 間が1.80m、P 4 ~ P 1 間が2.02mとなっている。

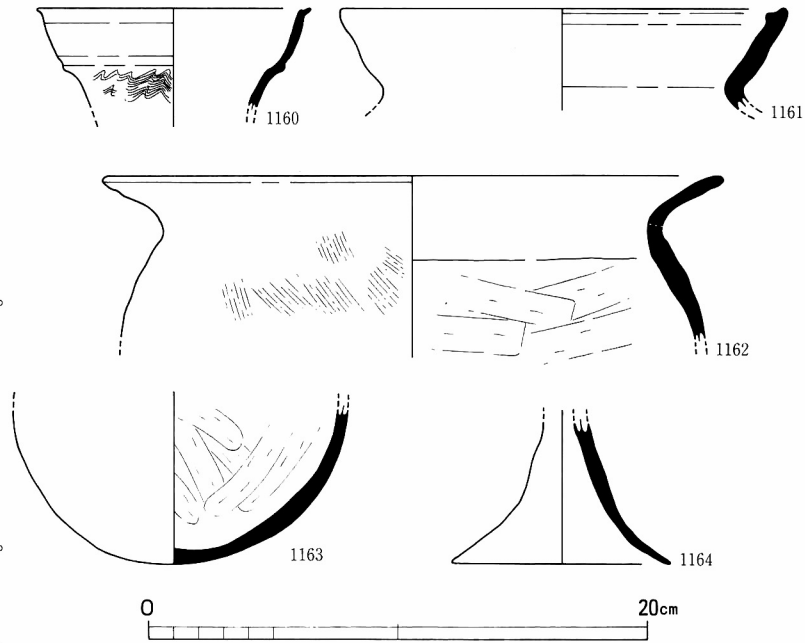
土壙 1 南西辺中央の周壁際で楕円形の土壙が検出されている。規模は、短径30cm、長径45cm、深さ 8 cmを測る。土壙壁および底には焼土化は認められず、炭などの堆積もなかった。

出土遺物 須恵器の甗・甗・坏、土師器甑・甗・高坏・製塩土器などの土器が出土している。1162 は土壙 1 からの出土であり、他はいずれも埋土から出土したものである。

須恵器 1160は小型の壺形甗である。頸部は短く、あまり外方に開かない特徴をもっている。器

第6節 IV区の調査

壁が非常に薄く、つくりがシャープな感を受ける。頸部には櫛描きの波状文が施文されている。他に坏が数点出土しているが、身と蓋の区別の困難な小片である。また、凶化できなかったが、甕胴部片と鉢



第512図 SH74出土土器

の小片が1点出土している。このうち甕については、外面に6条/cmの細かいタタキがみられ、内面の同心円文は丁寧にナデ消されている。また、鉢については、後述するSH75出土の1185と同一型式とみられるもので、極めて薄いつくりとなっている。

土師器

甕には、口縁の肥厚部が内傾するものと、丸くおさめるものの二者が認められる。前者については、布留系の甕とされるもので、横方向のナデが認められる。また、後者はこの時期に新しく出現する甕で、体部最大径は肩部にある。内面のヘラケズリは、他の同タイプの甕と異なり、逆時計回り方向に施されている。

高坏の脚部は、なだらかに広がる裾部をもつ。この時期の屈曲する裾部をもつ高坏とは異なるもので、弥生時代後期からの系譜がたどれるものである。

時期

甕の形態から、TK23型式よりも古く位置づけられる可能性があるが、川除8期の範疇におさまるものである。

第195表 SH74出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1160	須恵器 甕	口径 : (11.0) 底径 : 器高 : 残4.0 頸径 : 体部径 :	外面 : ヨコナデののち、頸部に10本単位の櫛描波状文 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰白	口縁部1/3	
1161	土師器 甕	口径 : (19.4) 底径 : 器高 : 残4.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	口縁部1/3	
1162	土師器 甕	口径 : (25.2) 底径 : 器高 : 残6.5 頸径 : 20.0 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部磨滅のため調整不明、体部は横方向の逆時計回りヘラケズリ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部~ 体部約1/10	
1163	土師器 甕	口径 : 底径 : 器高 : 残6.1 頸径 : 体部径 :	外面 : ナデ 内面 : 縦方向のヘラケズリ	外面 : にぶい 赤褐 内面 : にぶい 赤褐	体部約1/3	
1164	土師器 高坏	口径 : 底径 : 8.8 器高 : 残5.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	柱状部完存 裾部約1/2	

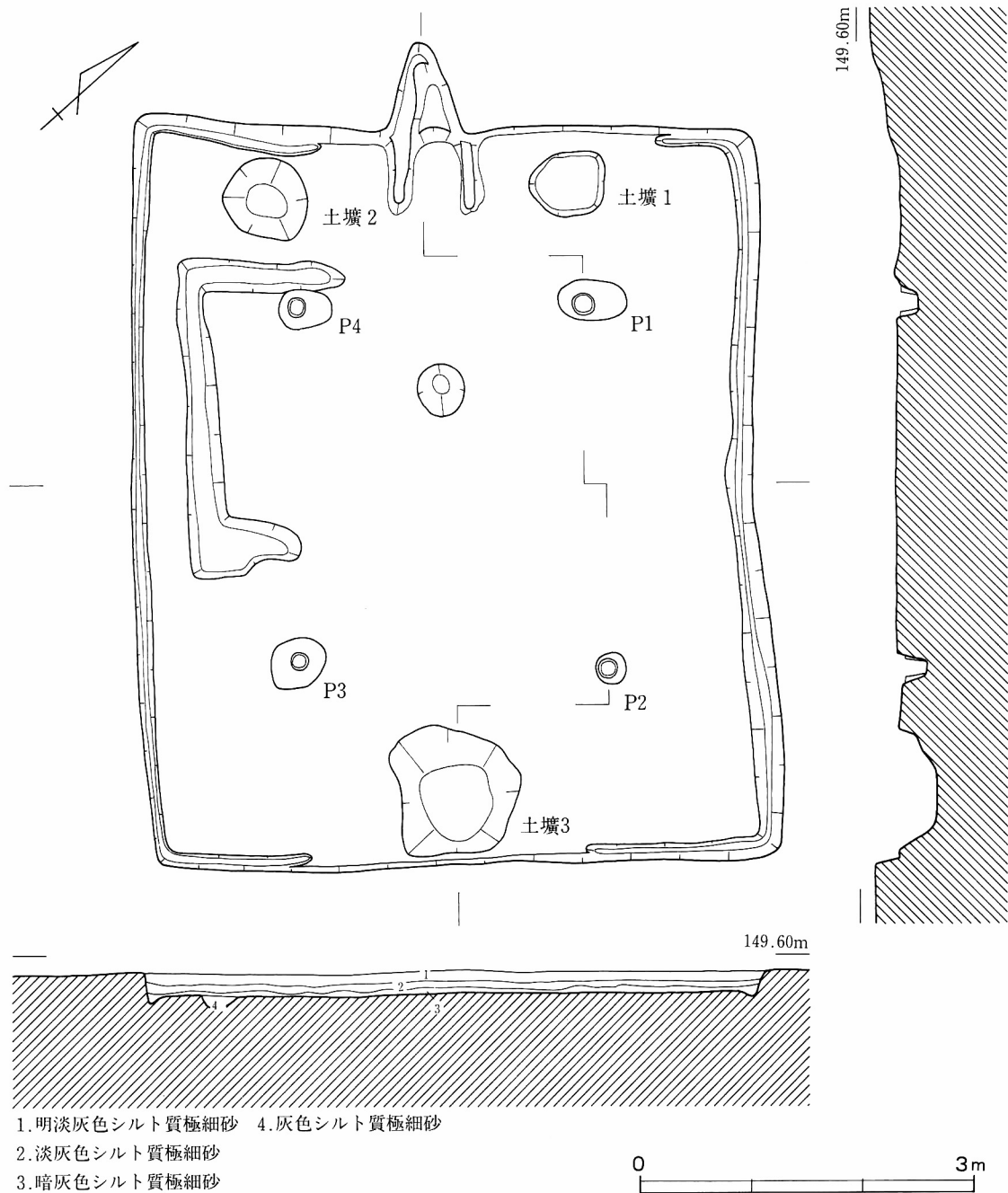
SH75 (図版128・149・150)

検出状況 IV区の北西端、小微高地dの北西部で検出された。SD89・90に切られており、SH74に南接する。

形状・規模 平面形は長方形である。北西辺から順に時計回りに辺の長さを示せば5.50m、6.38m、5.55m、6.60mとなる。検出面から床面までの深さは19cm、床面の標高は149.26mである。床面積は33.1㎡である。

埋土 3層に分かれ、上層には明淡灰色シルト質極細砂、中層には淡灰色シルト質極細砂、下層には暗灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

屋内施設 竈・周壁溝・柱穴・土壇が検出された。



第513図 SH75

竈 北西辺のほぼ中央で造り付けの竈が検出された。竈は盛土によって築かれており、その規模は、焚口部の幅45cm、奥行き129cmを測り、残存高は最大値で5cmである。燃烧部は若干窪み、円礫を利用した支脚が設置されている。焚口奥から屋外に向かっては、緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付く。竈内の上層には焼土層が、下層には焼土粒や炭片を多く含むシルト混じり細砂が堆積している。

周壁溝 北西辺および南東辺の中央以外は周壁溝が認められた。床面での幅は12cm、底での幅は4cmであり、床面からの深さは4cmを測る。

柱穴 主柱穴は4穴である。4つの主柱穴を結ぶ範囲は長方形であり、周壁の平面形と相似形である。

P 1は、掘り方の直径36cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは80cmであ

る。P 2は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径16cm、床面からの深さは68cmである。P 3は、掘り方の直径45cm、柱痕の直径15cm、床面からの深さは80cmである。P 4は、掘り方の直径35cm、柱痕の直径16cm、床面からの深さは27cmである。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が3.24m、P 2～P 3間が2.75m、P 3～P 4間が3.15m、P 4～P 1間が2.55mとなっている。

土壌 周壁際で土壌が3基検出された。竈の北および南のものをそれぞれ土壌1・2、南東辺中央で確認されたものを土壌3とよぶ。

土壌1・土壌2はいずれも楕円形を呈する浅いものである。

土壌1 規模は、短径58cm、長径68cm、深さ8cmである。

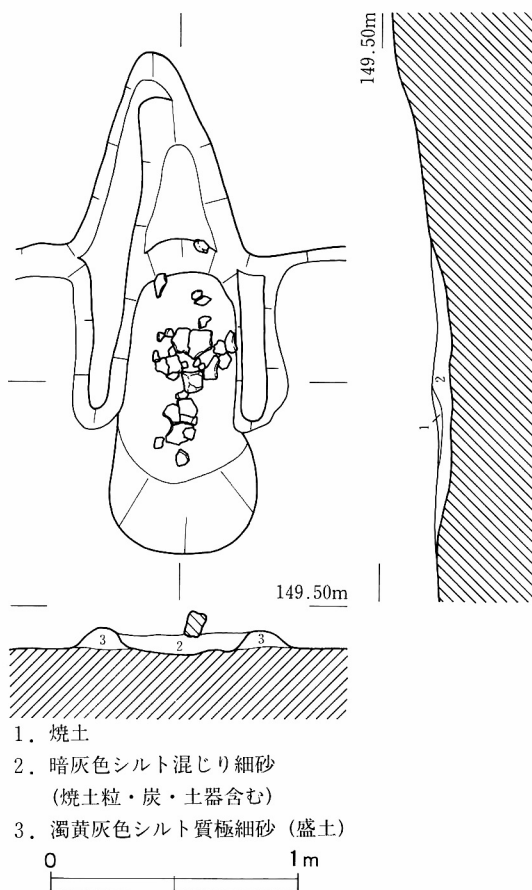
土壌2 短径69cm、長径78cm、深さ23cmを測る。

土壌3 一辺が100～110cmを測る方形の土壌であり、深さは30cmである。

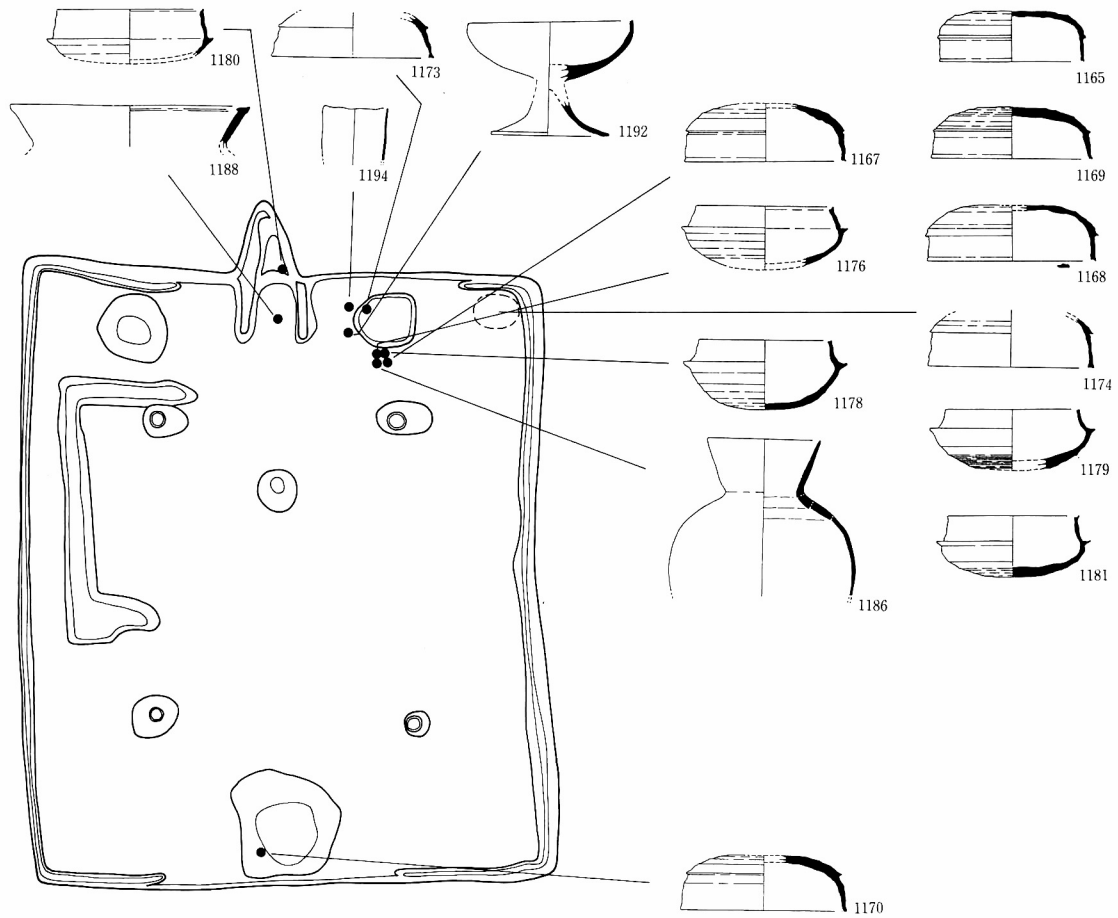
いずれの土壌も壁・底は焼土化しておらず、埋土中に炭片などを含まない。

屋内の溝 長さ2.80m、幅30cm、深さ12cmの溝が南西辺に平行する形で検出された。この溝の両端には内側に直角に屈曲する部分があり、西辺で長さ150cm、東辺で長さ100cmを測る。このような溝は、いわゆる「間仕切り溝」とされるものであるが、周壁溝と30cmしか離れていないため、仕切りの意味をなさないと考えられる。床をささえるための根太状のものと考えの方が自然である。

出土遺物 須恵器の坏・高坏蓋・鉢、土師器の壺・甕・高坏・製塩土器などの土器が出土している。



第514図 SH75竈



第515図 SH75土器出土位置

1170は土壌1からの出土であり、他はいずれも埋土あるいは床面近くで出土したものである。

須恵器 坏蓋・坏身とも天井部・底部に丸みをもつものであり、2/3以上の広い範囲に回転ヘラケズリが施されるものばかりである。1179の底部には、回転ヘラケズリののち、カキメが施されている点が他と異なっている。坏身のたちあがりの端部は水平のものではなく、すべて内傾している。

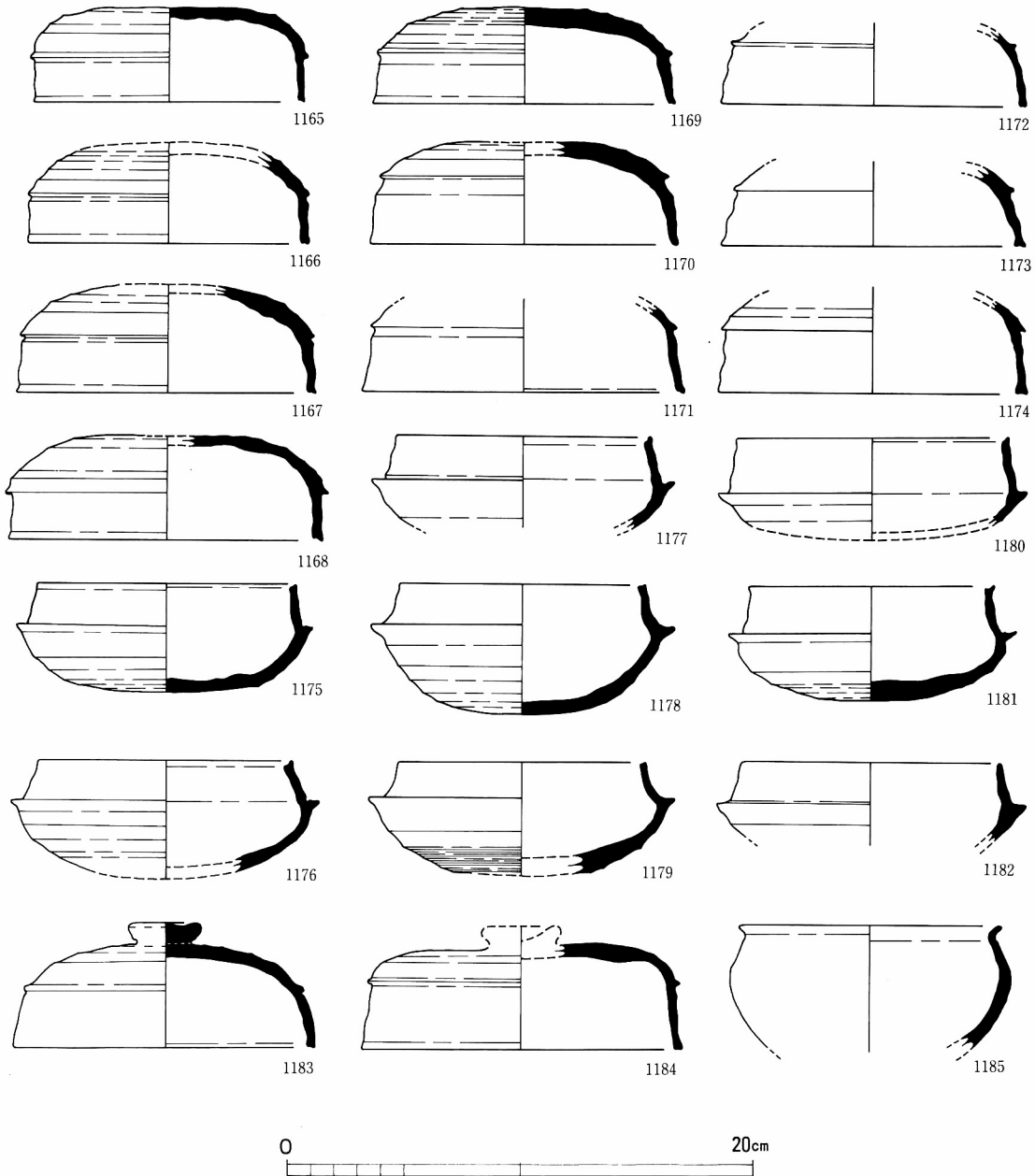
1185はここでは鉢としたが、類例をあまり見ない型式である。内外面はヨコナデ仕上げであり、丸みをもった体部に、短く外方にのびる口縁部をもつ。土師器の鉢に形態的類似をみる。

また、1183・1184は有蓋高坏の蓋とされているが、これに伴う確実な高坏の破片がみとめられないため、坏身としたもののなかに高坏が含まれる可能性もある。

土師器 壺には直口壺があり、口縁部は直線的に外方にのびる。

甕 口縁端部の形態上いくつかの差がみられる。肥厚する端部が水平面をなすもの、内傾するもの、ほとんど肥厚がみられずに丸くおさめるものなどである。体部内面のヘラケズリは、逆時計回りに施されるものばかりであり、位置については、頸部との境よりも下位にあるものが多いようである。

1191は弥生後期から続く型式の鉢であるが、体部外面にはタタキが認められない。これ



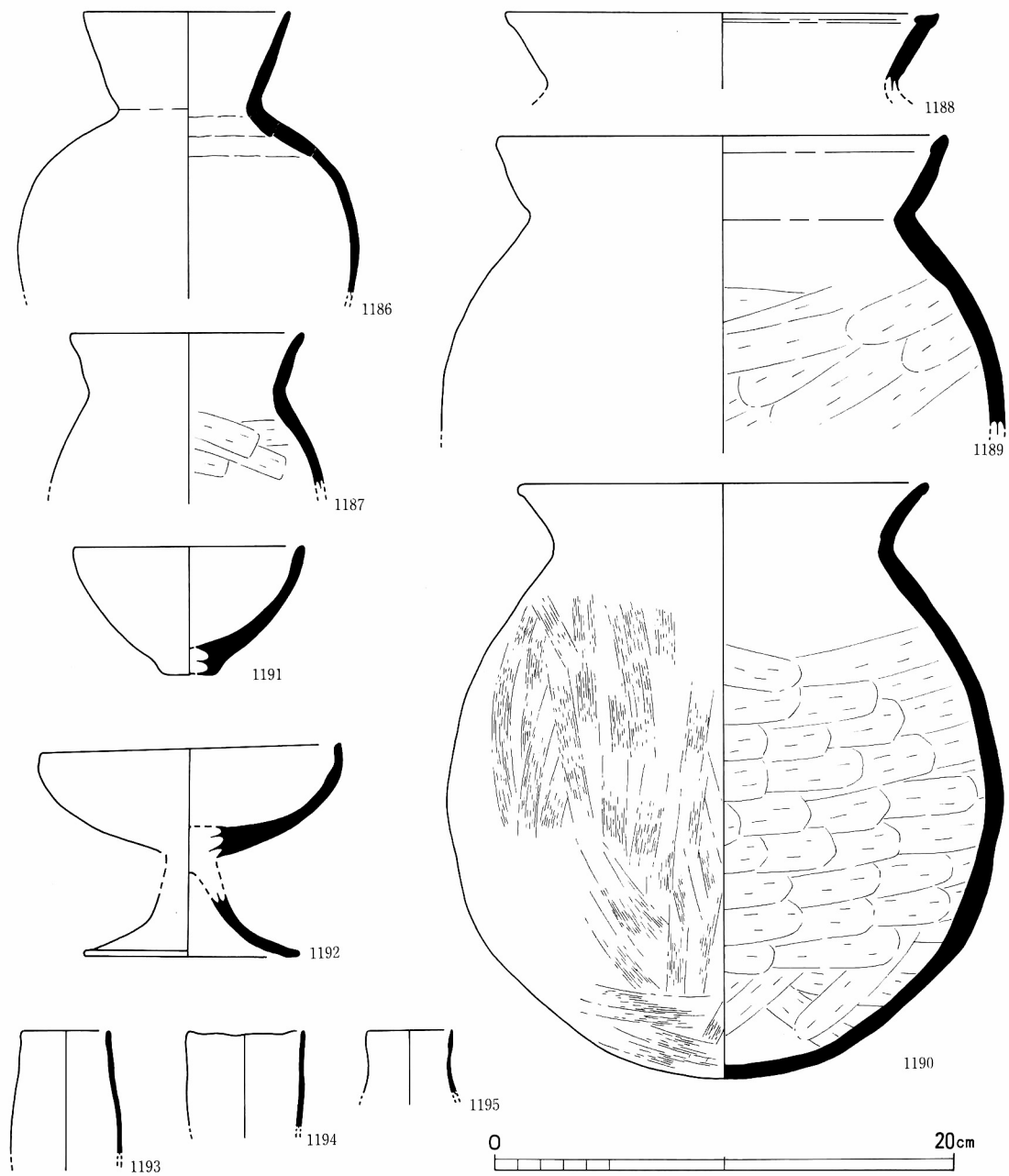
第516図 SH75出土土器(1)

については混入品である可能性が捨てきれない。

高坏 弥生後期からの系譜のたどれるものである。

製塩土器 3点出土している。2～3mmと非常に薄い器壁をもつものである。体部から続く口縁部が内傾するものと外傾するものの二者がある。体部にはタタキの痕跡をもたず、内外面はナデ仕上げである。いずれの破片も二次焼成を受けていることが分かる。

時期 須恵器の諸特徴から、TK23型式併行、即ち川除8期と考えられる。



第517図 SH75出土土器(2)

第196表 SH75出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1165	須恵器 蓋	口径 : 11.6 底径 : 器高 : 4.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	天井部・体 部約1/3	
1166	須恵器 蓋	口径 : (12.0) 底径 : 器高 : (3.9) 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	天井部・体 部約1/8	
1167	須恵器 蓋	口径 : (12.8) 底径 : 器高 : (4.5) 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	天井部・体 部約1/2	

第197表 SH75出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1168	須恵器蓋	口径 : (13.4) 底径 : 器高 : (4.0) 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	天井部・体部約1/4	
1169	須恵器蓋	口径 : 13.0 底径 : 器高 : 4.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部全面に時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 褐灰 内面 : 褐灰	天井部・体部約1/2	
1170	須恵器蓋	口径 : (13.2) 底径 : 器高 : (4.3) 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の2/3に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	天井部・体部約1/10	
1171	須恵器蓋	口径 : (13.6) 底径 : 器高 : 残3.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部にヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	天井部・体部約1/5	
1172	須恵器蓋	口径 : (13.0) 底径 : 器高 : 残3.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部にヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	天井部・体部約1/4	
1173	須恵器蓋	口径 : (13.0) 底径 : 器高 : 残3.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部にヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰	天井部・体部約1/8	
1174	須恵器蓋	口径 : 13.2 底径 : 器高 : 残4.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部全面に回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 褐灰 内面 : 褐灰	天井部・体部約1/8	
1175	須恵器坏	口径 : 11.0 底径 : 器高 : 4.6 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部3/4に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	完存	
1176	須恵器坏	口径 : (10.8) 底径 : 器高 : (4.8) 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部3/4に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	たちあがり 底部1/3	
1177	須恵器坏	口径 : (10.8) 底径 : 器高 : 残3.9 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部2/3に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	たちあがり 底部1/8	
1178	須恵器坏	口径 : (10.4) 底径 : 器高 : 5.5 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部2/3に逆時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	たちあがり 1/4 底部1/2	
1179	須恵器坏	口径 : (10.6) 底径 : 器高 : (4.7) 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリののち1/2にカキメ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	たちあがり 底部1/3	受部に重ね 焼きの際の 溶着
1180	須恵器坏	口径 : (11.6) 底径 : 器高 : 残3.7 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部2/3に回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	たちあがり 底部1/8	
1181	須恵器坏	口径 : (10.4) 底径 : 器高 : 4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部3/4に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰赤 内面 : 灰赤	たちあがり 底部1/2	
1182	須恵器坏	口径 : (11.0) 底径 : 器高 : 残3.4 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	たちあがり 底部1/8	
1183	須恵器高坏蓋	口径 : (12.8) 底径 : 器高 : 5.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の2/3に時計回りの回転ヘラケズリ、体部にヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	天井部3/4 体部1/2	
1184	須恵器高坏蓋	口径 : (13.7) 底径 : 器高 : 残4.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に時計回りの回転ヘラケズリ、体部にヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	天井部・体部4/5	
1185	須恵器鉢	口径 : (10.8) 底径 : 器高 : 残5.3 頸径 : 10.7 体部径 : 12.1	外面 : ヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	体部約1/4	
1186	土師器壺	口径 : 9.0 底径 : 器高 : 残12.1 頸径 : 6.3 体部径 : 15.0	外面 : 口縁部~肩部にヨコナデ、体部にナデ 内面 : 頸部にヨコナデ、肩部にユビオサエのちナデ	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	上半完存	
1187	土師器甕	口径 : (10.0) 底径 : 器高 : 残6.5 頸径 : (8.5) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部に横方向逆時計回りのヘラケズリ	外面 : 明赤褐 内面 : 明赤褐	口縁部1/4 体部1/8	

第198表 SH75出土土器観察表(3)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1188	土師器 甕	口径 : (19.0) 底径 : 器高 : 残3.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : にぶい 赤褐色 内面 : にぶい 橙	口縁部1/8	
1189	土師器 甕	口径 : (19.5) 底径 : 器高 : 残12.7 頸径 : (16.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部に横方向時計回りのへラケズリ	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部・体 部約1/8	
1190	土師器 甕	口径 : (17.6) 底径 : 器高 : (21.7) 頸径 : (14.9) 体部径 : (24.3)	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケメ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部に横方向逆時計回りのへラケズリ	外面 : 浅黄橙 内面 : 褐灰	口縁部1/10 体部1/6	
1191	土師器 鉢	口径 : (10.0) 底径 : (2.2) 器高 : 5.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面 : ハケのちナデ	外面 : 橙 内面 : 灰白	約1/4	
1192	土師器 高坏	口径 : (13.0) 底径 : (9.2) 器高 : (10.4) 脚径 : (2.0) 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : にぶい 橙	坏部約2/3 裾部約1/4	
1193	土師器 製塩土器	口径 : (3.5) 底径 : 器高 : 残5.3 頸径 : 体部径 :	外面 : ナデ 内面 : ナデ	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	口縁部・体 部約1/4	二次焼成を 受ける
1194	土師器 製塩土器	口径 : (5.0) 底径 : 器高 : 残4.1 頸径 : 体部径 :	外面 : ナデ 内面 : ナデ	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	口縁部・体 部約1/6	二次焼成を 受ける
1195	土師器 製塩土器	口径 : (3.6) 底径 : 器高 : 残2.7 頸径 : 体部径 :	外面 : ナデ 内面 : ナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部・体 部約1/6	二次焼成を 受ける

SH76 (図版129・150・151・152・176)

検出状況 IV区の北西部、小微高地dのほぼ中央で検出された。SH77を切っている。また、古墳時代の土壙SK109に近接している。

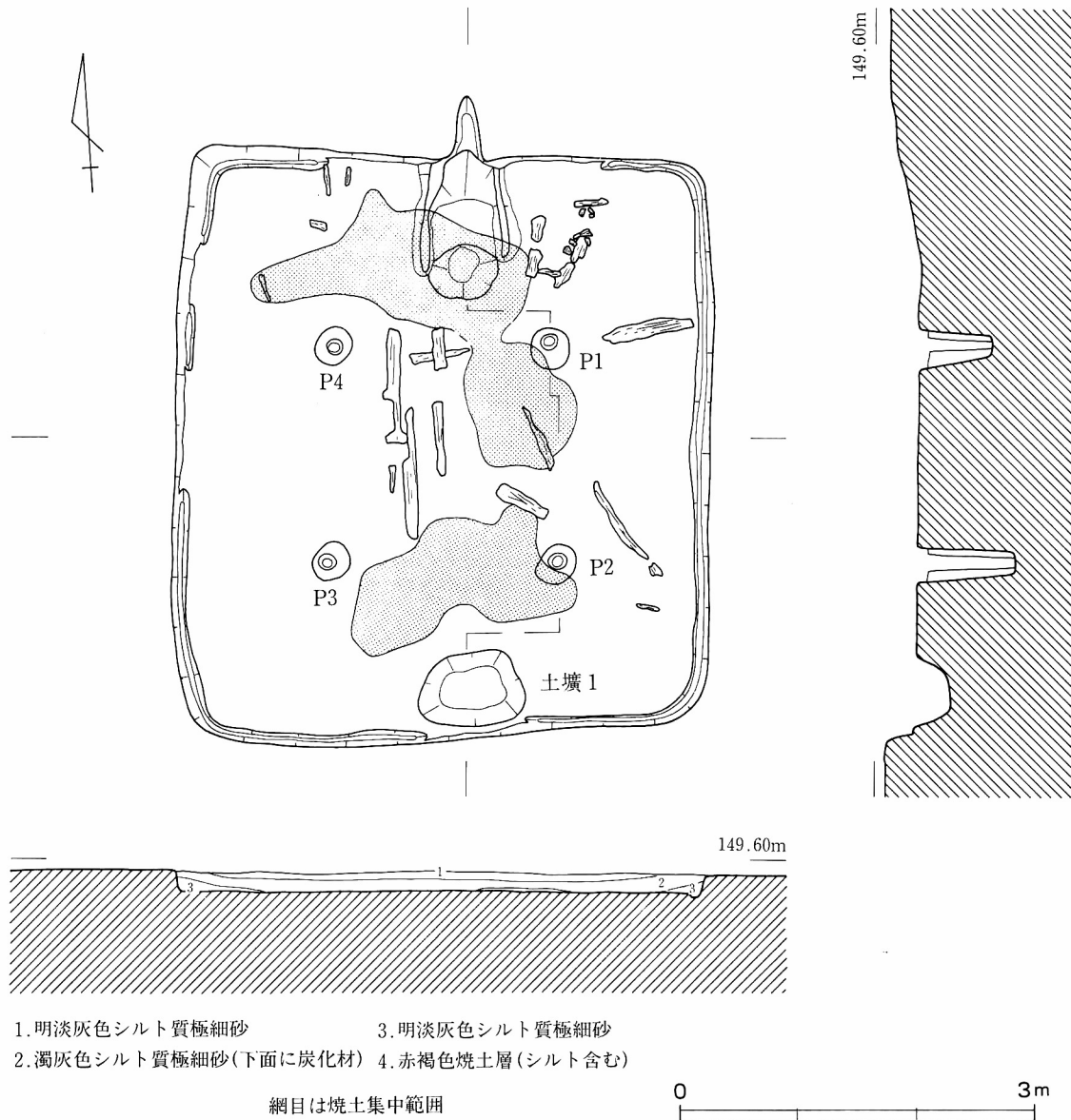
形状・規模 平面形は、東西両辺がやや長い長方形を呈している。北辺から順に時計回りに辺の長さを示せば4.20m、4.55m、4.10m、4.80mとなる。検出面から床面までの深さは15cm、床面の標高は149.32mである。床面積は19.73㎡を測る。

埋土 大きくは上下2層に分かれ、上層に明淡灰色シルト質極細砂、下層には濁灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。本住居跡は焼失住居であるため、埋土に炭粒を多く含むだけでなく、床面より多量の炭化材とともに遺物が原位置に近い状態で検出された。

屋内施設 竈・周壁溝・土壙・柱穴が検出された。

竈 北辺のほぼ中央で造り付けの竈が検出された。竈は盛土によって築かれており、その規模は、焚口部の幅51cm、奥行き105cmを測り、残存高は最大値で15cmである。燃烧部は若干窪み、円礫2個を一对にした支脚が設置されている。支脚と地山との接地部分が窪んでいるが、掘り方を掘って支脚を据えたとするよりも使用の際の重みの結果と考える方が自然である。焚口奥から屋外に向かっては、緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付く。燃烧部には強く火を受けたことが焼土化によってうかがわれる。

周壁溝 全周せず、竈付近および土壙1付近には周壁溝が掘削されていない。床面での幅は8cm、底での幅は4cmであり、床面から底までの深さは5cmを測る。



第518図 SH76

土壌 1 住居跡南辺の中央壁際の竈正面にあたる場所で長円形の土壌が検出されている。規模は、長径92cm、短径60cm、深さ25cmを測る。灰色のシルト質極細砂の堆積が認められた。

柱穴 主柱穴は4穴である。

P 1 は、掘り方の直径24cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは60cmである。P 2 は、掘り方の直径37cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは81cmである。P 3 は、掘り方の直径35cm、柱痕の直径15cm、床面からの深さは70cmである。P 4 は、掘り方の直径33cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは65cmである。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が1.85m、P 2～P 3間が1.95m、P 3～P 4間が1.80m、P 4～P 1間が1.82mと、4つの主柱穴で囲まれる範囲はほぼ正方形であり、周壁の平面形とは相似形にはならない。

出土遺物 土器・鉄器・石器が出土している。

土器 図化した土器のうち、1198・1201・1204・1215・1216・1218・1219・1223以外はいずれ

も床面直上出土の土器である。その出土位置は第520図に示すとおりである。P3と周壁との空間に須恵器蓋環の集中がみられること、床面の東半に土師器が、西半に須恵器が多いことがうかがえる。

個人別食器と考えられる坏と鉢の数を床面直上出土資料で数えれば以下のとおりとなる。須恵器蓋環が5ないし6組、土師器の鉢が3個体である。

須恵器 蓋環、甗のみであり、高坏、甕などは出土していない。

坏 坏および蓋は外面の回転ヘラケズリの範囲がかなり広いものが多い。1204については、受部が水平にのびること、たちあがり垂直に近いことなどから、当初蓋の可能性も考えられたが、受部に重ね焼きの溶着が認められることから坏とする方が妥当であろう。1206は底部外面にヘラによる「×」字の刻線が記されている。

甗 壺形甗（1210）は、肩部が丸く、比較的大型のものである。

土師器 壺・甕・鉢・高坏・甗が出土している。

壺 壺には直口壺・広口壺がある。

甕 甕には、口縁端部を内側に肥厚させるいわゆる布留系の甕ごく少量認められるが、口縁端部を丸くおさめるだけのものが多数を占めている。体部内面にはヘラケズリを施すものがほとんどである。

鉢 小型の鉢は3個体認められる。口縁部を内側に湾曲させるもの、強いナデを施して段をつけるものなどがある。1223・1224は口縁部が外反する大型のものであるが、高坏である可能性は捨てきれない。

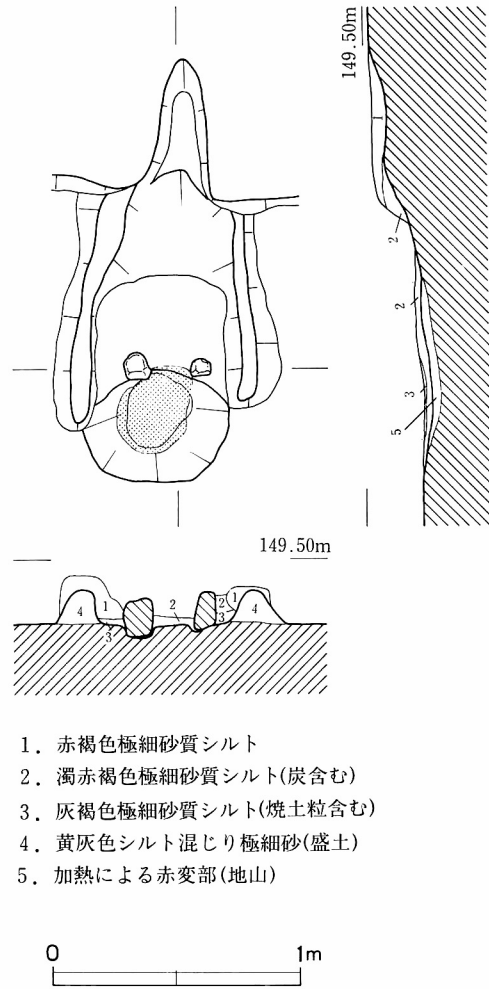
高坏 高坏は2個体出土しているが、おそらく2個体とも体部と口縁部の境、柱状部と裾部の境が明瞭なものである。

甗 甗は底部に5個の円孔が設けられていたようである。把手下端での体部径は20.2cmを測る。

鉄器 鉄製の打鋏が床面直上より1点出土している。長方形の板状の鉄の両端を折り曲げたものである。木質は遺存していない。長さ9.0cm、幅2.5cm、厚さ3mmを測る。

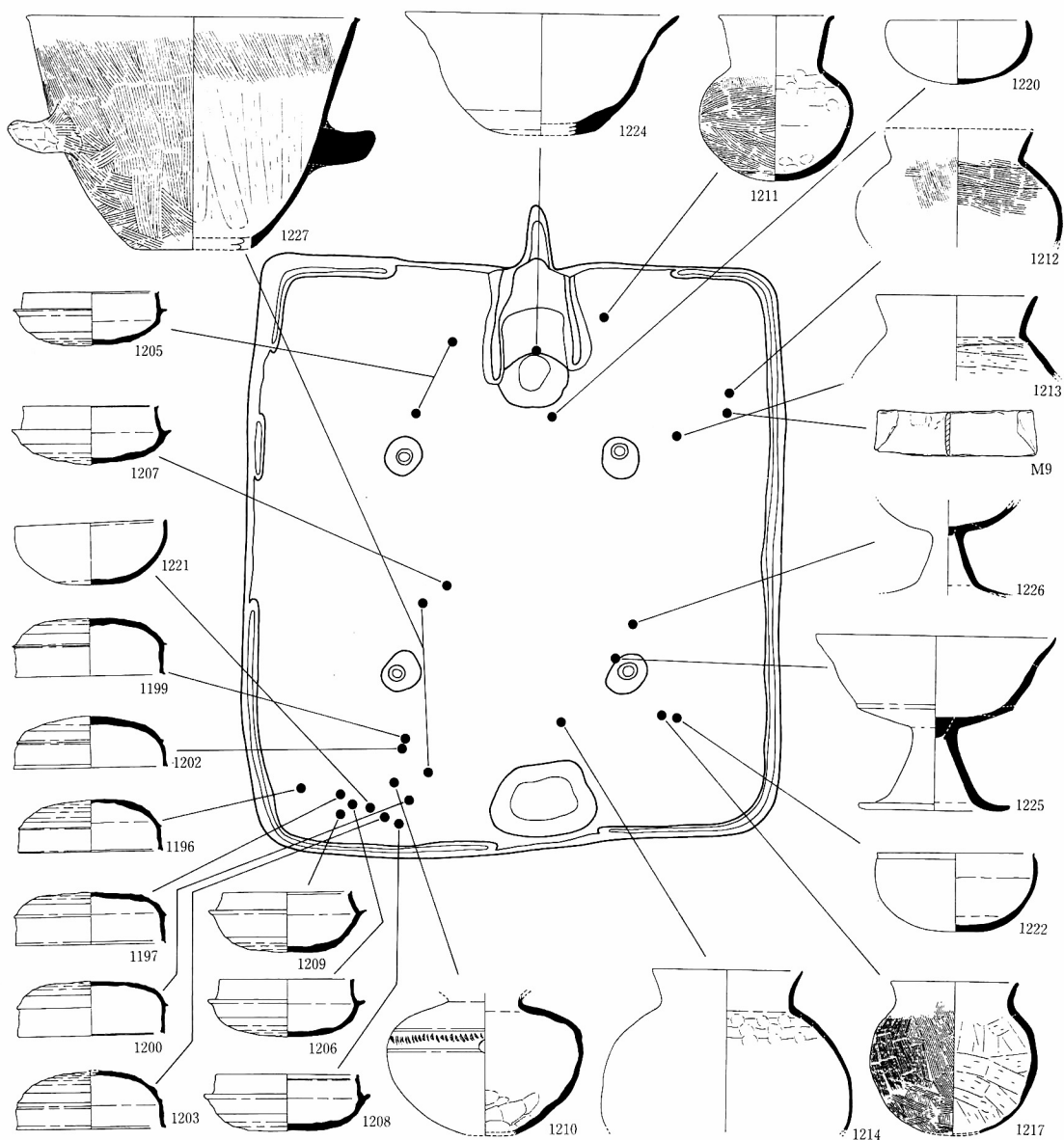
石器 閃緑岩の円礫を利用したすり石である。両端部に使用による磨滅が認められる。長さ9.3cm、幅9.2cm、厚さ6.5cmを測る。

時期 須恵器坏や甗の特徴からTK23型式併行段階、すなわち川除8期に位置づけられる。

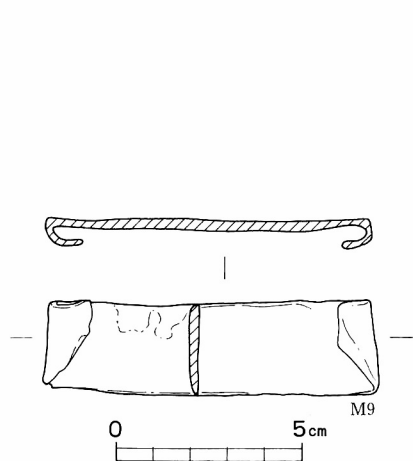


1. 赤褐色極細砂質シルト
2. 濁赤褐色極細砂質シルト(炭含む)
3. 灰褐色極細砂質シルト(焼土粒含む)
4. 黄灰色シルト混じり極細砂(盛土)
5. 加熱による赤変部(地山)

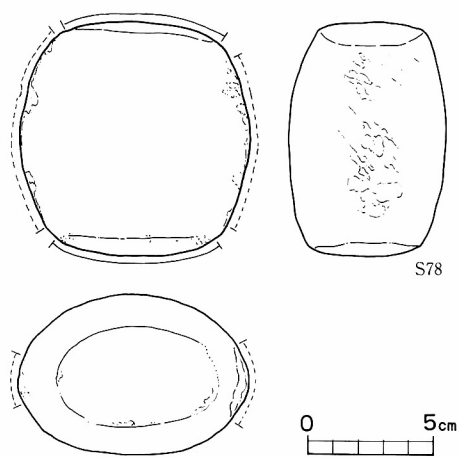
第519図 SH76竈



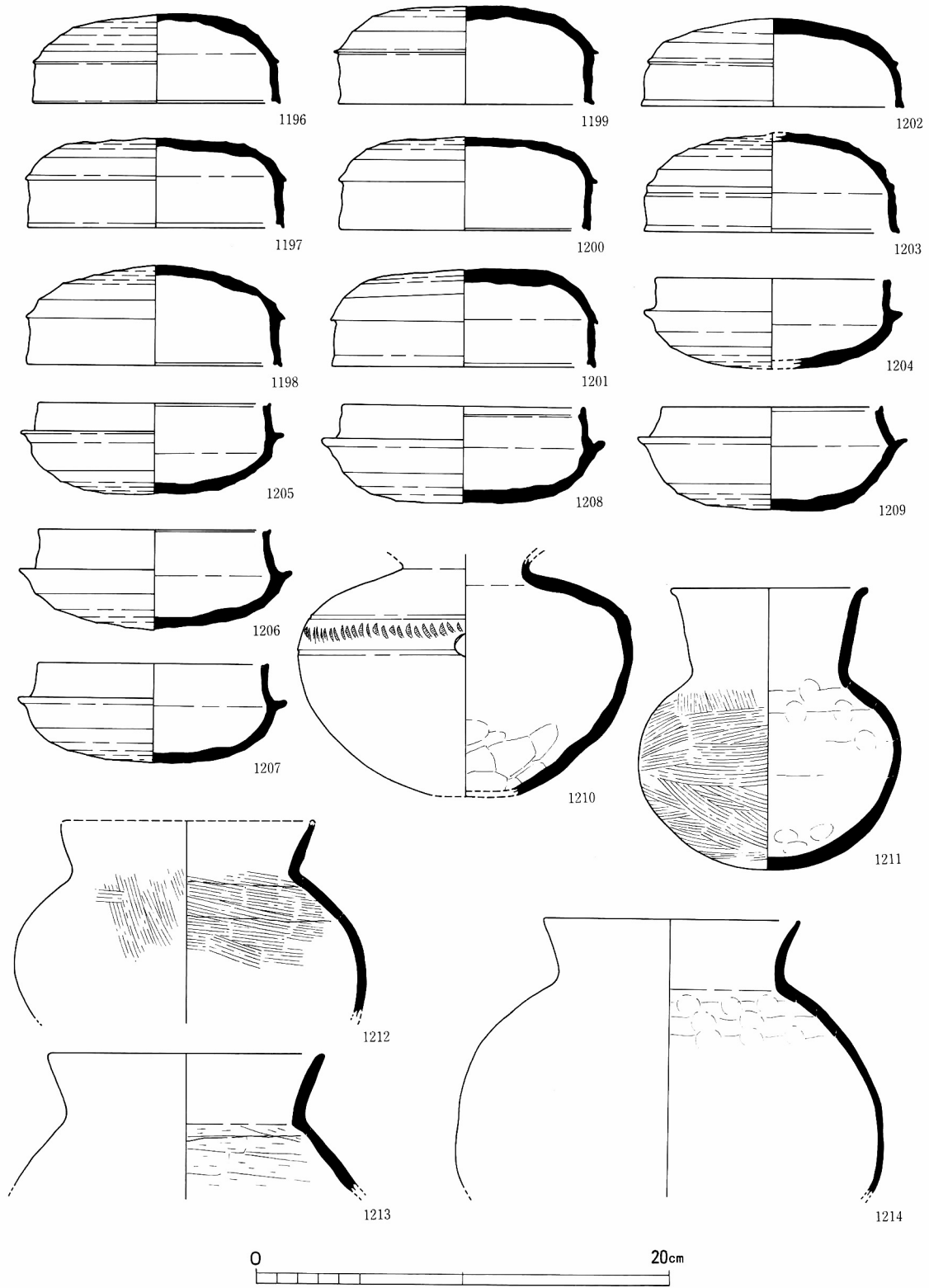
第520図 SH76遺物出土位置



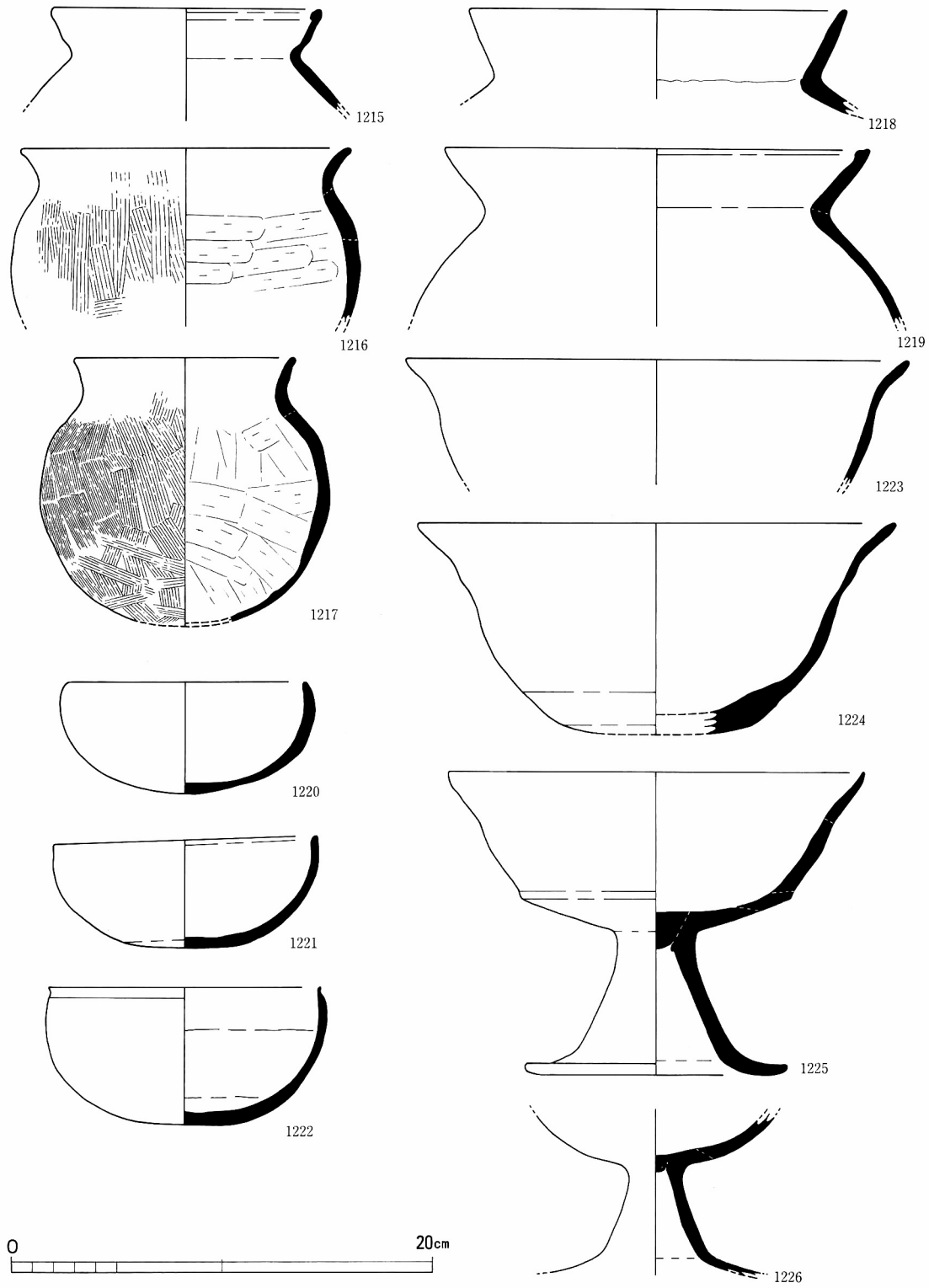
第521図 SH76出土鉄器



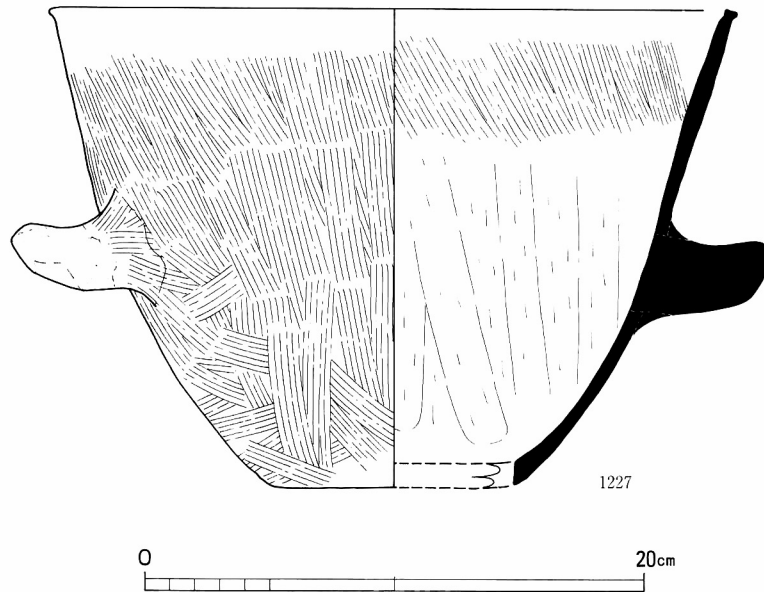
第522図 SH76出土石器



第523図 SH76出土土器(1)



第524図 SH76出土土器(2)



第525図 SH76出土土器(3)

第199表 SH76出土土器観察表(1)

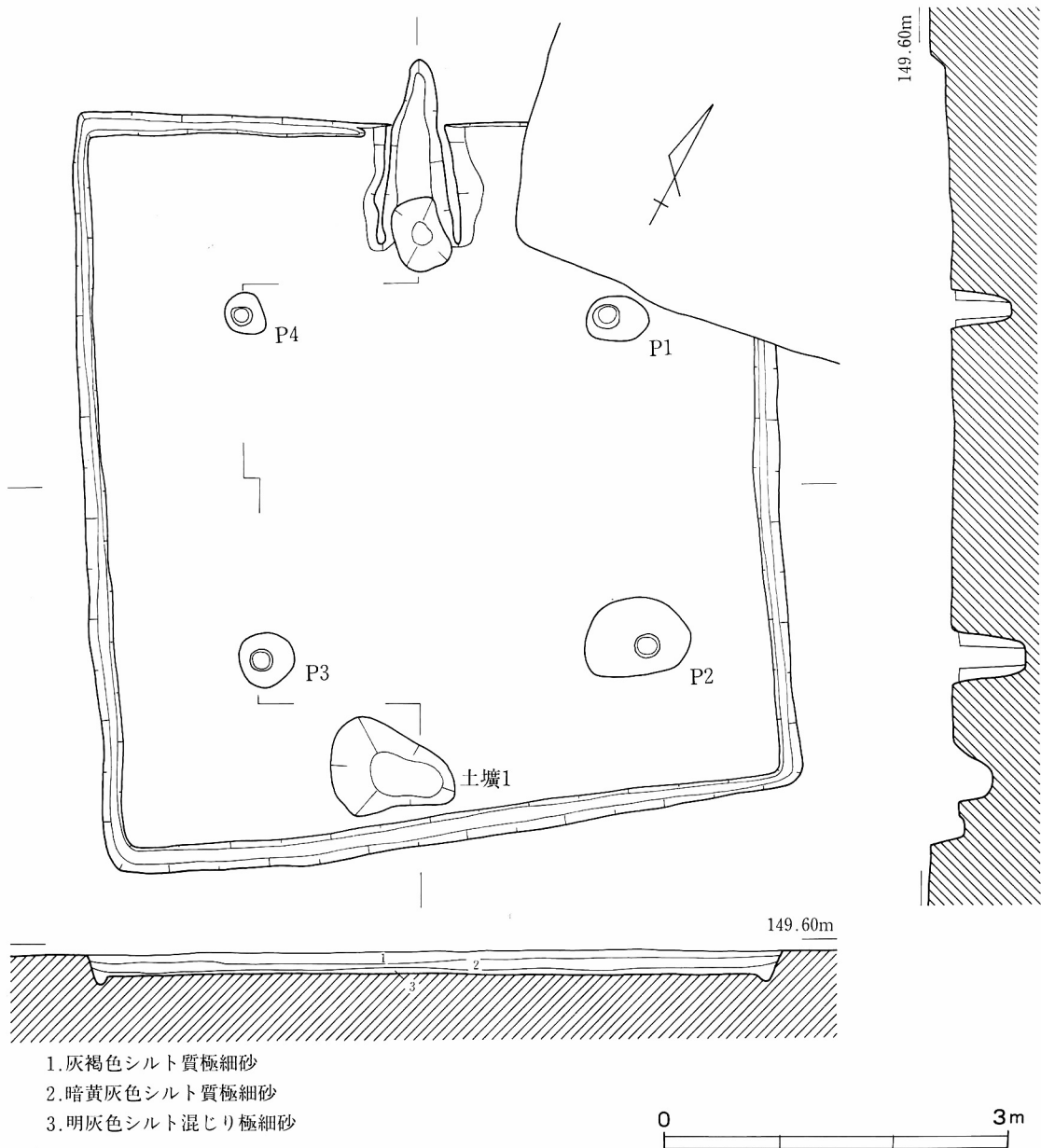
番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1196	須恵器蓋	口径 : 11.9 底径 : 器高 : 4.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰	完存	
1197	須恵器蓋	口径 : 12.4 底径 : 器高 : 4.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 緑灰 内面 : 灰	天井部完存 体部4/5	
1198	須恵器蓋	口径 : 12.3 底径 : 器高 : 4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	完存	
1199	須恵器蓋	口径 : 12.4 底径 : 器高 : 4.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	完存	
1200	須恵器蓋	口径 : 12.1 底径 : 器高 : 4.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	天井部・体部約2/3	
1201	須恵器蓋	口径 : 12.7 底径 : 器高 : 4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の3/4に逆時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	完存	
1202	須恵器蓋	口径 : 12.8 底径 : 器高 : 4.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の3/4に時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 青灰 内面 : 青灰	天井部完存 体部2/3	
1203	須恵器環	口径 : (11.4) 底径 : 器高 : (4.3) 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりはヨコナデ、底部の3/4に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	体部約1/8	受部に重ね 焼きの溶着 あり
1204	須恵器蓋	口径 : 12.4 底径 : 器高 : 4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部の4/5に時計回りの回転ヘラケズリ、体部はヨコナデ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	完存	
1205	須恵器環	口径 : 11.2 底径 : 器高 : 4.4 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりはヨコナデ、底部の3/4に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 青灰 内面 : 紫灰	たちあがり ・底部3/4	
1206	須恵器環	口径 : 11.1 底径 : 器高 : 4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりはヨコナデ、底部の2/3に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	完存	底部に×形 のヘラ記号
1207	須恵器環	口径 : 11.2 底径 : 器高 : 4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりはヨコナデ、底部の2/3に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 明青灰	完存	

第200表 SH76出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1208	須恵器 坏	口径 : (11.6) 底径 : 器高 : 4.6 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりヨコナデ、底部3/4に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	完存	
1209	須恵器 坏	口径 : 10.6 底径 : 器高 : 5.0 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりヨコナデ、底部4/5に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰	完存	
1210	須恵器 地	口径 : 底径 : 器高 : 残11.3 頸径 : 体部径 : 16.3	外面 : 体部全面に縦方向のタタキのちヨコナデ、2本の沈線の間列点文 内面 : ヨコナデ、底部に強いユビナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	体部完存	
1211	土師器 壺	口径 : (9.9) 底径 : 器高 : 13.6 頸径 : (7.8) 体部径 : 12.8	外面 : 頸部にヨコナデ、体部は縦方向あるいは左上がり斜め方向に施したハケメのち体部中央を横方向にハケ(6本/cm) 内面 : 成形のためユビオサエとナデのみ	外面 : 赤橙 内面 : 灰黄褐	口縁部1/2 体部3/4 底部完存	
1212	土師器 壺	口径 : 12.4 底径 : 器高 : 残13.0 頸径 : 10.9 体部径 : (20.8)	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 灰白	口縁部・体部 上半完存	
1213	土師器 壺	口径 : 底径 : 器高 : 残9.3 頸径 : (11.0) 体部径 : 17.0	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部に縦方向のハケメ(6本/cm) 内面 : 横方向のハケメ(5本/cm)	外面 : 灰褐 内面 : 褐灰	口縁部1/2 体部上半は 完存	
1214	土師器 壺	口径 : (13.2) 底径 : 器高 : 残6.6 頸径 : (11.6) 体部径 :	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部は逆時計回りのヘラケズリ	外面 : 淡赤橙 内面 : 褐灰	口縁部・肩部 約1/3	
1215	土師器 甕	口径 : (12.6) 底径 : 器高 : 残4.5 頸径 : (10.9) 体部径 :	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 赤 内面 : 暗赤	口縁部・肩部 1/8	
1216	土師器 甕	口径 : (15.4) 底径 : 器高 : 残8.0 頸径 : (14.0) 体部径 : (15.7)	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は縦方向のハケメ(6本/cm) 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部逆時計回りのヘラケズリ	外面 : 赤橙 内面 : 褐灰	口縁部わずか 体部上半は 1/4	
1217	土師器 甕	口径 : (10.4) 底径 : 器高 : 残12.4 頸径 : (9.9) 体部径 : (13.8)	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は縦方向のハケメ(7本/cm) 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部あるいは横方向のヘラケズリ	外面 : 褐灰 内面 : 浅黄橙	口縁部1/6 体部1/2	
1218	土師器 甕	口径 : (17.8) 底径 : 器高 : 残4.9 頸径 : (15.5) 体部径 :	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部1/8	
1219	土師器 甕	口径 : (20.0) 底径 : 器高 : 残8.2 頸径 : (16.4) 体部径 :	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は左上がり方向のハケメ 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部はナデ	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	口縁部1/4 肩部1/8	
1220	土師器 鉢	口径 : (11.2) 底径 : 器高 : 5.4 頸径 : 体部径 : 12.2	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面 : 灰 内面 : 灰黄	口縁部3/4 体部完存	
1221	土師器 鉢	口径 : 12.4 底径 : 器高 : 5.3 頸径 : 体部径 : 12.8	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 灰白	完存	
1222	土師器 鉢	口径 : (12.8) 底径 : 器高 : 6.5 頸径 : 体部径 : 13.5	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 赤橙 内面 : 明褐灰	完存	
1223	土師器 鉢	口径 : (23.6) 底径 : 器高 : 残5.7 頸径 : 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部から 体部約1/8	
1224	土師器 鉢	口径 : (22.8) 底径 : 器高 : (9.9) 頸径 : 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁わずか 体部1/4	
1225	土師器 高坏	口径 : (19.7) 底径 : 12.5 器高 : (14.2) 脚径 : 4.1 体部径 :	外面 : 坏部は磨滅のため調整不明、脚部はヨコナデ 内面 : 坏部は磨滅のため調整不明、柱状部は時計回りのヘラケズリ、 裾部にヨコナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部1/4 体部完存 脚部完存	
1226	土師器 高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残7.5 脚径 : 2.9 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 赤褐 内面 : 赤褐	体部1/10 柱状部完存	
1227	土師器 瓶	口径 : (26.8) 底径 : (9.7) 器高 : 19.0 頸径 : 体部径 : 20.2 (把手下端の計測)	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部は縦方向のハケメ(5本/cm) 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部は縦方向のヘラケズリ(上から下)	外面 : 灰白 内面 : 赤褐	口縁部1/2 体部完存 底部わずか	底部には5 ヶ所の孔か

SH77 (図版130・153)

- 検出状況** IV区の北西部、小微高地dのほぼ中央で検出された。SH76に切られている。
- 形状・規模** 平面形は、ややいびつな方形を呈している。SH76に切られるため不確実な部分があるが、各辺の規模は以下のとおりである。北辺から順に時計回りに示せば7.80m、7.40m、8.00m、8.60mとなり、東辺が短くなっている。検出面から床面までの深さは30cm、床面の標高は149.30mである。床面積は32.67㎡を測る。
- 埋土** 3層の水平堆積が認められた。上層に灰褐色シルト質極細砂、中層には暗黄灰色シルト質極細砂、下層には明灰色シルト混じり極細砂の堆積が認められた。
- 屋内施設** 竈・周壁溝・土壇・柱穴が検出された。
- 竈** 北辺のほぼ中央で造り付けの竈が検出された。竈は盛土によって築かれており、その規模は、焚口部の幅54cm、奥行き102cmを測り、残存高は最大値で15cmである。燃焼部には支



第526図 SH77

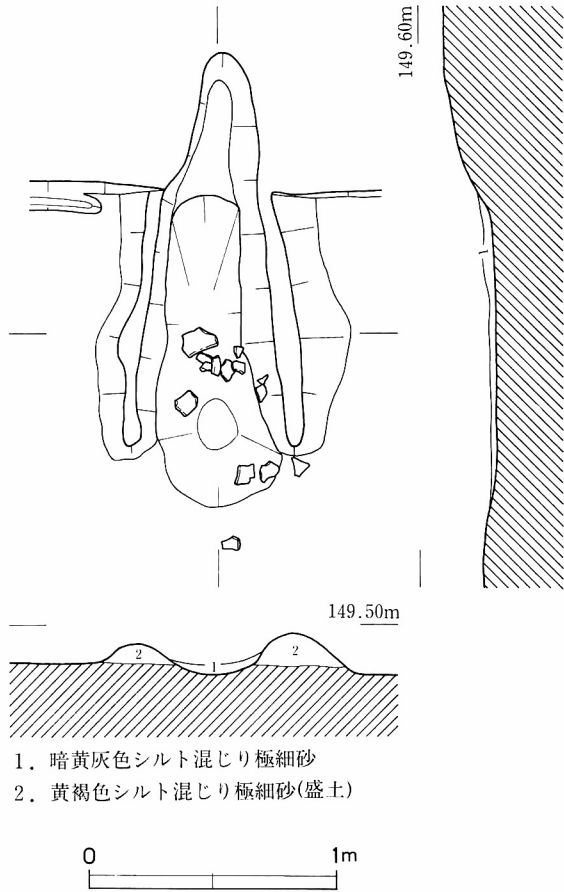
第6節 IV区の調査

脚が残存していなかった。焚口奥から屋外に向かっては、緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付いている。燃焼部には強く火を受けたことが焼土化によってうかがわれる。

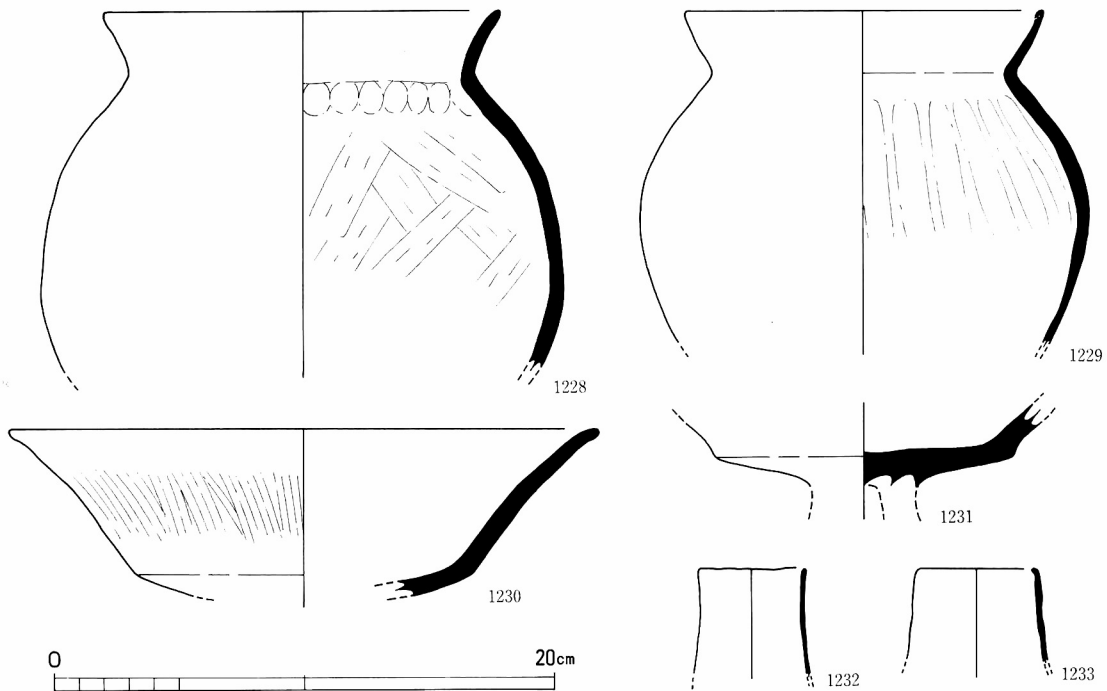
周壁溝 全周せず、竈付近には周壁溝が掘削されていない。床面での幅は15cm、底での幅は8cmであり、床面から底までの深さは6cmを測る。

土壌 1 住居跡南辺の中央やや西寄りの壁際で不整形の土壌が検出されている。規模は、長径115cm、短径60cm、深さ35cmを測る。明灰色シルト混じり極細砂の堆積が認められた。

柱穴 主柱穴は4穴である。
P 1は、掘り方の直径38cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは20cmである。P 2は、掘り方の直径60cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは37cmである。P 3は、掘り方の直径46cm、柱痕の直径18cm、床面からの深さは73cmである。P 4は、掘り方の直径25cm、柱痕の直径16cm、床面からの深さは52cmである。



第527図 SH77竈



第528図 SH77出土土器

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.84m、P 2～P 3間が3.33m、P 3～P 4間が2.92m、P 4～P 1間が3.18mと、4つの主柱穴で囲まれる範囲は南北にやや長い長方形であり、周壁の平面形とは相似形にはならない。

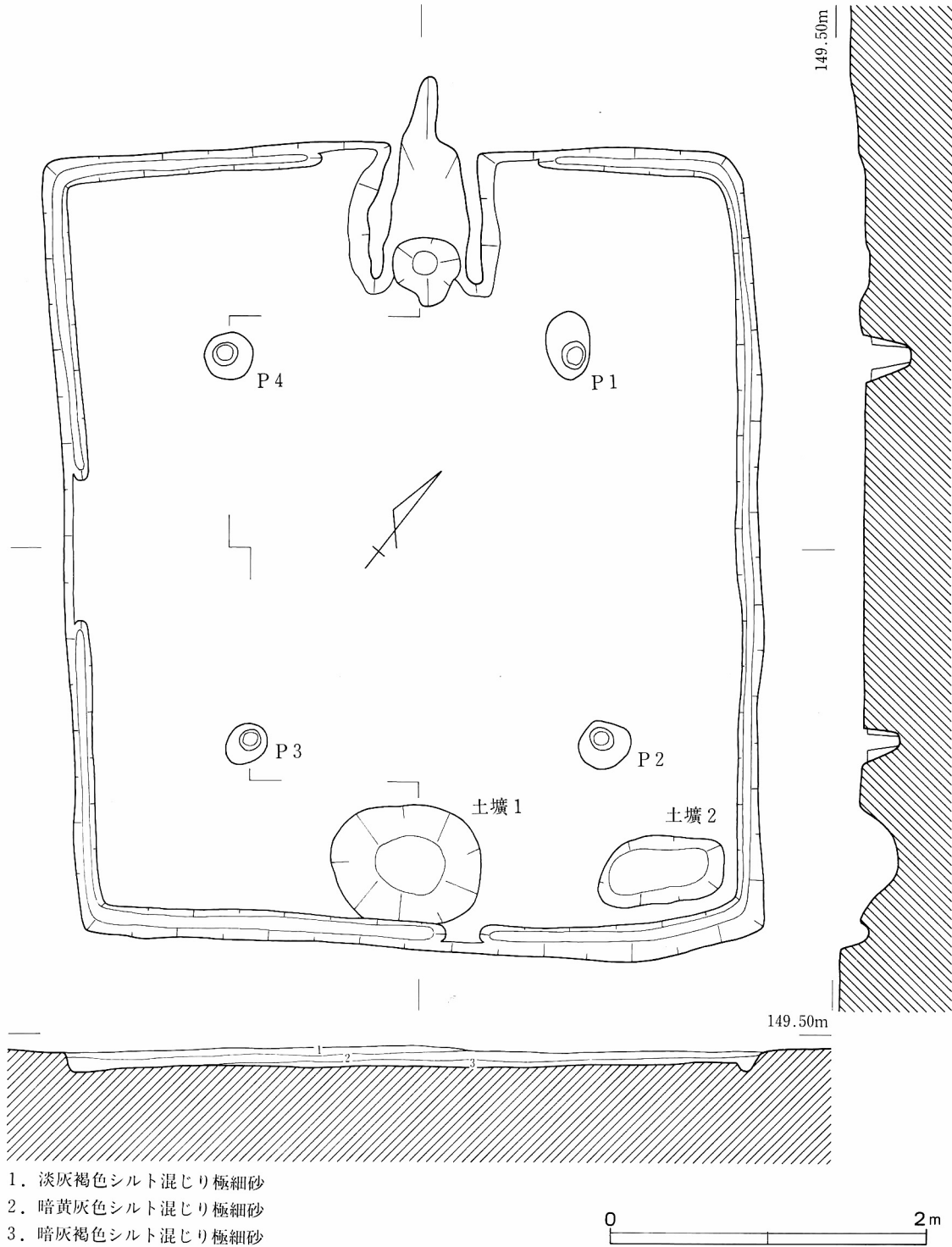
- 出土遺物** 遺物の出土量は多くない。図化した土器のうち、1229は土壌1から、1232は竈内から、他は住居跡埋土からの出土である。
- 須恵器** 坏蓋・高坏の脚部が出土しているが図化不可能な細片である。
- 土師器** 土師器には甕・高坏・製塩土器が出土している。
- 甕** 大小2種類のタイプがある。口縁部の形態にも違いがみられ、直線的な口縁部の端部を丸くおさめるものと、内湾する口縁部の端部を内側に肥厚させるいわゆる布留系の甕がある。
- 高坏** 全形をうかがえるものはない。体部・口縁部とも直線的にのび、その境が明瞭なタイプである。
- 製塩土器** 2個体図化した。器壁は非常に薄く、口縁部が直立ないしはやや内傾するものである。体部は磨滅が激しいため調整は不明であるが、外面の並行タタキは認められない。二次焼成は受けていないようである。
- 時期** 川除8期としてよいであろう。

第201表 SH77出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1228	土師器 甕	口径 : (15.8) 底径 : 器高 : 残14.2 頸径 : (14.0) 体部径 : (21.0)	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部にナデ 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部は上から下方向のヘラケズリ	外面 : 浅黄橙 内面 : にぶい 褐	口縁部1/10 体部1/4	
1229	土師器 甕	口径 : (14.3) 底径 : 器高 : 残13.2 頸径 : (12.2) 体部径 : (17.9)	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部上半に縦方向のユビナデ	外面 : 灰黄 内面 : にぶい 橙	口縁部・体 部上半1/4	
1230	土師器 高坏	口径 : (23.6) 底径 : 器高 : 6.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部に縦方向のハケのちヨコナデ 内面 : 口縁部に横方向のハケのちヨコナデ	外面 : にぶい 橙 内面 : にぶい 橙	口縁部2/3 体部1/10	
1231	土師器 高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残3.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部にヨコナデ、体部に縦方向のハケのちヨコナデ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 黄橙 内面 : にぶい 橙	体部1/4	
1232	土師器 製塩土器	口径 : (4.2) 底径 : 器高 : 残4.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 淡黄 内面 : 淡黄	体部上半 約1/8	
1233	土師器 製塩土器	口径 : (4.8) 底径 : 器高 : 残3.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 褐灰 内面 : 褐灰	体部上半 約1/4	

SH78

- 検出状況** IV区のほぼ中央、小微高地dの南寄りで見出された。中世の遺構SD113・SD114に切られている。
- 形状・規模** 平面形は、長方形を呈している。各辺の規模は以下のとおりである。北西辺から順に時計回りに示せば4.35m・4.90m・4.30m・4.80mとなっている。検出面から床面までの深さは8cm、床面の標高は149.30mである。床面積は19.36㎡を測る。
- 埋土** 3層に分かれ、上層には淡灰褐色シルト混じり極細砂が、中層には暗黄灰色シルト混じり極細砂が、下層には暗灰褐色シルト混じり極細砂の堆積が認められた。



第529図 SH78

屋内施設 竈・周壁溝・土壙2基・柱穴が検出された。

竈 北西辺の中央やや北寄りで作付けの竈が検出された。竈は盛土によって築かれており、その規模は、焚口部の幅42cm、奥行き97cmを測り、残存高は最大値で10cmである。燃烧部は若干窪み、焼土層が間層を挟んで上下2層にわたって認められた。支脚に利用されたとされる礫などは存在しなかった。焚口奥から屋外に向かっては、緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付けられている。

周壁溝 全周せず、竈付近および土壙1付近には周壁溝が掘削されていない。床面での幅は12cm、底での幅は5cmであり、床面から底までの深さは5cmを測る。

土壙1 住居跡北東辺の中央の壁際で楕円形の土壙が検出されている。規模は、長径95cm、短径72cm、深さ25cmを測る。暗灰褐色シルト混じり極細砂の堆積が認められた。

土壙2 床面東隅に位置する長方形の土壙である。規模は、長さ80cm、幅44cm、深さ7cmを測る。土壙1と同じく暗灰褐色シルト混じり極細砂の堆積が認められた。

柱穴 主柱穴は4穴である。P1は、掘り方の直径27cm、柱痕の直径15cm、床面からの深さは18cmである。P2は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径15cm、床面からの深さは19cmである。P3は、掘り方の直径24cm、柱痕の直径13cm、床面からの深さは23cmである。P4は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径15cm、床面からの深さは28cmである。

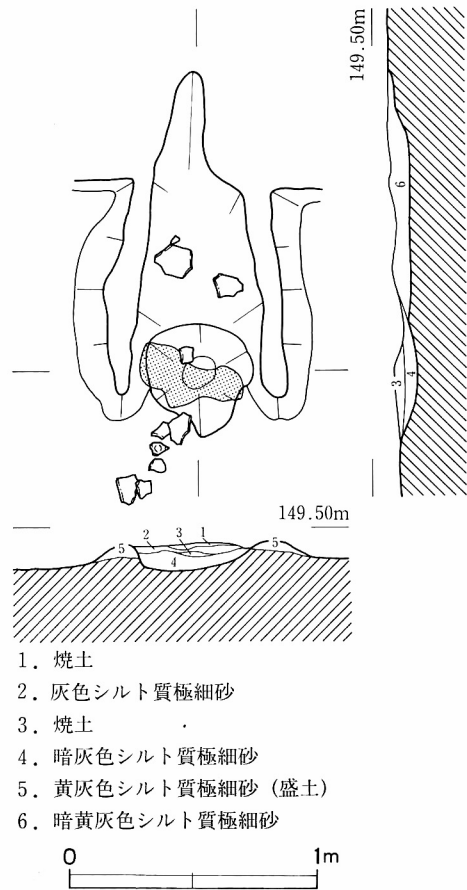
柱穴間の距離は、P1～P2間が2.37m、P2～P3間が2.22m、P3～P4間が2.42m、P4～P1間が2.21mと、主柱穴を結ぶ範囲の平面形は長方形を呈しており、周壁の平面形と相似形となっている。

出土遺物 須恵器の坏蓋、土師器の甕・椀が出土している。

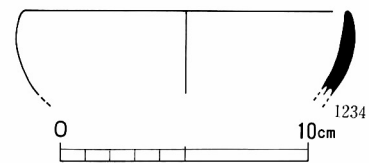
須恵器 小片のため、形態・時期などは不明である。

土師器 甕は小片であり、土壙1より出土した椀(1234)のみを図化した。

時期 出土土器からは断定しがたいが、川除8期としてよいであろう。



第530図 SH78竈



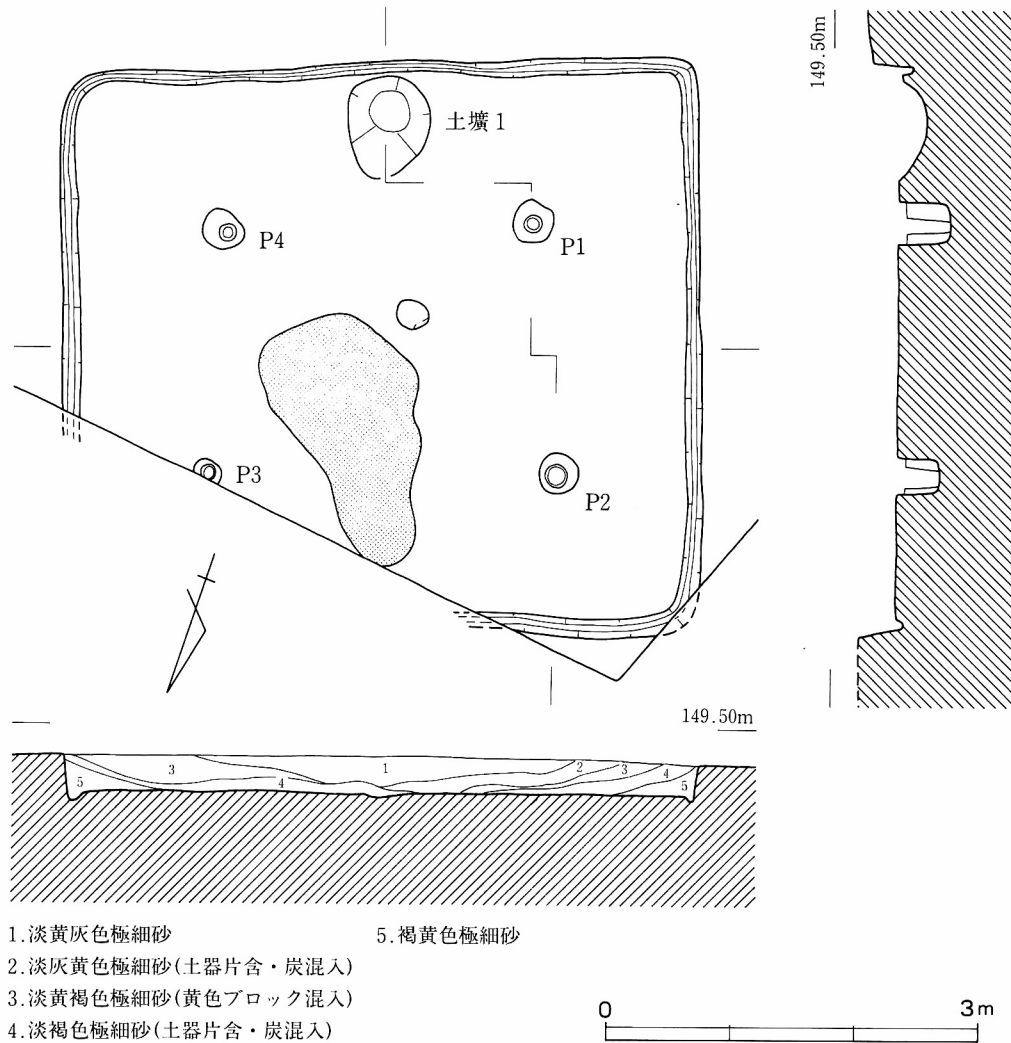
第531図 SH78出土土器

第202表 SH78出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1234	土師器 椀	口径 : (13.0) 底径 : 器高 : 残3.4 脚径 : 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部1/2	

SH79 (図版131・153)

検出状況 IV区の南西部に位置している。当住居跡の南側約12mには小微高地dの落ち際がある。したがって小微高地dの南西端部よりややはいったところで検出されたことになる。SH80



第532図 SH79

の北側約8mのところの位置している。他の遺構との切り合い関係ではSK128・129を切っている。当住居跡は全体を検出したわけではなく、北側と西側の一部が調査範囲外にのびている。

形状・規模 平面形は全体が検出されていないが方形を呈しているようである。

規模は南辺は4.85m、西辺はごく一部が調査範囲外にのびているが4.50m、北辺はかなりの部分が調査区外であるが、検出された長さで1.50m、東辺も検出された長さのみで2.65mである。

検出面から床面までの深さは25cm、床面の標高は149.00mである。床面積は検出された部分では20.08㎡である。

埋土 5層が堆積している。上層から淡黄灰色極細砂、土器片・炭化物を含む淡灰黄色極細砂、黄色ブロックの混入する淡黄褐色極細砂、土器片・炭化物を含む淡褐色極細砂、褐黄色極細砂の堆積が認められる。

屋内施設 周壁溝・柱穴・土壙が検出された。

周壁溝 検出している範囲内では壁際で全周して検出された。

床面での幅は10cm、底部での幅は5cmであり、床面からの深さは4cmを測る。

柱穴 4穴検出された。この他に柱穴は検出しておらず、したがってこの4穴が主柱穴を構成していると考えられる。よって当住居跡は4本柱の構造を持つ住居跡であることが確認された。

位置はそれぞれの壁より約1.20m内側にはいったところで検出されている。

P 1は、掘り方の直径34cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは20cmである。P 2は、掘り方の直径32cm、柱痕の直径20cm、床面からの深さは43cmである。P 3は、掘り方の直径24cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さは25cmである。P 4は、掘り方の直径34cm、柱痕の直径14cm、床面からの深さは20cmである。

柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.00m、P 2～P 3間が2.45m、P 3～P 4間が1.92m、P 4～P 1間が2.30mである。

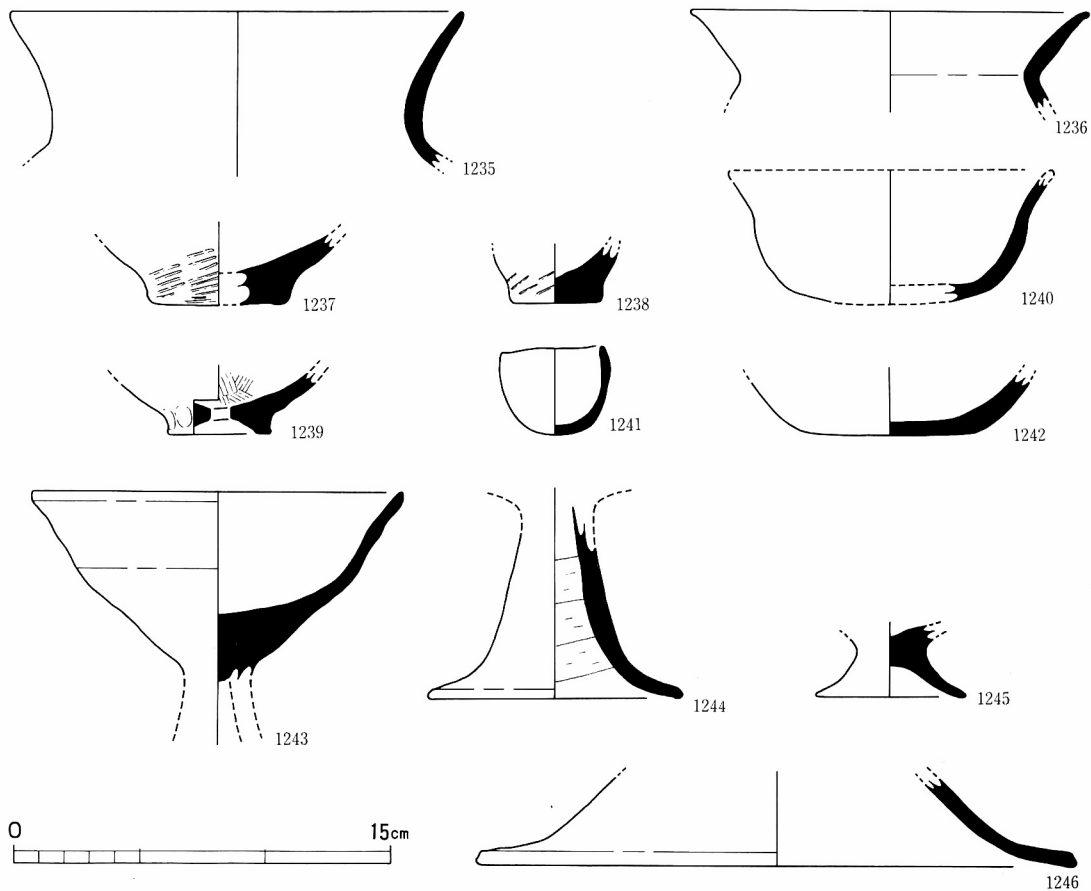
土壙 1 住居跡の南部の壁際で土壙を検出している。壁際であるが、周壁溝とは重なっておらず、周壁溝から少し離れて検出されている。

土壙 1の平面形は不定形を呈しているが、強いていえば楕円形を指向しているようである。規模は長軸方向に84cm、短軸方向に66cmを測る。検出面からの深さは20cmである。

この土壙は貯蔵穴であると考えている。

出土遺物 埋土中より土師器のみが出土している。壺・甕・鉢・高坏・甑・器台の各器種が出土している。そのうち図化しているものは12点である。

壺 1点の図化である。1235は広口壺である。口縁部をヨコナデで仕上げている。



第533図 S H79出土土器

第6節 IV区の調査

甕 3点を図化している。口縁部のものが1点と底部から体部下半のものが2点である。底部から体部下半のものは外面にタタキを施している。1236は小型のものである。

高坏 3点を図化している。坏部が2点と脚部が1点である。1243は深い体部に外反する口縁部をもつものである。口縁端部が欠失している。1240は坏部のみの出土である。口縁部と体部の境は不明瞭であるが、にぶい稜がめぐっている。1244は脚部である。中空のもので、裾部は大きくひろがる。内面の調整は脚柱部に横方向のヘラケズリを施している。裾部内外面には横方向のナデで仕上げている。

器台 中型のものである。大きく開く裾部のみの出土である。裾端部は横方向のナデで仕上げ、裾部は不定方向のナデで仕上げている。

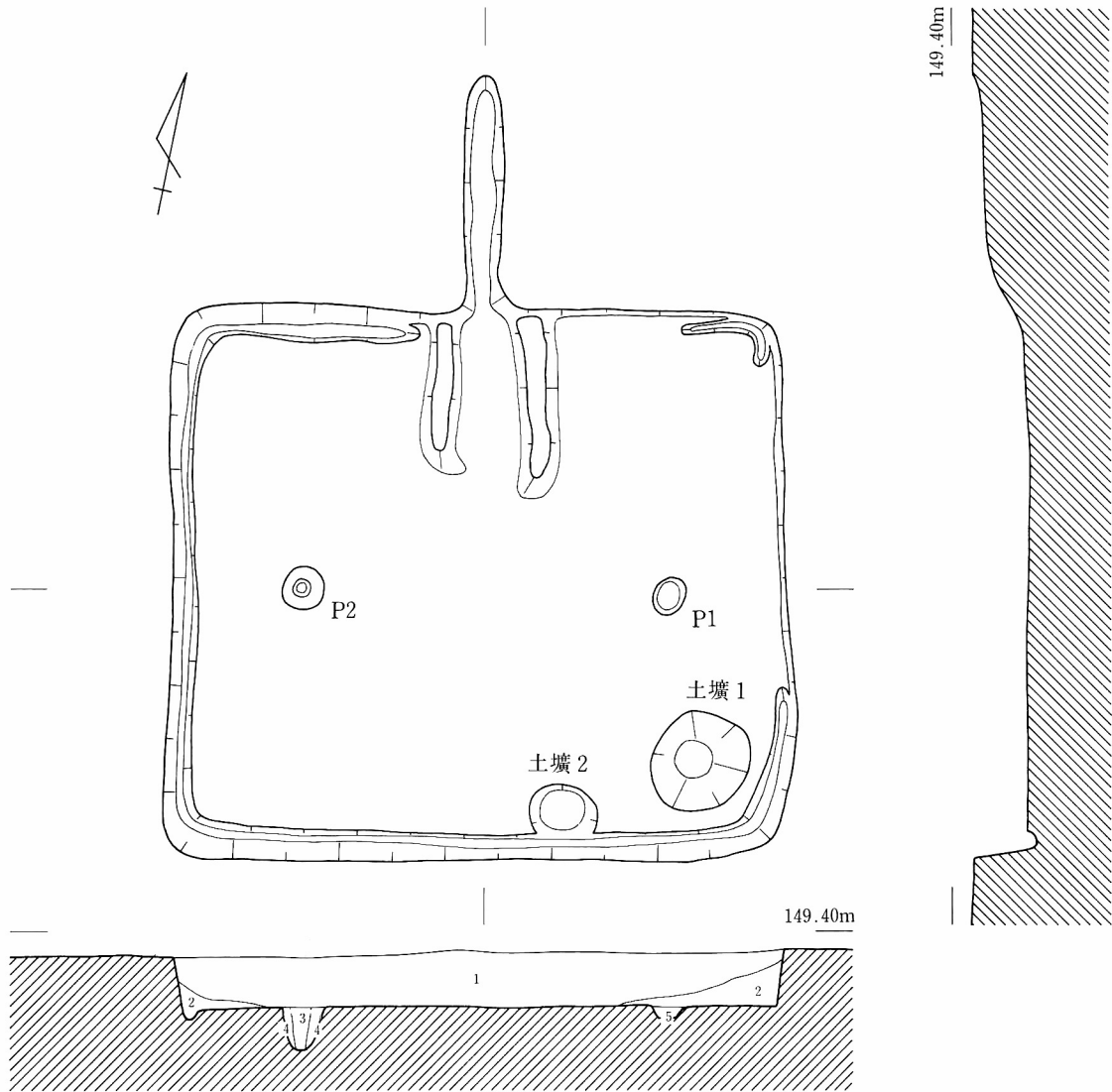
時期 川除8期である。

第203表 SH79出土土器観察表

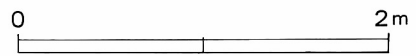
番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1235	壺	口径 : (18.0) 底径 : 器高 : 残6.2 頸径 : (14.8) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 淡黄	口縁部1/6	
1236	甕	口径 : (16.0) 底径 : 器高 : 残3.8 頸径 : (12.0) 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 明黄褐 内面 : 明黄褐	口縁部1/8	
1237	甕	口径 : 底径 : (5.2) 器高 : 残2.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部~体部4条/cm右上がりタタキ 内面 : 磨滅のため調整不明	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	底部約1/2	
1238	甕	口径 : 底径 : (3.4) 器高 : 残2.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部~体部3条/cm右上がりタタキ、底面ナデ 内面 : 底部ユビオサエ	外面 : にぶい 黄褐 内面 : 淡黄	底部約ほぼ 完存	
1239	甕	口径 : 底径 : 4.2 器高 : 残2.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部ユビオサエ、底部ユビナデ 内面 : 底部~体部下→上螺旋状ハケ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	底部完存 体部わずか	
1240	高坏	口径 : 底径 : 器高 : 残4.9 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ナデ 内面 : 体部ナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	体部約1/4 口縁部欠	
1241	ミニチュア鉢	口径 : 4.3 底径 : 器高 : 3.6 頸径 : 体部径 :	外面 : } 内面 : } 手捏ね	外面 : にぶい 橙 内面 : 灰黄	約1/2	
1242	碗	口径 : 底径 : (7.0) 器高 : 残2.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部~体部ナデ 内面 : 体部弱いヘラケズリ、底部ナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 淡黄	底部完存 体部わずか	
1243	高坏	口径 : (14.8) 底径 : 器高 : 残7.3 脚柱径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部縦ヘラナデ 内面 : 口縁部~体部ヘラナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	坏部約1/4	
1244	高坏	口径 : 底径 : (9.6) 器高 : 残7.8 脚柱径 : 体部径 :	外面 : 脚端部ヨコナデ、脚柱部ナデ 内面 : 脚端部ヨコナデ、脚柱部右→左ヘラケズリ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	脚柱部ほぼ 完存 端部わずか	
1245	鉢?	口径 : 底径 : (6.0) 器高 : 残2.8 頸径 : 体部径 :	外面 : } 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 黄橙 内面 : "	脚部約1/2	
1246	器台	口径 : 底径 : (23.6) 器高 : 残3.5 頸径 : 体部径 :	外面 : 裾端部ヨコナデ、裾部ナデ 内面 : 裾端部ヨコナデ、裾部ナデ	外面 : 灰白 内面 : 浅黄橙	裾部約1/8	

SH80 (図版131・132)

検出状況 IV区の南西部に位置している。当住居跡のすぐ南側には小微高地dの落ち際がある。したがって小微高地dの南端部で検出された。他の遺構との切り合い関係ではSH81を切っ



- 1. 淡黄灰色極細砂(黄色と淡褐色土ブロック状混入)
- 2. 淡褐色極細砂(炭化物混入)
- 3. 淡灰色極細砂
- 4. 黄褐色極細砂
- 5. 淡黄褐色極細砂



第534図 SH80

ている。

形状・規模 平面形は長方形を呈している。規模は北辺が3.30m、東辺が2.92m、南辺が3.32m、西辺が3.00mとなる。

検出面から床面までの深さは30cm、床面の標高は149.00mである。床面積は8.31㎡である。

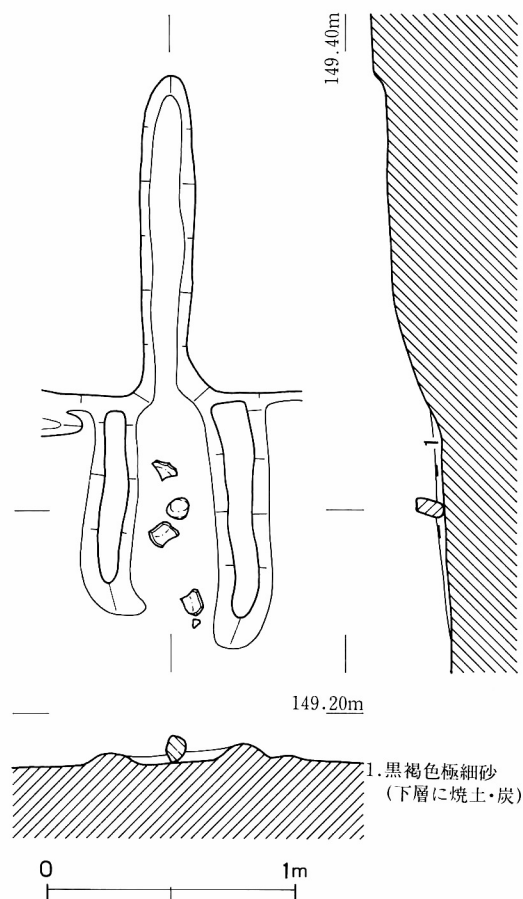
埋土 柱穴の部分を除いて2層が堆積している。上層には黄色と淡褐色極細砂のブロックの混入している淡黄灰色極細砂が、下層には炭化物の混入している淡褐色極細砂の堆積が認められた。

屋内施設 竈・周壁溝・柱穴・土壙が検出された。

竈 北辺のほぼ中央部で造り付けの竈が検出された。竈は盛土によって築かれており、その規模は、焚口部の幅28cm、奥行き103cmを測り、残存高は最大値で5cmである。燃焼部は若

干窪み、焚口部はそれよりもさらに若干の窪みが認められる。竈の燃焼部のほぼ中央部には楕円形の礫を利用した支脚が設置されている。

焚口奥から屋外に向かっては、緩やかな傾斜をもって煙道部が取り付く。煙道部の規模は全長130cm、幅は検出面で18~23cm、底部で8~13cmである。平面形は溝状を呈しているが、住居跡の壁に近いところではやや狭く、離れるにしたがって広がっている。深さは壁際ほど深く、離れるにしたがって浅くなっていく。竈内の底部は焚口から支脚にかけてのあいだが、焼けて赤化しているのが認められた。



第535図 SH80竈

周壁溝 北辺の竈よりも西側の西辺および南辺・東辺の一部と北東部のコーナー付近で周壁溝が検出された。

床面での幅は15cm、底での幅は6cmであり、床面からの深さは5cmを測る。

柱穴 2穴検出された。位置はP1は東辺から約65cm内側に、P2は西辺から約70cm内側に入ったところの、東西両辺のほぼ中央部をむすんだライン上で検出されている。他に柱穴が検出されていないことや、検出された2穴の位置関係から当住居跡は2本柱で構成される住居と考えられる。

P1は、掘り方の直径18cm、床面からの深さは4cmである。P2は、掘り方の直径23cm、柱痕の直径8cm、床面からの深さは24cmである。

柱穴間の距離は、1.98mである。

土壌 住居跡の南東部で土壌を2基検出している。

土壌1 南東部のコーナー付近で検出されたものである。平面形は円形に近い楕円形を呈している。規模は長軸方向に60cm、短軸方向に50cmを測る。検出面からの深さは13cmである。

土壌2 土壌1より西側に約30cm離れて検出された。南辺の周壁溝に接して造られている。平面形は楕円形を呈している。規模は長軸方向に36cm、短軸方向に28cmを測る。検出面からの深さは15cmである。

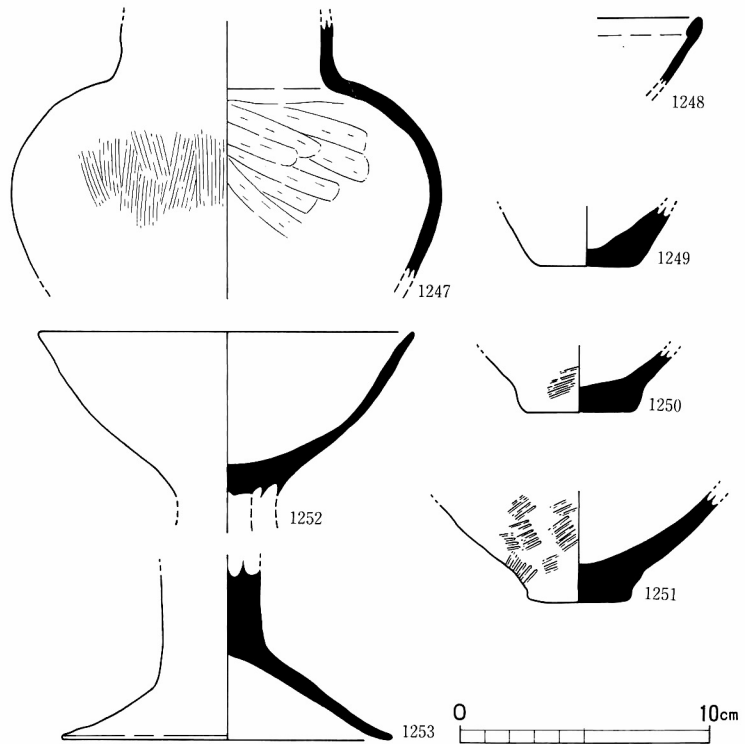
これらの2基の土壌は貯蔵穴と考えている。

出土遺物 土師器のみが出土している。そのうち図化できたものは7点である。

出土器種 壺・甕・高坏の各器種が出土している。

壺 1点のみの図化である。広口壺か短頸壺になると思われるものである。肩部の張った体部に直立気味に立ち上がる頸部をもっている。内面の体部と頸部の接合部は明瞭で稜線が

甕
みられる。内面は左上がりのヘラケズリを施している。外面体部は縦方向のハケで仕上げられている。口縁部が1点と底部が3点の図化である。1248は口縁部である。細片であるために口径を復元することはできなかった。内湾気味に立ち上がり、口縁端部を内側に肥厚させている。底部は磨滅のために調整が不明のものをぞいては、外面に



第536図 S H80出土土器

タタキ、内面にナデを施しているものが多い。

高坏
2点図化している。1252は坏部である。比較的深いものである。内湾気味に立ち上がる口縁部をもっているが、口縁部と体部との境界は明瞭ではない。1253は脚部である。中実の脚柱部をもって、裾部は直線的に外方に開いている。裾端部は丸くおさめている。

時期
川除8期である。

第204表 S H80出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1247	壺	口径 : 底径 : 器高 : 残10.1 頸径 : (9.6) 体部径 : (17.3)	外面 : 頸部ヨコナデ、体部6条/cmタテハケ 内面 : 頸部ヨコナデ、体部左上がりヘラケズリ	外面 : 褐 内面 : 灰白 褐灰	体部・口縁 部わずか	
1248	甕	口径 : 底径 : 器高 : 残3.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 明赤褐 内面 : 明赤褐	口縁部 わずか	
1249	甕	口径 : 底径 : (3.6) 器高 : 残2.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : にぶい 黄橙 内面 : #	底部約2/3 体部わずか	
1250	甕	口径 : 底径 : (4.2) 器高 : 残2.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下位~底部右上がりタタキ 内面 : ナデ	外面 : にぶい 黄橙 内面 : 灰	底部約1/2 体部わずか	
1251	甕	口径 : 底径 : (4.0) 器高 : 残4.4 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部下位~底部5条/cm右上がりタタキ、底面ナデ 内面 : ナデ	外面 : にぶい 黄橙 内面 : #	底部約2/3 体部わずか	
1252	高坏	口径 : (14.5) 底径 : 器高 : 残6.5 脚柱径 : 坏部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 明赤褐 内面 : 明赤褐	坏部約1/8	
1253	高坏	口径 : 底径 : 13.2 器高 : 残6.7 脚柱径 : 4.0 坏部径 :	外面 : 内面 : } 磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	脚部~裾部 約1/2	

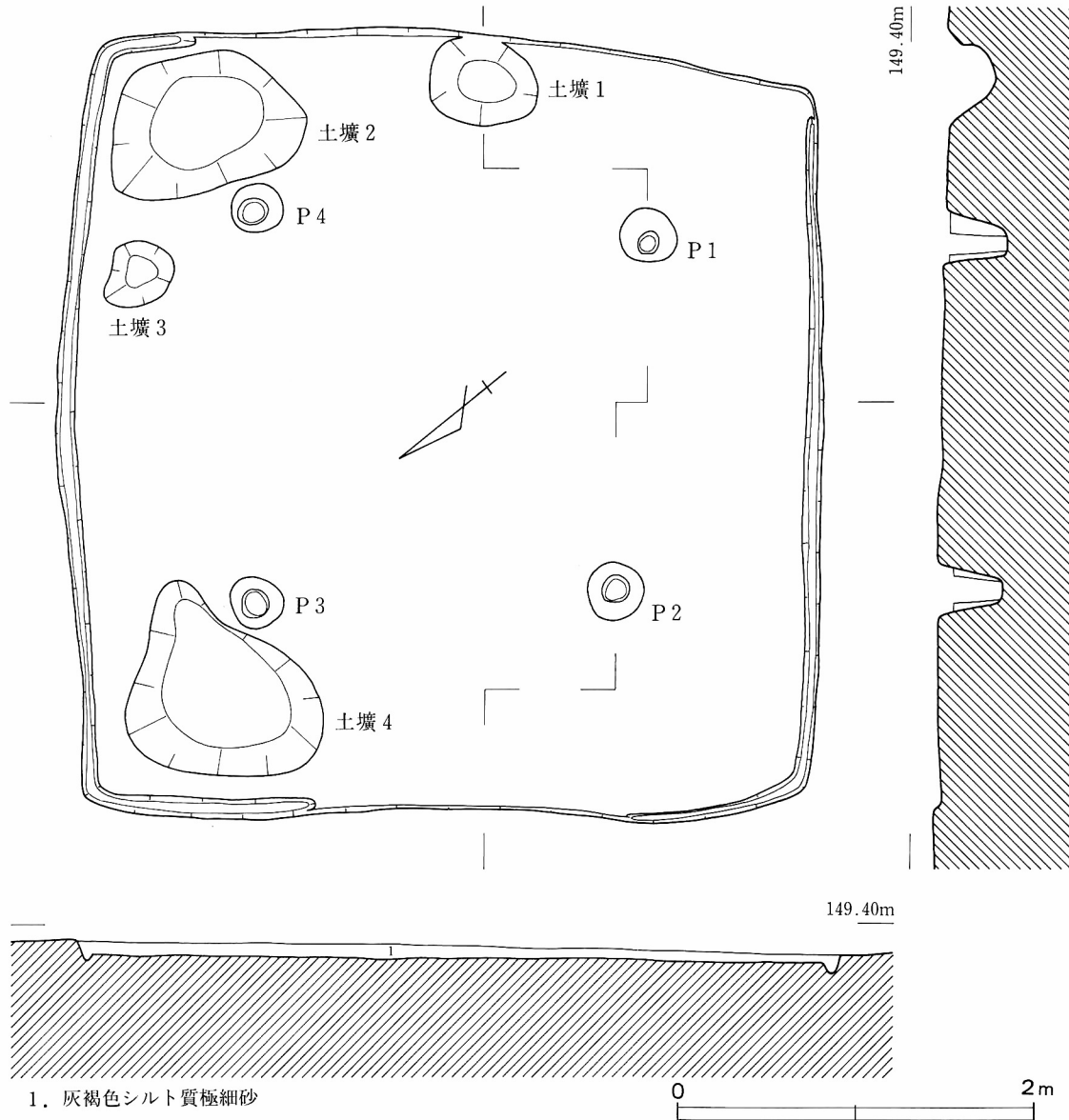
SH83 (図版131)

検出状況 IV区の南西部に位置している。当住居跡の南は小微高地dの落ち際がある。したがって小微高地dの南西端部の際で検出されたことになる。SH80の南東側約12mのところに位置している。他の遺構との切り合い関係では、SK133を切っている以外には切り合いはみられない。

形状・規模 平面形はややいびつな形状であるが方形を呈している。
規模は南東辺が3.95m、南西辺が3.90m、北西辺が4.05m、北東辺が4.18mである。南西辺が比較的短く、北東辺が最も長い。このため厳密に言えば形状は台形を呈していると言える。

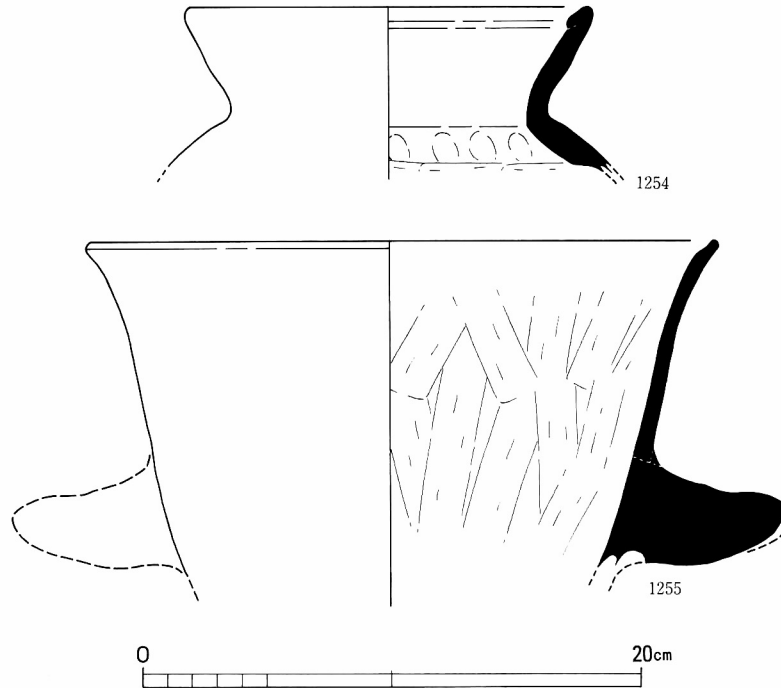
検出面から床面までの深さは5cmと比較的浅い。床面の標高は149.20mである。床面積は16.90㎡である。

埋土 1層が堆積している。土器・炭化物を含む灰褐色シルト質極細砂の堆積が認められる。



第537図 SH83

- 屋内施設** 周壁溝・柱穴・土壌が検出された。
- 周壁溝** 全周して検出されているわけではない。南東辺ではほとんど検出されていない。わずかに東側のコーナー付近に約50cm程度検出されている。南西辺と北東辺はほぼ周壁溝が巡っている。北西辺は北側のコーナーから約120cm、西側のコーナーから95cm程度の検出にとどまり、中央部付近は途切れている。
- 周壁溝の規模は床面での幅は5～8cm、底部での幅は3～5cmであり、床面からの深さは5cmを測る。
- 柱穴** 4穴検出された。この他に柱穴は検出しておらず、したがってこの4穴が主柱穴を構成していると考えられる。よって当住居跡は4本柱の構造を持つ住居跡であることが確認された。
- 位置は全体として西側にわずかにかたよって検出された。平面形は全体として住居跡の平面形と相似形を呈している。
- P 1は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径12cm、床面からの深さは34cmである。P 2は、掘り方の直径34cm、柱痕の直径15cm、床面からの深さは32cmである。P 3は、掘り方の直径30cm、柱痕の直径16cm、床面からの深さは29cmである。P 4は、掘り方の直径28cm、柱痕の直径17cm、床面からの深さは28cmである。
- 柱穴間の距離は、P 1～P 2間が1.95m、P 2～P 3間が2.03m、P 3～P 4間が2.18m、P 4～P 1間が2.24mである。
- 土壌** 住居跡内で土壌を4ヶ所検出している。
- 土壌 1** 南東壁のほぼ中心部で検出したものである。壁に接する位置で検出している。平面形は楕円形を指向している。
- 埋土は2層が堆積している。上層に淡褐色極細砂、下層に土器片・炭化物を含む淡褐色シルト質極細砂の堆積が認められる。
- 規模は長軸方向に62cm、短軸方向に46cmを測る。床面からの深さは25cmである。
- 土壌 2** 西側のコーナー部分とP 4との間で検出したものである。コーナー・柱穴のいずれにも近接しておりその間に残されたスペースはほとんどない。平面形は不整形を呈しているが、コーナー部分ではその形状に規制されている。
- 埋土は2層が堆積している。上層に淡褐色シルト質極細砂、下層に淡灰褐色シルト質極細砂の堆積が認められる。
- 規模は長軸方向に115cm、短軸方向に75cmを測る。床面からの深さは18cmである。
- 土壌 3** 土壌 2から約23cm離れて検出されている。北東壁際で検出されたものである。平面形は不整形を呈している。比較的小さい土壌である。
- 規模は長軸方向に42cm、短軸方向に34cmを測る。床面からの深さは10cmである。
- 土壌 4** 北側のコーナー部分のP 3との間で検出したものである。ちょうど土壌 2と同程度の規模をもち、位置的にも対称をなすものである。形状は不整形を呈しているが、P 3を避けるように掘られている。
- 埋土は2層が堆積している。上層に淡褐色シルト質極細砂、下層に淡灰褐色シルト質極細砂の堆積が認められる。



第538図 SH83出土土器

規模は長軸方向に126cm、短軸方向に83cmを測る。床面からの深さは13cmである。

竈 北西辺のほぼ中央部の壁際から内側に約30cmはいったところで、床面が焼けて赤化しているのが検出された。土壇1と中心部をはさんで反対側である。以上のような状況から、竈の焚口の痕跡であると考えられる。住居跡の深さが5cm程度と浅いために、竈の本体の検出はできなかった。また煙道も検出されていない。

出土遺物 埋土中より土師器のみが出土している。甕・甔が出土している。そのうち図化しているものは2点である。

甕 1点を図化している。口縁部はやや内湾ぎみにたちあがり、口縁端部を内側に肥厚させている。調整は外面は体部に横方向のナデを施している。内面は体部に横方向ナデのち時計回りのヘラケズリを施している。口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。口縁部と体部との境にはにぶい稜が巡っている。体部上位にはユビオサエの痕跡が残る。

甔 把手を持つものである。下半は欠失している。調整は体部内面に縦方向のヘラケズリを施し、外面には不定方向のナデを施す。口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。

時期 川除8期である。

第205表 SH83出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1254	土師器 甕	口径 : (16.0) 底径 : 器高 : 残7.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデのち時計回りのヘラケズリ	外面 : 明赤褐 内面 : 明赤褐	口縁部1/8 肩部1/5	
1255	土師器 甔	口径 : (25.0) 底径 : 器高 : 残12.8 頸径 : 体部径 : 17.1 (把手下端の計測)	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部にナデ 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部に上から下方向のヘラケズリ	外面 : 灰白 内面 : 淡黄	口縁部から 体部上半約 1/8	

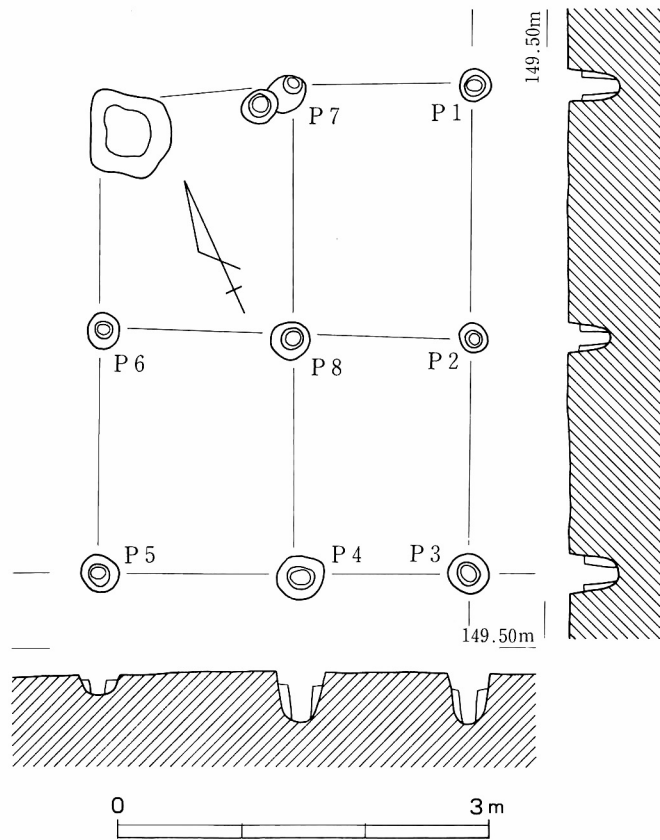
(2) 掘立柱建物

S B 7 9

検出状況 IV区の南西部で検出された。小微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の縁辺にあたる。S H80の東側約3mの場所に位置している。他の遺構との切り合い関係は、S H81を切っている。

形状・規模 N-26°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の掘立柱建物である。束柱の存在している総柱の掘立柱建物である。

規模は桁行方向が3.88m、梁行方向が3.00mと確認された。面積は11.64㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.94m、梁行が1.50mである。



第539図 S B 7 9

柱穴 柱穴の掘り方の直径は22~40cmである。深さは32~41cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は11~20cmである。深さは32~41cmを測る。

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礫詰のようなものの存在も確認されなかった。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、中世の掘立柱建物とは方向が同一ではないこと、弥生時代の竪穴住居跡であるS H81を切っていることなどから、当遺構は川除8期と考えたい。

S B 8 1

検出状況 IV区の南西部で検出された。小微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の縁辺にあたる。S H80の東側約2.5mの場所に位置している。他の遺構との切り合い関係は、S H81を切っている。

形状・規模 N-30°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の掘立柱建物である。束柱の存在している総柱の掘立柱建物である。規模は桁行方向が3.16m、梁行方向が2.67mと確認された。面積は8.44㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.58m、梁行が1.33mである。

柱穴 すべてのものについて、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡を確認している。柱穴の掘り方

第6節 IV区の調査

の直径は20~35cmである。深さは19~32cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は10~15cmである。深さは19~32cmを測る。

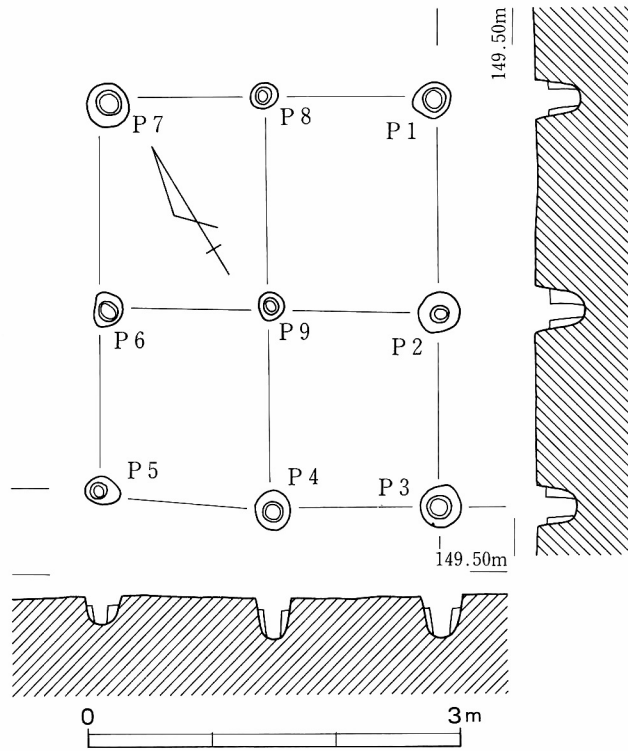
柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礫詰のようなものの存在も確認されなかった。

出土遺物

遺物は出土していない。

時期

遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、中世の掘立柱建物とは方向が同一ではないこと、弥生時代の竪穴住居跡であるSH81を切っていること、SB79と同じ方向性をもってのことから、川除8期と考えたい。



第540図 SB81

SB82

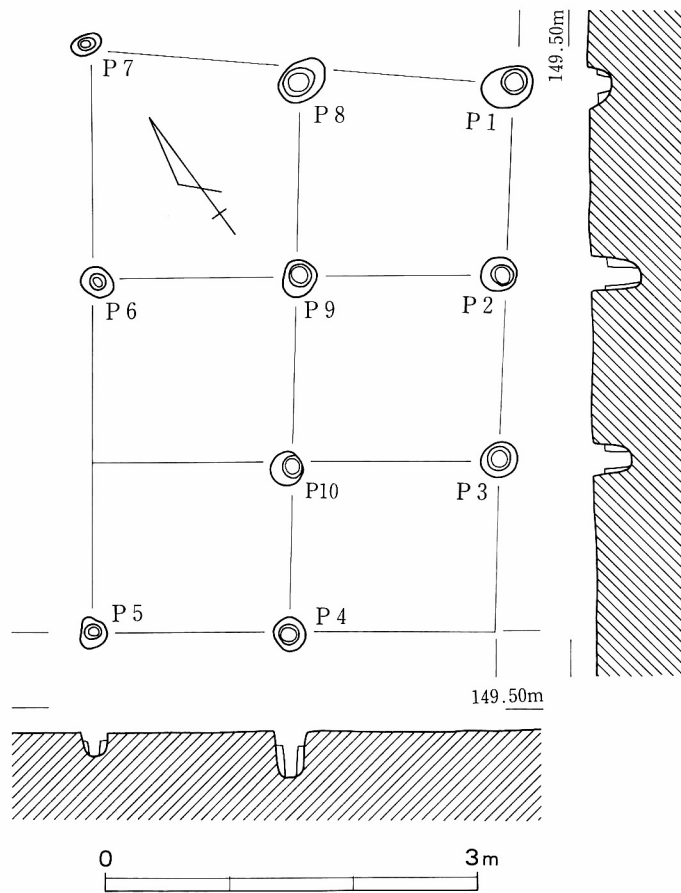
検出状況

IV区の南西部で検出された。小微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の縁辺にあたる。SH80の北東側約3mの場所に位置している。他の遺構との切り合い関係は、SB79・81と重複して検出されている。

形状・規模

N-37°-Eに棟軸の方向をとる桁行3間、梁行2間の掘立柱建物である。柱穴のうち2穴を欠失しているが、東柱の存在している総柱の掘立柱建物である。

規模は桁行方向が4.48m、梁行方向が3.30mと



第541図 SB82

確認された。面積は14.78㎡である。

柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.49m、梁行が1.65mである。

柱穴

柱穴はすべてのものについて、柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡を確認している。柱穴の掘り方の直径は26~38cmである。深さは10~39cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は12~20cmである。深さは10~39cmを測る。

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。

出土遺物

遺物は出土していない。

時期

遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、中世の掘立柱建物とは方向が同一ではないこと、S B79・81と同じ方向性をもっていることから、川除8期と考えたい。

S B 8 4

検出状況

IV区の南西部で検出された。小微高地の単位でいえば、小微高地dの南西部の縁辺にあたる。SH80のすぐ西側に位置している。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模

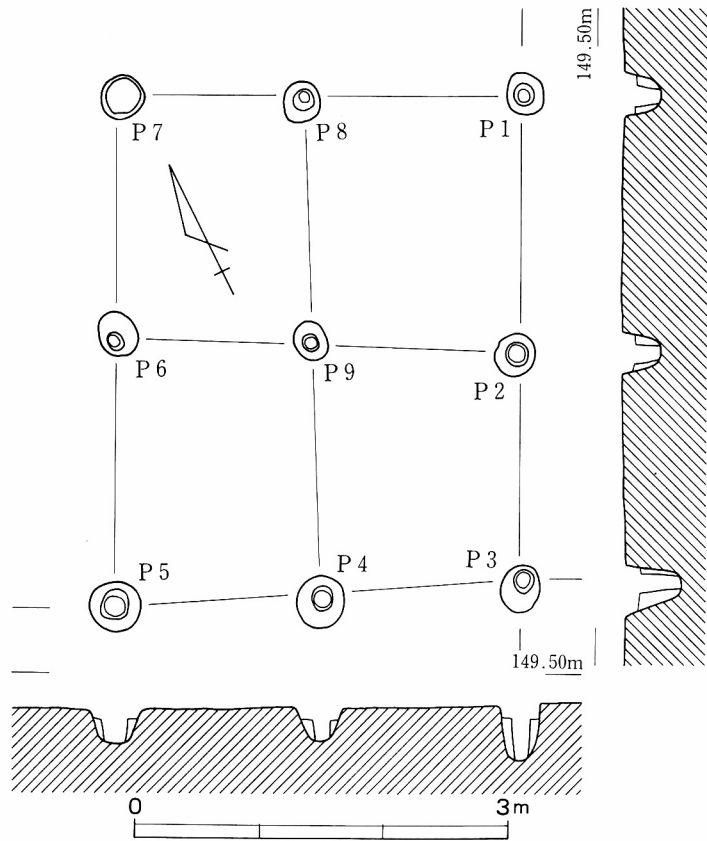
N-30°-Eに棟軸の方向をとる桁行2間、梁行2間の掘立柱建物である。東柱の存在している総柱の掘立柱建物である。

規模は桁行方向が3.92m、梁行方向が3.28mと確認された。面積は12.86㎡である。柱穴間の心々距離の平均値は、桁行が1.96m、梁行が1.64mである。

柱穴

柱穴は北側の隅の妻柱については掘り方のみの検出であるが、残りのものについては柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡を確認している。柱穴の掘り方の直径は26~38cmである。深さは28~48cmを測る。柱痕あるいは柱の抜き取り痕跡の直径は12~16cmである。深さは28~48cmを測る。

柱根は残存していない。また、根固めとしての礎石・礎板、あるいは礎詰のようなものの存在も確認されなかった。



第542図 S B84

第6節 IV区の調査

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物が出土していないため正確な時期は明らかではないが、中世の掘立柱建物とは方向が同一ではないこと、S B 79・81・82とは一連の位置に存在していないが、規模・形状の点で類似点が多いことなどから、川除8期と考えたい。

(3) 土壇

S K 1 2 0

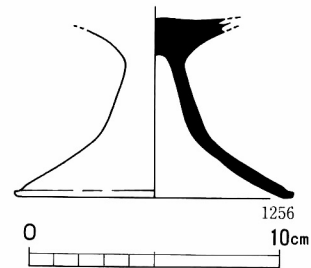
検出状況 IV区のほぼ中央、小微高地dの中央で検出された。弥生時代の掘立柱建物跡S B 76に近接する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は不整形である。規模は、検出面での長径102cm、短径40cmであり、土壇底での長径94cm、短径34cmを測る。検出面から土壇底までの深さは35cmである。断面形は箱形を呈している。

埋土 茶灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物 土師器の甕・壺・高坏などが出土している。
 図化できたのは高坏の下半部1点のみである。柱状部は円錐形を呈し、裾部が大きく広がるものである。

時期 川除8期と考えておく。



第543図 S K 120出土土器

第206表 S K 120出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1256	土師器 高坏	口径 : 底径 : (10.3) 器高 : 残7.1 脚径 : 2.3 体部径 :	外面 : } 磨滅のため調整不明 内面 :	外面 : 橙 内面 : 橙	柱状部完存 裾部1/8	

S K 1 2 1

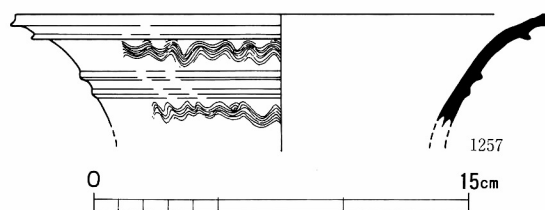
検出状況 IV区の南西部で検出している。小微高地dの南西側の縁辺から約30mに位置している。

形状・規模 形状は円形か楕円形を呈すると思われるが、切り合いの部分是不鮮明であるためどちらかは不明である。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に70cmで、短軸方向に35cmである。土壇底では長軸方向に50cm、短軸方向に35cmである。検出面からの深さは最も深いところで8cmで、断面形は皿形を呈している。底の部分の形状は楕円形を呈していると思われる。

出土遺物 埋土中より須恵器のみが出土している。甕・坏が出土しているが、そのうち図化しているものは1点である。

甕の1点を図化している。口縁部から頸部にかけてのものである。頸



第544図 S K 121出土土器

部中位に2条の凸体が巡っている。波状文を上下2段に施している。口縁部は内外面ともにヨコナデで仕上げている。

時期 川除8期である。

第207表 SK121出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1257	須恵器 甕	口径 : (21.3) 底径 : 器高 : 残4.5 脚径 : 体部径 :	外面 : 口頸部にヨコナデのち、頸部に8条の波状文を2本めぐらす 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰白	口頸部1/7	口縁部に自然軸

SK123

検出状況 IV区の南西部で検出している。小微高地dの南側の縁辺から約25mに位置している。調査区境界に位置している。

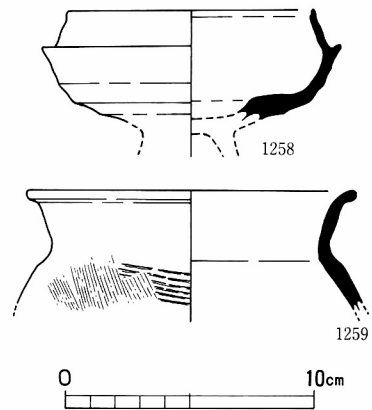
形状・規模 形状は不整形を呈しているが、遺構自体が調査区の範囲外にまでのびていることから、全体の形状は不明である。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に80cmで、短軸方向に44cmである。土壌底では長軸方向に70cm、短軸方向に36cmである。検出面からの深さは最も深いところで5cmで、断面形は皿形を呈している。底の部分の形状は検出面での形状と相似形である。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。須恵器の高坏、土師器の甕、器種不明の小片が出土しているが、そのうち図化しているものは2点である。

高坏 須恵器の1点を図化している。坏部のみが残存で、脚部は欠失している。口縁部は内傾して立ち上がり、口縁端部の内面は段を有している。調整は底部の約1/3に時計回りのヘラケズリを施し、他はヨコナデで仕上げている。

甕 土師器の1点を図化している。口縁部から体部上位にかけてのものである。外傾する口縁部に外方にさらに開く口縁端部をもつ。調整は体部外面に左上がりタタキのちハケで仕上げている。体部内面は横方向のヘラケズリ、口縁部は内外面ともに横方向のナデで仕上げている。



第545図 SK123出土土器

時期 川除8期である。

第208表 SK123出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1258	須恵器 高坏	口径 : (9.8) 底径 : 器高 : 残4.5 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりヨコナデ、底部の2/3に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰白	口縁部・体部約1/4	
1259	土師器 甕	口径 : (13.0) 底径 : 器高 : 残4.7 頸径 : (11.1) 体部径 :	外面 : 口縁部にヨコナデ、左上がりのタタキ(5条/cm)のち斜め方向のハケメ(7条/cm) 内面 : 口縁部にヨコナデ、体部に逆時計回りのヘラケズリ	外面 : 橙 内面 : にぶい黄橙	口縁部から体部上半約1/8	

SK125

検出状況 IV区の南西部で検出している。小微高地dの南側の縁辺から約22mの場所に位置している。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模 形状はややいびつながら円形に近い楕円形を呈している。検出した規模は以下のとおりである。検出された部分は、長軸方向に60cmで、短軸方向に55cmである。土壌底では長軸方向に31cm、短軸方向に30cmである。検出面からの深さは最も深いところで37cmで、断面形はU字形を呈している。底の部分の形状は検出された形状よりもさらに円形に近い。

出土遺物 埋土中より土器のみが出土している。須恵器の甕、土師器の高坏・甕が出土しているが、いずれも小片であることから、図化しているものはない。

時期 出土した土器が小片のため正確な時期は明らかではないが、古墳時代の後期の範疇におさまる時期、川除8期の遺構と考えている。

SK137

検出状況 IV区の北西隅、小微高地dの中央西寄りで検出された。古墳時代の竪穴住居跡SH74・75に近接する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 平面形は不整形である。規模は、検出面での長さ256cm、幅100cmであり、土壌底での長さ210cm、幅50cmを測る。検出面から土壌底までの深さは36cmである。断面形はU字形を呈している。

埋土 3層に分かれ、上層より暗灰色、黄褐色、明灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期 遺物は出土していないため不明確であるが、埋土の類似などから古墳時代の中頃以降、川除8期のものと考えておく。

その他の土壌

以上掲載した土壌の他に、古墳時代後期に属すると判断できた土壌について、一覧表にまとめておく。

第209表 IV区 古墳時代後期その他の土壌一覧表（単位：cm）

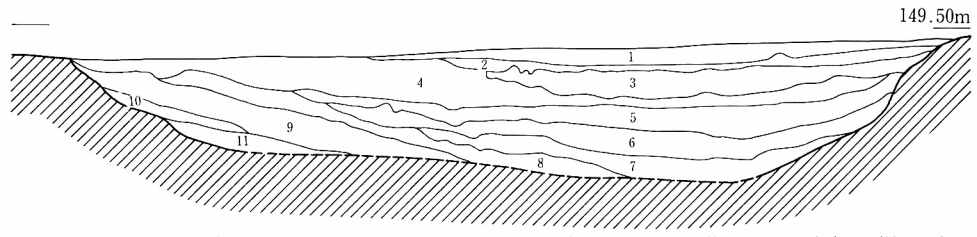
遺構名	規模（検出面）		規模（土壌底）		深さ	平面形	断面形	時期	出土遺物
	長さ	幅	長さ	幅					
SK109	148	76	100	55	15	楕円形	皿形	後期	土師器・壺
SK110	136	72	118	46	17	楕円形	皿形	後期	須恵器・土師器

(4) 溝

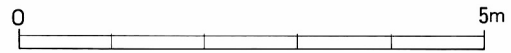
SD86

検出状況 IV区北東部をほぼ南北方向にはしるⅢ区から続く溝である。南側はⅢ区へ続き、北側は調査区外までのびている。中世の土壌SK115を切っている。

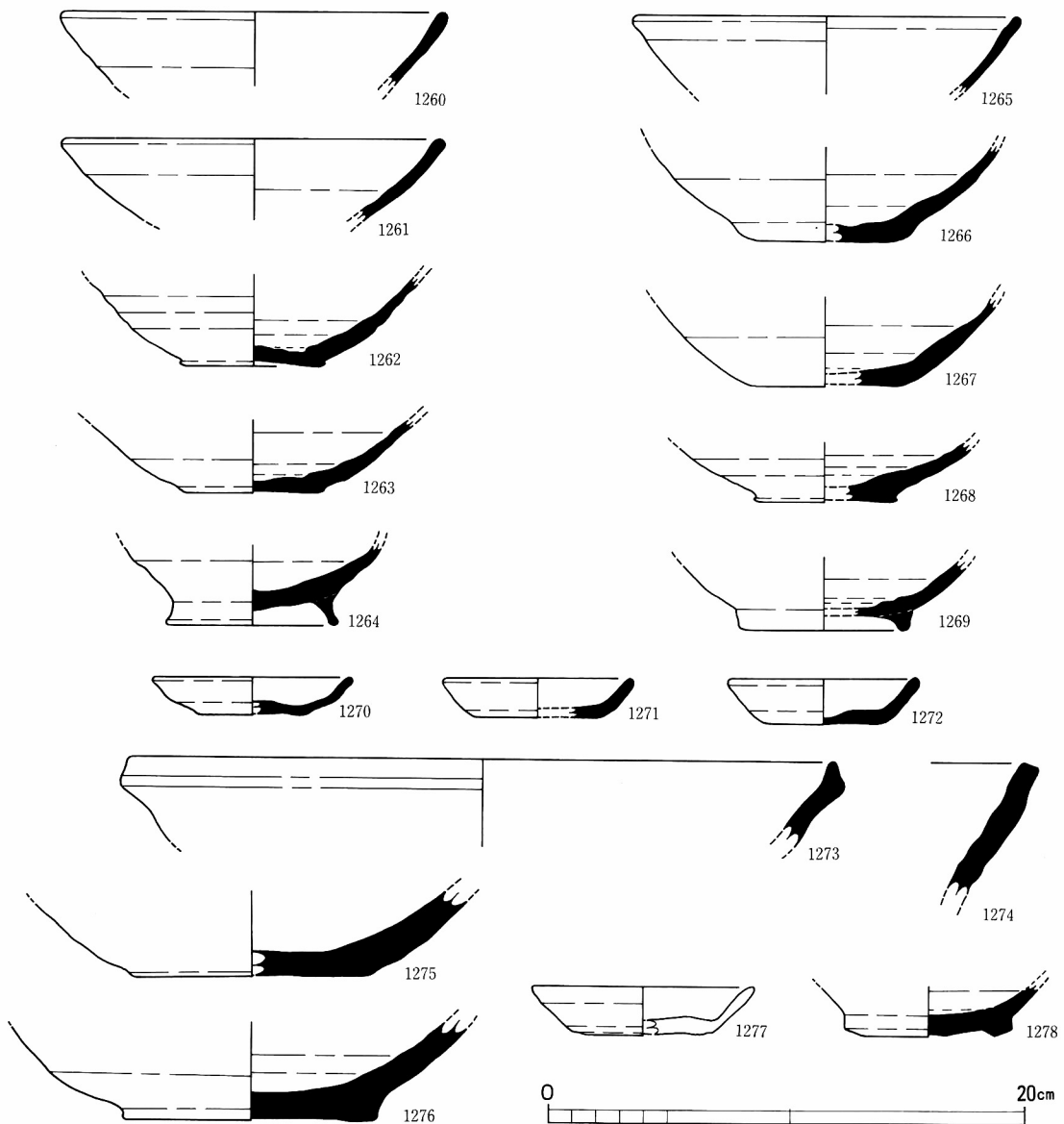
形状・規模 IV区で検出した長さは約55mで、Ⅲ区と合わせて70mとなる。検出面における幅は、最大で17mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは130~150cmである。溝底のレベ



- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 1. 灰色シルト混じり中砂～細砂 | 7. 黒灰色極細砂～細砂混じりシルト(組砂混じる) |
| 2. 黄灰色細砂混じりシルト | 8. 淡黒灰色シルト混じり極細砂～細砂 |
| 3. 暗灰色極細砂混じりシルト (ラミナ有り) | 9. 暗灰色シルト質極細砂 (上層)・細砂～中礫 (下層) |
| 4. 淡黒灰色シルト腐食物若干混入 | 10. 灰色砂質シルト (上層)・砂礫 (下層) |
| 5. 淡黒灰色シルト | 11. 黒灰色シルト質細砂 (上層)・砂礫 (下層) |
| 6. 黒灰色極細砂混じりシルト (ラミナ有り) | |



第546図 SD86横断面



第547図 SD86出土土器

ルは、IV区内ではほぼ一定しており、北端部でその標高は147.90mである。

埋土 第9層・10層と下層に礫を含んだ層がみられるが、これより上の層は、シルト層と極細砂～細砂を含んだシルト層が交互に堆積している。これら、極細砂～細砂を含む層のいくつかはシルトとのラミナが認められた。またラミナが認められない層についても砂とシルトが攪乱された状態であった。以上のことから、何回かにわたって土砂の流入が繰り返され、埋没していったことが理解できる。

出土遺物 埋土中より土器と木製品が出土している。

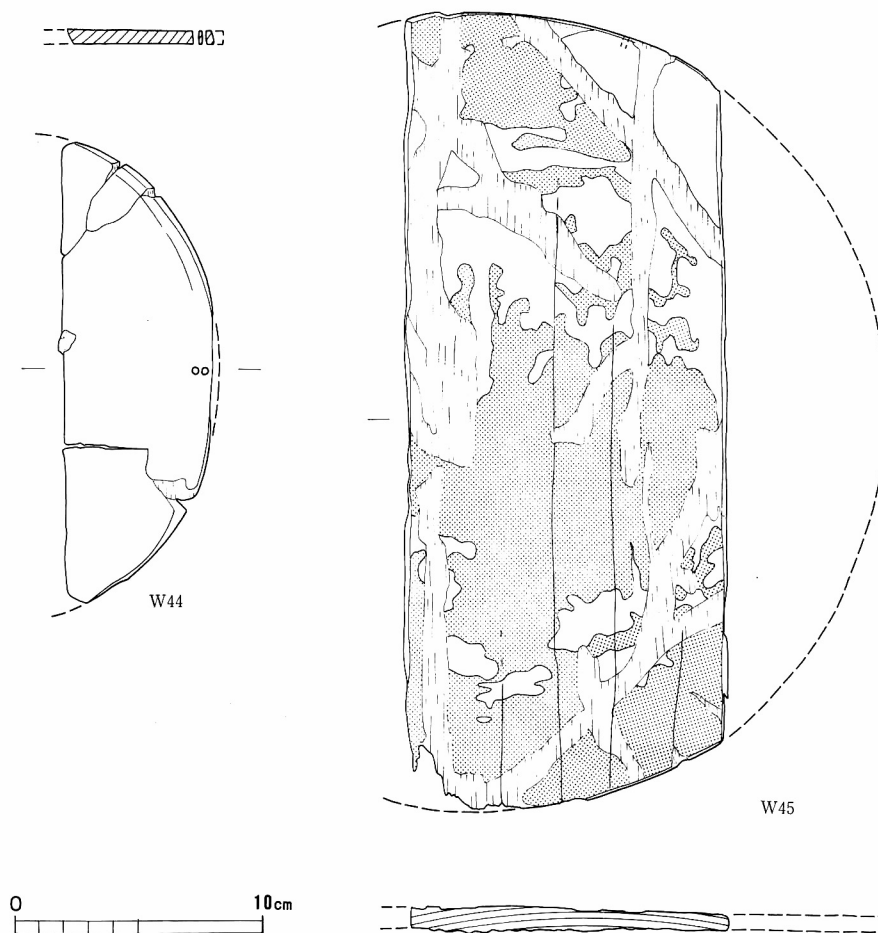
Ⅲ区内においては古墳時代の土器が出土しているが、当地区内においては、最上層からは中世の土器が出土しているのみである。これらの土器は、本溝が埋没した時期を示すものと考えられる。

土器 須恵器・土師器・瓦器・白磁が一括で出土している。なかでも須恵器が量的に最も多く、図化できたのも須恵器が大半を占める。

須恵器 大きく2つの時期にわけることができる。

まず、1267と1275に代表される底部の切離しをへら切りでおこなう一群である。これらの一群は相野窯跡群で焼成されたと考えられるもので、10世紀後半と位置づけられる。1264の高台付椀もこの一群に含まれるものと考えられる。

もう一つは、1264・1267以外の椀および1273・1274・1276の捏鉢に代表される一群であ



第548図 S D 86出土木製品(1)

る。前者の一群より一段階新しい時期と考えられる。

ただし、これらの須恵器と相伴している土師器・瓦器・白磁については、両群と一括で取り上げているため、須恵器に対応する時期を判断することは困難である。

以上の須恵器から判断して、本溝は11世紀後半には完全に埋没し、平坦化したことは明らかである。

木製品 埋土中より、曲物底板・蓋板と矢板が出土している。

曲物 2点出土している。

W45は、約1/3しか残存していないが、径32cmと復元される底板である。厚さは7mmを測る。底板内面は、傷みが激しく凹凸が顕著であるが、板面が残存している部分については黒色の塗布が観察される。黒色のものが何であるかは不明である。また、底板側面では、1ヶ所で木釘穴が認められる。樹種はヒノキである。

矢板 2点出土している。W47は完存しているが、W46は約1/2しか残存していない。2点とも樹種はモミである。

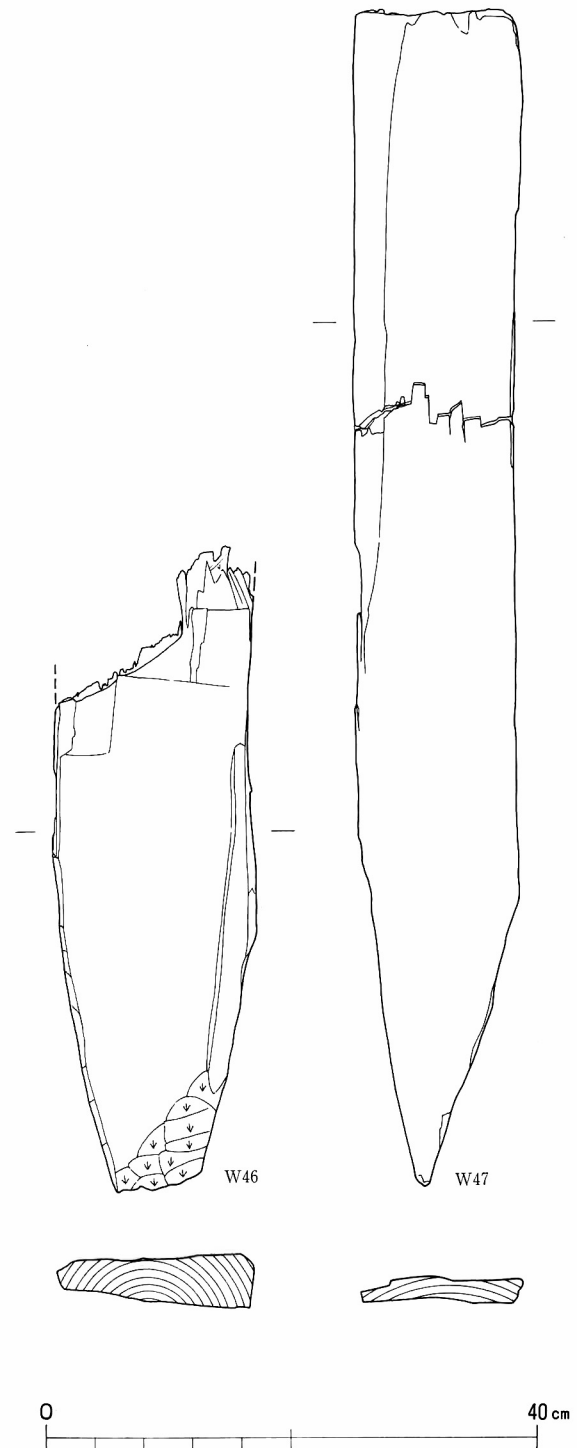
W46は、矢板の先端部約1/2弱の残存であるが、先端部も欠損している。残存長51.3cmを測り、最大幅は15.9cmである。厚さは最大で4.1cmである。

W47は、2つに切断されているが、接合すると完形になる矢板である。

長方形の板の一端をV字形に削り出している。矢板の先端は、打ち込まれたために若干磨滅している。全長94cmを測り、最大幅は13cmである。また厚さは2.1cmである。

時期 すでに述べたとおり、出土土器から、川除9期に掘削され、11世紀後半に完全に埋没したものと考えられる。

遺構の性格 III区溜池の項でも述べたが、III区からII区にかけて展開する水田への灌漑施設と考えられる。特に、本溝から矢板が出土していることから、大規模な土木作業によって掘削され、



第549図 S D86出土木製品(2)

第6節 IV区の調査

その側面を矢板によって補強していたものと考えられる。

なお矢板については、調査の精度が粗かったため2点しか取り上げることができなかったが、本来はもっと多くあったものと考えられる。

第210表 S D 86出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	指数			
1260	須恵器・椀	(15.8)	残3.0	—	—	—	—	灰白～灰	口縁部1/8	
1261	須恵器・椀	(15.5)	残3.4	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	
1262	須恵器・椀	—	残4.7	5.6	—	—	—	灰白	底部1/2・体部僅か	
1263	須恵器・椀	—	残3.0	(5.8)	—	—	—	灰	底部1/2・体部僅か	4mm大の礫含む
1264	須恵器・椀	—	残3.3	7.0	—	—	—	灰白	底部1/2・体部僅か	
1265	須恵器・椀	(15.6)	残3.1	—	—	—	—	灰白	口縁部1/4	
1266	須恵器・椀	—	残3.9	(5.8)	—	—	—	青灰	底部1/2・体部僅か	底部回転糸切り
1267	須恵器・椀	—	残3.7	6.0	—	—	—	灰白	底部・体部僅か	底部へラ起こし
1268	須恵器・椀	—	残2.4	5.6	—	—	—	灰白	底部1/3・体部僅か	底部糸切り
1269	須恵器・椀	—	残2.9	(6.6)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部僅か	
1270	須恵器・小皿	(8.1)	1.6	(4.6)	—	—	19	灰白	1/4	
1271	須恵器・小皿	(7.7)	1.6	(5.2)	—	—	20	灰白	口縁部1/8	
1272	須恵器・小皿	(7.6)	1.9	(5.0)	—	—	25	灰白～明褐灰	口縁部1/8	焼成やや不良
1273	須恵器・捏鉢	(29.2)	残3.6	—	—	—	—	灰	口縁部僅か	
1274	須恵器・捏鉢	—	残6.0	—	—	—	—	灰白	口縁部僅か	
1275	須恵器・捏鉢	—	残3.5	(10.0)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部僅か	底部へラ起こし
1276	須恵器・捏鉢	—	残4.0	10.6	—	—	—	灰白	底部完存・体部僅か	底部回転糸切り
1277	土師器・小皿	(9.2)	2.0	(4.8)	—	—	21	浅黄褐	口縁部1/4・底部1/4	底部ナデ仕上げ
1278	白磁・碗	—	残3.0	7.0	—	—	—	灰白	底部1/2・体部僅か	底部へラ削り

S D 8 9

検出状況 IV区の北西隅、小微高地dの中央西寄りで検出された。古墳時代の竪穴住居跡S H74・75を切っている。S D90に接続しているが、これとの切り合い関係は認められない。

形状・規模 長さは8.00mが確認された。幅は、検出面で0.25～0.45m、溝底で0.18～0.25mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは12～22cmである。溝底の標高は、北端で149.22m、南端で149.30mと高低差はあまりない。

埋土 灰褐色極細砂質シルトが堆積する。

出土遺物 須恵器の蓋杯、土師器の小片が出土している。図化できたものはない。

時期 川除8期である。

S D 9 0

検出状況 IV区の北西隅、小微高地dの中央西寄りで検出された。古墳時代の竪穴住居跡S H74・75を切っている。S D89に接続しているが、これとの切り合い関係は認められない。

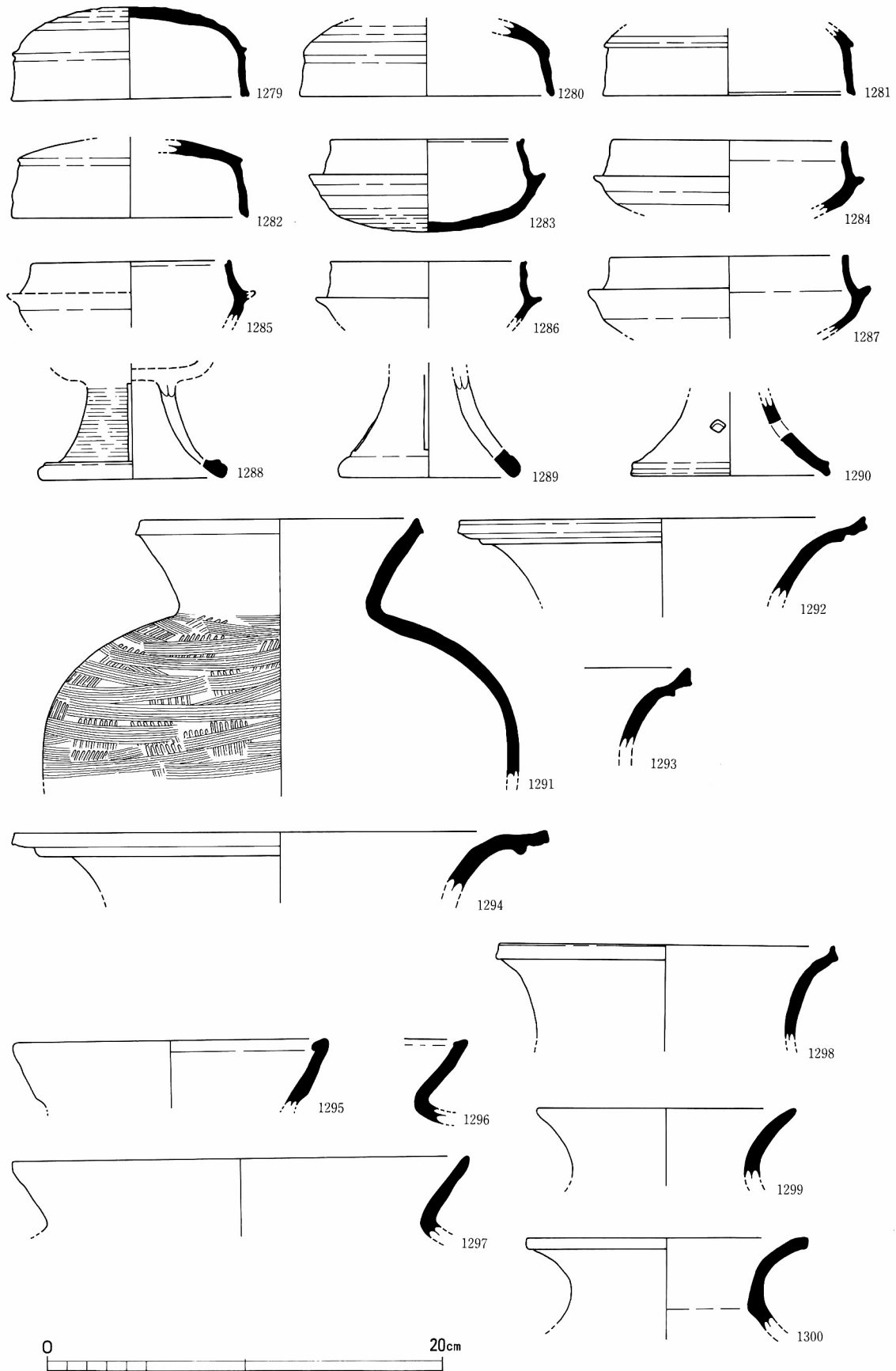
- 形状・規模** 長さは15.0mが確認された。幅は、検出面で0.35～0.64m、溝底で0.10～0.30mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは12～21cmである。溝底の標高は、北端で149.34m、南端で149.30mと高低差はあまりない。
- 埋土** 灰褐色極細砂質シルトが堆積する。
- 出土遺物** 須恵器の甕・蓋杯、土師器の甕および器種不明の小片が出土している。図化できたものではなく、時期の詳細な検討のできる資料もない。
- 時期** 川除8期である。

SD91

- 検出状況** IV区の北西隅、小微高地dの中央西寄りで検出された。古墳時代の竪穴住居跡SH74・75の南東方向で、これらの主軸に直交する形で検出された。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 長さは18.0mが確認された。幅は、検出面で0.40～1.15m、溝底で0.20～0.95mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは3～24cmである。溝底の標高は、北端で149.28m、南端で149.41mと高低差はあまりない。
- 埋土** 灰色シルト質極細砂が堆積する。
- 出土遺物** 遺物は出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないことから詳細な時期は不明であるが、埋土の類似および溝の方向性から川除8期と考えて大過ないと思われる。

SD92 (図版153)

- 検出状況** IV区の中央部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地dの中央部にあたり、この小微高地の南側の落ち際に流れこんでいる。溝の方向は小微高地の方向に直交方向に検出され小微高地を縦断して検出されている。方向は調査区の北側では北北西から南南東の方向をとり、約20mの位置で屈曲してほぼ北から南の方向に向きを変える。北から南方向に約25m検出されたのちは、その方向を北東から南西方向にふたたび変えている。北東から南西方向に屈曲した地点から約45mの間はSD96と重複して検出されている。前後関係はSD96に切られていることから、当遺構のほうがより古い時期である。当遺構は北側の調査区範囲外にも伸びている。
- 形状・規模** 長さは検出された部分のみでいえば145mが検出された。溝の方向ごとにいえば、北北西から南南東方向に約20m、北から南の方向に約25m、北東から南西方向には約100mの長さである。
- 幅は検出面で0.70～1.20m、溝底で0.55～0.70mを測る。溝の幅は北側と南側で比較的狭く、中央部にいくにしたがって次第に広がっている。小微高地の最も標高の高い地点で、溝の幅が広がっているようである。断面形は基本的にU字形を呈するが一部で台形を呈している。
- 検出面からの深さは19～36cmであり、溝底の標高は北側で149.10m、南側で148.84mと北側から南側に向かって流れている。基本的に小微高地から南側の落ちに向かっていて



第550図 S D92出土土器

あるが、微高地の落ちきった位置でも溝の形態をとどめてのびている。

出土遺物

遺物は土器のみが出土している。

須恵器の蓋・坏・高坏・甕、土師器の壺・甕が出土している。弥生時代後期の土器も混入したかたちで出土している。

出土した土器のうち図化しているものは22点である。

須恵器

16点を図化している。

蓋

天井部の丸いものと、やや平らなものに分けられる。体部と天井部境の稜は、明瞭なものやや甘いものに分けられる。

坏

たちあがり直立ぎみのもの、内傾しているものがある。端部は水平なもの、丸くおさめるもの、内面に窪みをもつものに分けられる。ヘラケズリは時計回りのものと、逆時計回りのものがある。

高坏

3点図化しているがいずれも脚部である。長方形の透しを穿つものと、正方形の透しを穿つものが出土している。

甕

4点図化している。1291は体部に縦方向のタタキのち横方向のカキメを施している。他のものは口縁部のみの出土である。

土師器

6点を図化している。

甕

3点を図化している。口縁部が内傾してたちあがり口縁端部の内側を肥厚させているものが2点、やや直線気味にたちあがり口縁端部を尖らせているものが1点である。

壺

3点図化している。口縁端部を尖らせているものと、面取りを行って、断面形が角頭を呈するものがある。

時期

川除8期である。

第211表 S D92出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1279	須恵器 蓋	口径 : (12.3) 底径 : 器高 : 5.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ヨコナデ、天井部の2/3に逆時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデのち中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	天井部・体部約4/5	
1280	須恵器 蓋	口径 : (12.7) 底径 : 器高 : 残3.7 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ヨコナデ、天井部の4/5に時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰白	天井部・体部約1/4	
1281	須恵器 蓋	口径 : (12.6) 底径 : 器高 : 残3.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 体部ヨコナデ、天井部の4/5に回転ヘラケズリ(方向は不明) 内面 : 体部ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	天井部・体部約1/8	
1282	須恵器 蓋	口径 : (11.9) 底径 : 器高 : (3.9) 頸径 : 体部径 :	外面 : 天井部全面に時計回りの回転ヘラケズリ、体部にヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	天井部・体部約1/8	
1283	須恵器 坏	口径 : (9.8) 底径 : 器高 : 4.7 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ、底部の4/5に逆時計回りの回転ヘラケズリ 内面 : ヨコナデ、中央に仕上げナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	たちあがり・底部1/4	
1284	須恵器 坏	口径 : (11.6) 底径 : 器高 : 残3.6 頸径 : 体部径 :	外面 : 底部に時計回りの回転ヘラケズリ、たちあがりにヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰	口縁部1/8	
1285	須恵器 坏	口径 : (10.0) 底径 : 器高 : (3.0) 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ 内面 : たちあがりにヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	たちあがり約1/12	
1286	須恵器 坏	口径 : (10.0) 底径 : 器高 : 残2.9 頸径 : 体部径 :	外面 : たちあがりにヨコナデ 内面 : たちあがりにヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	たちあがり・底部1/8	

第212表 S D92出土土器観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	調整	色調	残存率	備考
1287	須恵器 坏	口径 : (12.0) 底径 : 器高 : 残3.9 頸径 : 体部径 :	外面 : ヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/8	焼成不良
1288	須恵器 高坏	口径 : 底径 : (9.2) 器高 : 残4.8 頸径 : 体部径 :	外面 : 脚部にカキメののち4ヶ所の長方形透しを穿つ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	脚部約1/4	
1289	須恵器 高坏	口径 : 底径 : (8.8) 器高 : 残5.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 脚部にヨコナデののち4ヶ所の長方形透しを穿つ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	脚部約1/4	
1290	須恵器 高坏	口径 : 底径 : (10.0) 器高 : 残3.9 頸径 : 体部径 :	外面 : 脚部にヨコナデののち正方形の透しを穿つ(孔数不明) 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	脚部約1/4	
1291	須恵器 甕	口径 : (14.0) 底径 : 器高 : 残7.9 頸径 : (10.2) 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ、体部に縦方向のタタキ(4条/cm)ののち横方向のカキメ 内面 : 口縁部ヨコナデ、体部にユビオサエののちナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	口縁部1/2 体部1/10	
1292	須恵器 甕	口径 : (20.6) 底径 : 器高 : 残4.0 頸径 : 体部径 :	外面 : 口頸部ヨコナデ 内面 : 口頸部ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/12	
1293	須恵器 甕	口径 : 底径 : 器高 : 残3.9 脚径 : 体部径 :	外面 : ヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 灰白 内面 : 灰白	口縁部1/10	口縁部内面に自然釉
1294	須恵器 甕	口径 : (27.0) 底径 : 器高 : 残3.0 脚径 : 体部径 :	外面 : ヨコナデ 内面 : ヨコナデ	外面 : 赤灰 内面 : 灰赤	口縁部1/8	口縁部外面に自然釉
1295	土師器 甕	口径 : (15.5) 底径 : 器高 : 残3.3 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 浅黄橙	口縁部1/8	
1296	土師器 甕	口径 : 底径 : 器高 : 残4.2 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部にヨコナデ 内面 : 口縁部にヨコナデ	外面 : にぶい橙 内面 : にぶい橙	口縁部1/8	
1297	土師器 甕	口径 : (23.0) 底径 : 器高 : 残4.1 頸径 : 体部径 :	外面 : 口縁部ヨコナデ 内面 : 口縁部ヨコナデ	外面 : にぶい橙 内面 : にぶい橙	口縁部1/8	
1298	土師器 甕	口径 : (17.0) 底径 : 器高 : 残4.1 頸径 : (13.0) 体部径 :	外面 : 口頸部ヨコナデ 内面 : 口頸部ヨコナデ	外面 : 灰 内面 : 灰	口縁部1/8	
1299	土師器 壺	口径 : (13.0) 底径 : 器高 : 残4.5 頸径 : (9.6) 体部径 :	外面 : 口頸部ヨコナデ 内面 : 口頸部ヨコナデ	外面 : 浅黄橙 内面 : 灰白	口縁部1/6	
1300	土師器 壺	口径 : (14.2) 底径 : 器高 : 残4.6 頸径 : (10.0) 体部径 :	外面 : 口頸部ヨコナデ 内面 : 口頸部ヨコナデ、体部は磨滅のため調整不明	外面 : 橙 内面 : 橙	口縁部1/7	

S D 9 5

検出状況 IV区の北西部、小微高地dの中央で検出された。西端を古墳時代の竪穴住居跡S H77に切れ、東端はしだいに浅くなって消滅する。

形状・規模 長さは20.0mが確認された。幅は、検出面で0.32~0.65m、溝底で0.18~0.32mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは5~15cmである。溝底の標高は、東端で149.31m、西端で149.36mと高低差はあまりない。

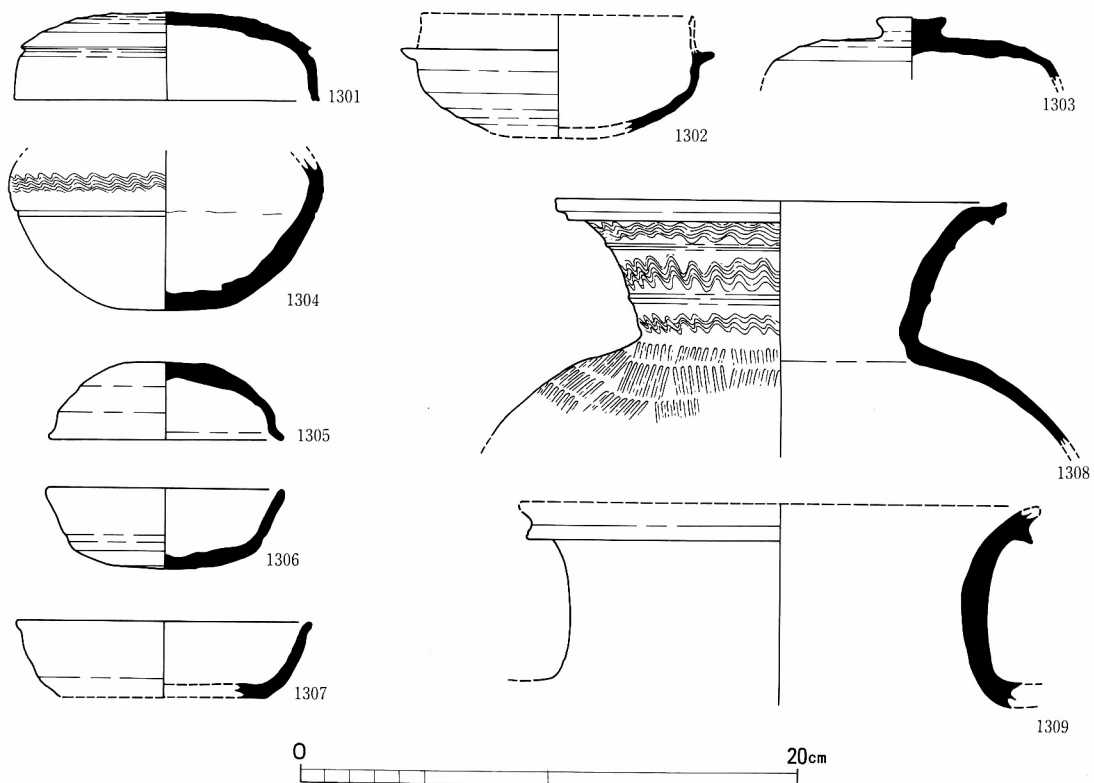
埋土 灰褐色シルト質極細砂が堆積する。

出土遺物 須恵器の甕、土師器の器種不明の小片が出土している。

時期 川除8期と考えられる。

SD96 (図版154・155)

- 検出状況** IV区のはほぼ中央を北東から南西方向に走行する溝である。小微高地dの中央を横断し、SD92・SD137を切りながら、南西方向の低地へと伸びている。北端は古墳時代の竪穴住居跡SH72の北側であり、それを取り巻くように屈曲したのち、直線的にのびる溝である。南端はしだいに浅くなって消滅している。
- 形状・規模** 長さは149mが確認された。幅は、検出面で1.00~2.50m、溝底で0.80~1.90mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは6~28cmである。溝底の標高は、北端で149.33m、南端で148.93mである。
- 埋土** 地点ごとに埋土の差があるが、灰色シルト質極細砂などの細粒堆積物が認められる。
- 出土遺物** 須恵器の坏・蓋・高坏・甗・甗、土師器の高坏・甗・甗・土鍾などが出土しており、図化したのはそのうち、須恵器9個体、土師器18個体である。
- 須恵器**
- 杯** 坏には、古墳時代一般にみられる受部とたちあがりをもつ坏と、やや丸みをもつ底部から直線的にのびる体部をもっているいわゆる坏Aの2種が含まれている。
 - 蓋** 坏・高坏・坏Aのものが存在する。1301は天井部と体部の境には凹線が巡る。
 - 甗** 体部下半の破片である。波状文と凹線が認められる。
 - 甗** 口頸部に楕円波状文を施文するもの(1308)、無文のもの(1309)がある。
- 土師器**
- 甗** 甗は口縁部が内湾し、口縁端部が内側に肥厚するいわゆる布留系の甗と、外傾する口縁部の端部を丸くおさめるものの2種類のものがある。
 - 壺** 直立する頸部と外反する口縁部をもつものが出土している。
 - 高坏** 坏部の破片には碗形のもの他に、体部と口縁部との境が明瞭なものがある。



第551図 SD96出土土器(1)